

九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事にともなう
埋蔵文化財調査報告書第2集

NO KU BI
野 久 首 遺 跡
HIRA BARU
平 原 遺 跡
MYÔ KEN
妙 見 遺 跡

1994・3

宮崎県教育委員会

九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事にともなう
埋蔵文化財調査報告書第2集

NO KU BI
野 久 首 遺 跡

HIRA BARU
平 原 遺 跡

MYÔ KEN
妙 見 遺 跡

1994・3

宮崎県教育委員会

巻頭原色図版



1 野久首遺跡近景



2 野久首遺跡 弥生土器 (11)



3 平原遺跡調査状況



4 平原遺跡「埋甕」遺構検出状況



5 平原遺跡 SD 1 検出状況



6 平原遺跡 SD 2 出土土器 (24~27)



7 妙見遺跡鳥瞰



8 妙見遺跡近景



9 妙見遺跡層序



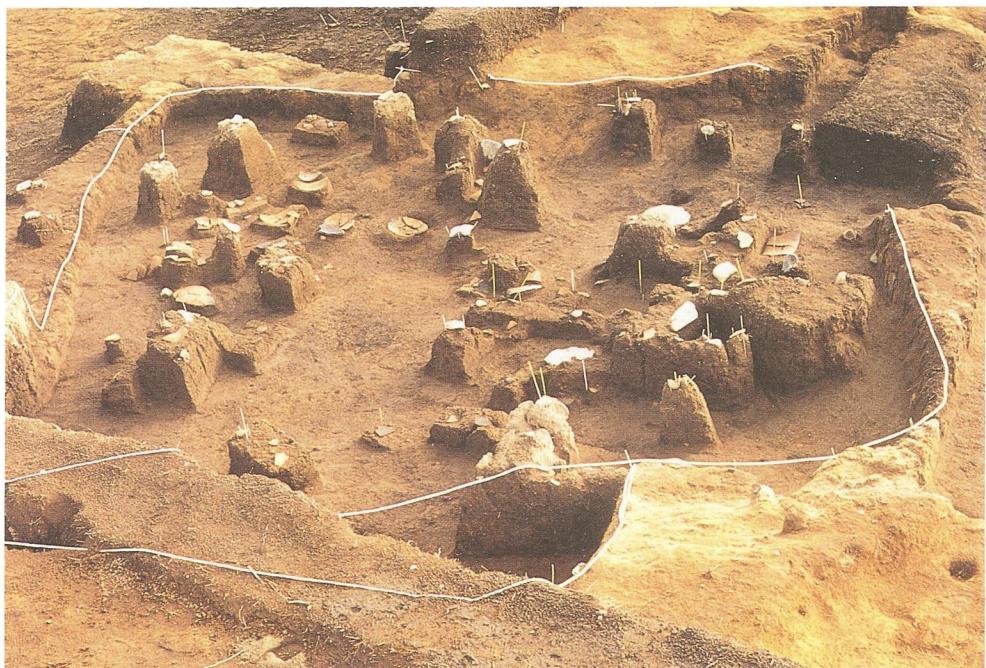
10 妙見遺跡早期面検出状況



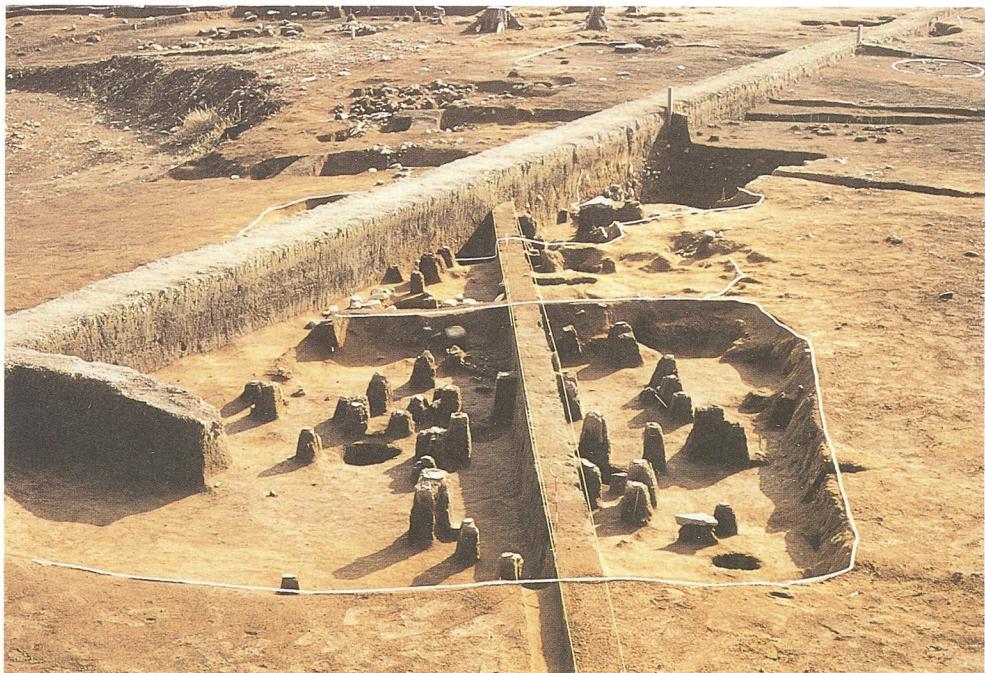
11 妙見遺跡 S I 7 検出状況



12 妙見遺跡 土器(53) 出土状況



13 妙見遺跡 SA 8・SA 9



14 妙見遺跡 SA 17～SA 20



15 S A 24



16 S E 1 覆土(2)

序

宮崎県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の委託を受け、平成2年度から3年度にかけて九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施いたしました。発掘調査の対象となったのはえびの市・野久首遺跡、平原遺跡、妙見遺跡の3遺跡であります。

調査の結果、旧石器時代から近世に至る長い間の先人達の生活の跡を検出することができ、なかでも縄文時代早期の多量の土器、石器の出土や古墳時代の集落跡、古代の墓などは注目すべき成果であります。

本書が学術関係者をはじめ社会教育・学校教育の中で役立てられ、文化財保護の一助となることを期待します。

また、調査に際し、多大なご協力をいただいたえびの市教育委員会をはじめ終始熱心に発掘調査に従事していただいた地元の方々及び各関係機関に対しまして厚く感謝申し上げます。

平成6年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山義孝

凡　　例

1. 本書は、平成2・3年度に実施した九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設工事にともなう野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡の発掘調査報告である。
先に刊行された『九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事にともなう埋蔵文化財試掘調査報告書』は、『九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事にともなう発掘調査報告書』第1集と読み替えるものとする。
2. 発掘調査は日本道路公団福岡建設局の委託を受け、宮崎県教育委員会が実施した。
3. 本書の編集は吉本正典が行なった。
4. 本書の執筆は、第Ⅳ章第3節と、第4節の(14)を戸高眞知子が、残りは吉本が行なった。
5. 発掘調査における記録の一部は、コンピュータ・システム株式会社の測量システムによる。
6. 層位の説明中の土色は、『新版標準土色帖』による。
7. 本書に使用した方位は、全て1990・1991年における磁北である。ただし、付図1・2のそれのみグリッド北である。
8. 第Ⅰ章の図1は、国土地理院発行の5万分の1地形図『加久藤』による。
9. 図面類、遺物の整理は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行なった。遺物の実測・拓本・計測・製図・写真撮影などについては、整理補助員の補助のもと、吉本・戸高がこれにあたった。
10. 石器の石材の固定については宍戸章氏の協力を得た。
11. 出土遺物及び調査記録類は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の地理的・歴史的環境	2
第4節	本報告書の記について	
第Ⅱ章	野久首遺跡	9
第1節	調査の概要	9
第2節	層序	9
第3節	古墳時代の遺構と遺物	13
第4節	その他の時代の遺構と遺物	15
第5節	まとめ	24
第Ⅲ章	平原遺跡	31
第1節	調査の概要	31
第2節	層序	31
第3節	古墳時代の遺構と遺物	32
第4節	古代の遺構と遺物	32
第5節	その他の時代の遺構と遺物	48
第6節	まとめ	51
第Ⅳ章	妙見遺跡	59
第1節	調査の概要	59
第2節	層序	59
第3節	旧石器時代の遺物	60
第4節	縄文時代の遺構と遺物	70
第5節	古墳時代の遺構と遺物	146
第6節	中世の遺構と遺物	225
第7節	まとめ	232
第Ⅴ章	理化学的検討	289
第1節	野久首遺跡におけるプラントオパール分析	289
第2節	妙見遺跡出土の木材炭化物	299
第VI章	総括	303

挿 図 目 次

第Ⅰ章				
図1 遺跡の位置と周辺遺跡	5	図12 陶磁器実測図	43	
		図13 石器実測図1	48	
		図14 石器実測図2	49	
第Ⅱ章		図15 土師器杯の法量の分布	52	
図1 野久首遺跡調査区の状況	10			
図2 A-1~8区西壁層位	11~12	第Ⅳ章		
図3 B-4~8区南東壁層位	11~12	図1 妙見遺跡古墳時代~中世遺構検出状況	61・62	
図4 S A 1	14	図2 妙見遺跡縄文時代早期遺構検出状況	63・64	
図5 S A 1 出土土器実測図	16	図3 F-3区東壁層位1	65・66	
図6 土器実測図1	16	図4 F-3区東壁層位2	65・66	
図7 土器実測図2	17	図5 F-4区東壁層位	65・66	
図8 土器・磁器実測図	18	図6 F-5・6区東壁層位	65・66	
図9 陶器実測図	19	図7 F-9・10区東壁層位	67・68	
図10 石器実測図1	22	図8 G-2区南壁層位および		
図11 石器実測図2	23		III b層直下遺物出土状況	67・68
		図9 石器実測図1	69	
第Ⅲ章		図10 D-8区遺物出土状況	71・72	
図1 平原遺跡調査区の状況	33~34	図11 D-8区出土土器実測図1	73	
図2 D~H-10区北壁層位	35~36	図12 D-8区出土土器実測図2	74	
図3 F-9~10区東壁層位	35~36	図13 D-8区出土土器実測図3	75	
図4 「埋甕」出土状況	37	図14 D-8区出土土器実測図4	76	
図5 「埋甕」実測図	38	図15 D-8区出土土器実測図5	77	
図6 土器実測図	38	図16 C-9区遺物出土状況	79・80	
図7 S D 1・S D 2	39	図17 C-9区出土土器実測図1	81	
図8 S D 1 出土土器実測図	40	図18 C-9区出土土器実測図2	82	
図9 S D 2 出土土器実測図	40	図19 D-9区遺物出土状況	83・84	
図10 土器実測図2	41	図20 D-9区出土土器実測図1	85	
図11 土器・金属加工製品実測図	42	図21 D-9区出土土器実測図2	86	

図22	D-9区出土土器実測図3	87	図52	土器実測図20	115
図23	G-2区出土土器実測図	87	図53	土器実測図21	117
図24	S I 7	88	図54	土器実測図22	118
図25	S I 8	88	図55	土器実測図23	119
図26	S I 9	89	図56	土器実測図24	120
図27	S I 7出土土器実測図	89	図57	石器実測図2	135
図28	S I 10	90	図58	石器実測図3	137
図29	S I 11	90	図59	石器実測図4	139
図30	S I 11出土土器実測図	90	図60	石器実測図5	141
図31	S I 12	91	図61	石器分布図	143
図32	S I 13	91	図62	S A 2	146
図33	土器実測図1	95	図63	S A 2出土土器実測図	149
図34	土器実測図2	96	図64	S A 2出土金属加工製品実測図	150
図35	土器実測図3	97	図65	S A 2出土鉄器実測図	150
図36	土器実測図4	98	図66	S A 3・S A 22	151
図37	土器実測図5	99	図67	S A 3出土土器実測図	152
図38	土器実測図6	100	図68	S A 4・S A 14	152
図39	土器実測図7	101	図69	S A 4出土土器実測図	153
図40	土器実測図8	102	図70	S A 4・S A 14出土石器・土器実測図	154
図41	土器実測図9	103	図71	S A 5・S A 6	155
図42	土器実測図10	104	図72	S A 5・S A 6出土土器実測図	156
図43	土器実測図11	105	図72	S A 7	157
図44	土器実測図12	106	図74	S A 7出土土器実測図	157
図45	土器実測図13	108	図75	S A 8・S A 9	158
図46	土器実測図14	109	図76	S A 8・S A 9出土土器実測図	159
図47	土器実測図15	110	図77	S A 9出土土器実測図	160
図48	土器実測図16	111	図78	S A 9出土鉄器実測図	160
図49	土器実測図17	112	図79	S A 10	161
図50	土器実測図18	113	図80	S A 10出土土器実測図	161
図51	土器実測図19	114	図81	S A 11	163

図82	S A 11出土土器実測図	163	図112	S A 29出土土器実測図 1	191
図83	S A 12・S A 42	164	図113	S A 29出土土器実測図 2	192
図84	S A 12出土土器実測図 1	165	図114	S A 30	193
図85	S A 12出土土器実測図 2	166	図115	S A 30出土土器実測図	193
図86	S A 12・S A 42出土土器実測図	167	図116	S A 32	194
図87	S A 13	168	図117	S A 32出土土器実測図	194
図88	S A 13出土土器実測図	168	図118	S A 33	195
図89	S A 15	169	図119	S A 33出土土器実測図	195
図90	S A 15出土土器実測図	169	図120	S A 34	195
図91	S A 16	169	図121	S A 34出土土製品実測図	195
図92	S A 17・S A 19	170	図122	S A 34出土土器実測図	196
図93	S A 17・S A 19出土土器実測図	172	図123	S A 35	197
図94	S A 19出土土器実測図	173	図124	S A 35出土土器実測図	197
図95	S A 18・S A 21	174	図125	S A 36・S A 37	198
図96	S A 18出土土器実測図	175	図126	S A 36・S A 37出土土器実測図	199
図97	S A 18・S A 21出土土器実測図	176	図127	S A 38	201
図98	S A 24	178	図128	S A 38出土土器実測図	202
図99	S A 24出土土器実測図 1	179	図129	S A 39	203
図100	S A 24出土土器実測図 2	180	図130	S A 39出土土器実測図	203
図101	S A 24出土土器実測図 3	181	図131	S A 40出土土器実測図	205
図102	S A 24出土土器実測図 4	182	図132	S A 41出土土器実測図	205
図103	S A 24出土土器実測図 5	183	図133	S C 8	206
図104	S A 25出土土器実測図	185	図134	S C 8出土土器実測図	206
図105	S A 26	186	図135	S C 4・S C 5	207
図106	S A 26出土土器実測図	187	図136	S C 4出土土器実測図	207
図107	S A 27出土土器実測図	187	図137	S C 6・S C 7	207
図108	S A 28・S A 31	188	図138	S C 9	207
図109	S A 28出土土器実測図	189	図139	S C 10・S C 11	208
図110	S A 31出土土器実測図	190	図140	S C 10・S C 11出土土器実測図	208
図111	S A 29	191	図141	S C 12	209

図142	S C 12出土土器実測図	209
図143	S C 13	210
図144	S C 14	210
図145	S E 1～S E 8 包含層出土土器実測図	211
図146	包含層出土土器・玉類実測図	212
図147	S A 1	226
図148	S A 1 出土石鍋	226
図149	S B 1	227
図150	S E 1・S E 2	228
図151	S E 1・S E 2土層断面	229
図152	S E 1～S E 8 包含層出土土器・陶磁器実測図	230
図153	土器型式と出土層位	235
図154	手向山式～平椁式器形と文様	235
図155	主要器種の変遷	240

第Ⅰ章　はじめに

第1節 調査に至る経緯

九州縦貫自動車道は、人吉とえびのの間が未開通で残っており、この区間の建設に先立つて、昭和57（1982）年12月と昭和61年7月に分布調査が宮崎県教育委員会によって実施され路線内に5遺跡を確認している。その後、日本道路公団福岡建設局からの依頼により、平成2（1990）年1月～3月に試掘調査が行なわれた。平原遺跡、天神後第二遺跡、妙見遺跡、野久首遺跡、彦川遺跡の試掘調査の結果は、『九州縦貫自動車道建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』（『試掘調査報告書』）に詳しいが、5遺跡のうちの平原遺跡、妙見遺跡、野久首遺跡について、遺物包含層が遺存することが確認された。

その後、文化財保護についての協議の場が持たれたが、現状保存は困難のことから、上記3遺跡について記録保存の措置がとられることになった。平成2（1990）年4月1日付けで日本道路公団福岡建設局と宮崎県との間の委託契約が締結され、調査が開始された。

第2節 調査の組織

調査は宮崎県教育委員会が主体となって実施した。調査組織は以下の通りである。

教 育 長	児玉 郁夫（平成2年度）
	高山 義孝（平成3年度～）
教 育 次 長	増井 宏（平成2年度）
	安田 天祥（平成3～4年度）
	八木 洋（平成5年度）
文 化 課 長	高山 義孝（平成2年度）
	宮路 幸雄（平成3～4年度）
	中田 忠（平成5年度）
文 化 課 長	梨岡 孝（平成2年度）
	長友 巍（平成3年度）
	甲斐 教雄（平成4年度～）
課 長 補 佐	片野坂次彦（平成2年度）
	串間 安園（平成3～4年度）
	田中 雅文（平成5年度）
主幹兼庶務係長	小倉 茂光（平成2年度）
庶 務 係 長	税田 輝彦（平成3年度～）
（調査担当）	
埋蔵文化財係長	岩永 哲夫（平成2年度～平成5年度 主幹兼埋蔵文化財第一係長）
埋蔵文化財係主事	吉本 正典（平成2年度～）
々 調査員	吉永 真也（平成2年度）

埋蔵文化財調査員 戸高眞知子（平成3年度、平成4年度～主事）
△ 中津川 浩（平成3年度）
特別調査員 河瀬 正利（広島大学文学部助教授 平成3年度）
調査協力
(樹種鑑定) 大塚 誠（宮崎大学農学部講師）

第3節 遺跡の位置と環境

(1) 自然地理的環境

まず、遺跡の所在する宮崎県えびの市周辺の地形・地質について概観する。
宮崎県の南西端に位置するえびの市は、県下で唯一、東シナ海に注ぐ川内川水系の流域に含まれる。川内川は、鉄山川・池島川・長江川などの小河川を集めながら、市中心部に広がる加久藤盆地を東に流れている。加久藤盆地は東西20km、南北6kmのやや細長い形を呈している。この加久藤盆地の成因についてはカルデラ説、堰止め湖説等の諸説がある。盆地の北側には国見山、百貫山、矢岳山、滝下山など、標高約700～800m級の山地が連なっており、前記のカルデラ説をとった場合、それらの山地の山壁がカルデラ壁にあたる。更新世中期にはカルデラ内に水がたまり、「加久藤湖」が成立し、その後の新期霧島火山の活動やカルデラ壁の崩落に伴う堆積物（加久藤層群と総称される）、姶良カルデラの噴出物である入戸火碎流（約22,000年B.P. 盆地東部に顕著に見られる）の流入により埋まっていったと考えられている。さらに川内川の下刻により高位段丘、低位段丘の順に河岸段丘が形成されていった。現在の市街地は沖積低地にのるが、度々氾濫し、被害を被ったことが文献等に記されている。

今回調査を行なった3遺跡は、いずれも北部山地と川内川沿いの低地との接点付近の、丘陵状の台地地形上に立地する。前述の加久藤層群や段丘堆積物が基盤となる。

(2) 人文地理的側面

野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡は、いずれも行政区上では宮崎県えびの市大字東川北に属する。えびの市は宮崎県の南西部に位置し、北は熊本県人吉市ほか1町1村と、西から南にかけては鹿児島県大口市・吉松町など1市5町と、東は小林市と接する。昭和41年、飯野町、加久藤町、真幸町の3町が合併してえびの町となり、昭和45年に市制を施行している。市制施行後、人口は減少しており、現在では3万人弱となっているが、これは米作、畜産といった農業や、霧島・屋久国立公園を擁する観光といった基幹産業の不振に起因すると見られる。近年は、九州自動車道と宮崎自動車道の分岐点（えびのJCT）とインターチェンジが設けられ、宮崎・熊本・鹿児島の3県の中央付近に位置するという地理的な優位性に注目

が集まっている。このことは、古来より日向・肥後・薩摩の接点にあり、(近代の鉄道輸送では隣の吉松町にその地位を奪われたが) 交通の要衝となっていた当地域の再評価に他ならない。

(3) 遺跡をとりまく歴史

加久藤盆地とその周辺地域の主要遺跡に触れながら、特に今回報告を行なう 3 遺跡に関連の深い時代・時期を中心に、歴史環境について概観していきたい。

旧石器時代については、これまで 1 例の採集資料が確認されているにすぎなかつたが、本報告の中に掲載している妙見遺跡において、ナイフ形石器や台形石器、三稜尖頭器、細石器が出土しており、えびの市内では初の発掘調査による出土品として注目される。

縄文時代については早期・前期・後期土器を出土した前畠遺跡²、灰塚遺跡³が挙げられる程度である。他は採集資料が多く、断片的な情報しか得られていなかつたが、段丘や緩斜面を成す丘陵が広がる当地域の地形を考えると、他地域と比較して決して質的・量的に劣るものではないとの推測もなされていた。早期の多量の遺構・遺物が見られた妙見遺跡の成果はそれを裏付ける形となつた。

弥生時代では、中期の新田遺跡⁴、後期の灰塚遺跡⁵、本地原遺跡⁶、永田原遺跡⁷などが知られている。このうち本地原遺跡と永田原遺跡では、それぞれ後期初頭と終末期の、いわゆる花弁状（間仕切り）住居が検出されている。これはその種の住居の西限の例である。本地原遺跡からは肥後系の甕が多く出土している。尚、本地原遺跡も永田原遺跡も川内川の左岸の低位段丘上に立地しており、永田原遺跡の報告でも述べられている通り、地下式横穴墓群との関係から想定された古墳時代の集落が、その面で確認されていない（現在 2 遺跡の調査例しかないが）ことは、一つの成果といえよう。今回の報告を行なう妙見遺跡の立地（標高約 280m の高位の丘陵）と合わせて考えると興味深い。

地下式横穴墓は古墳時代の南九州の特有の墓制であり、盆地内の加久藤層群を基盤とする段丘上に構築されており、大きくは 6 つの群にまとめることができる。構造（平面形・閉塞）、あるいは副葬品（甲冑・馬具等）等において、それぞれに特色が認められるが、基本的には平入りで長方形か橿円形を呈する。年代は、上限が三角板銛留短甲を出土した島内 41-1 号地下式横穴墓の 5 世紀中頃と見られており、6 世紀に入ると小木原地下式横穴墓群の造墓集團が勢力を増すようである。現在ここには 300 基余の地下式横穴墓が存在していたことが知られている。また、昭和 44（1969）年に九州縦貫道（宮崎線）建設に伴い調査の行なわれた小木原古墳は、内部主体が平入り長方形プランの地下式横穴墓であることが判明した。玄室内から方製獸形鏡、剣、刀等が、豊坑から 6 世紀初頭の須恵器⁸が出土している。

小木原地下式横穴群の東に続く蕨地区では、地下式横穴（羨門閉塞と豊坑上部閉塞が共存）¹⁰の他、木棺墓・板石積石室墓・横口式の土坑墓が検出されている。板石積石室墓は他に灰塚

遺跡（地下式横穴墓群）でも3基確認されている。¹¹

尚、該期の集落址の発掘調査としては今回報告を行なう妙見遺跡が初例となる。

古代では、『延喜兵部式』の十六駅の一つである「真听駅」が大字灰塚字真崎にあったと推定されているが、特定はできていない。この時期の史・資料は少なく、骨蔵器の出土例や¹²10世紀前半の土師器や布目瓦が出土した法光寺跡の確認調査が注目された程度であったが、近年の発掘調査件数の増加に伴い、確認される遺構・遺物の量が増加しつつある。そのうちの一つ、永田原遺跡では多数の土師器（甕・杯）、布痕土器、黒色土器、須恵器、越州窯青磁等が出土している。掘立柱建物は10棟が重複した状況で検出されている。¹³

中世には、馬関田荘、吉田荘、真幸院などの荘園が成立し、島津氏が地頭として入っている。¹⁴南北朝期や戦国時代には、交通の要地であるこの地を巡って激しい争奪戦が繰り広げられていった。その名残りを今に伝えるものが、丘陵の端部に築かれた山城であり、木崎原の古戦場である。この時代の山城は、飯野城、加久藤城、徳満城など数多く残っているが、現在まで未解明のもの多かった。そのような中で、近年発掘調査の行なわれた園田城遺跡は、中世の古い段階の砦跡の状況があきらかになった点で注目に値する。¹⁵

平原遺跡の近くに指定文化財の彦山の板碑がある。正中2（1325）年、密教僧・宝光が恩師の33回忌のために建立したものである。付近には彦山寺があったとされる。

（註）

1. この頁の記述に関しては、下記の文献を参考にした。

金子 弘二 1985 「加久藤盆地周辺の地質と地形」『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』えびの市教育委員会

宮崎県高等学校教育研究会理科・地学部会編 1979 『宮崎県地学のガイド』コロナ社

2. 石川恒太郎他 1979 「前畠遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 宮崎県教育委員会

3. 石川恒太郎 1973 「灰塚遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(2) 宮崎県教育委員会

4. 『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』(1の文献)に記載あり

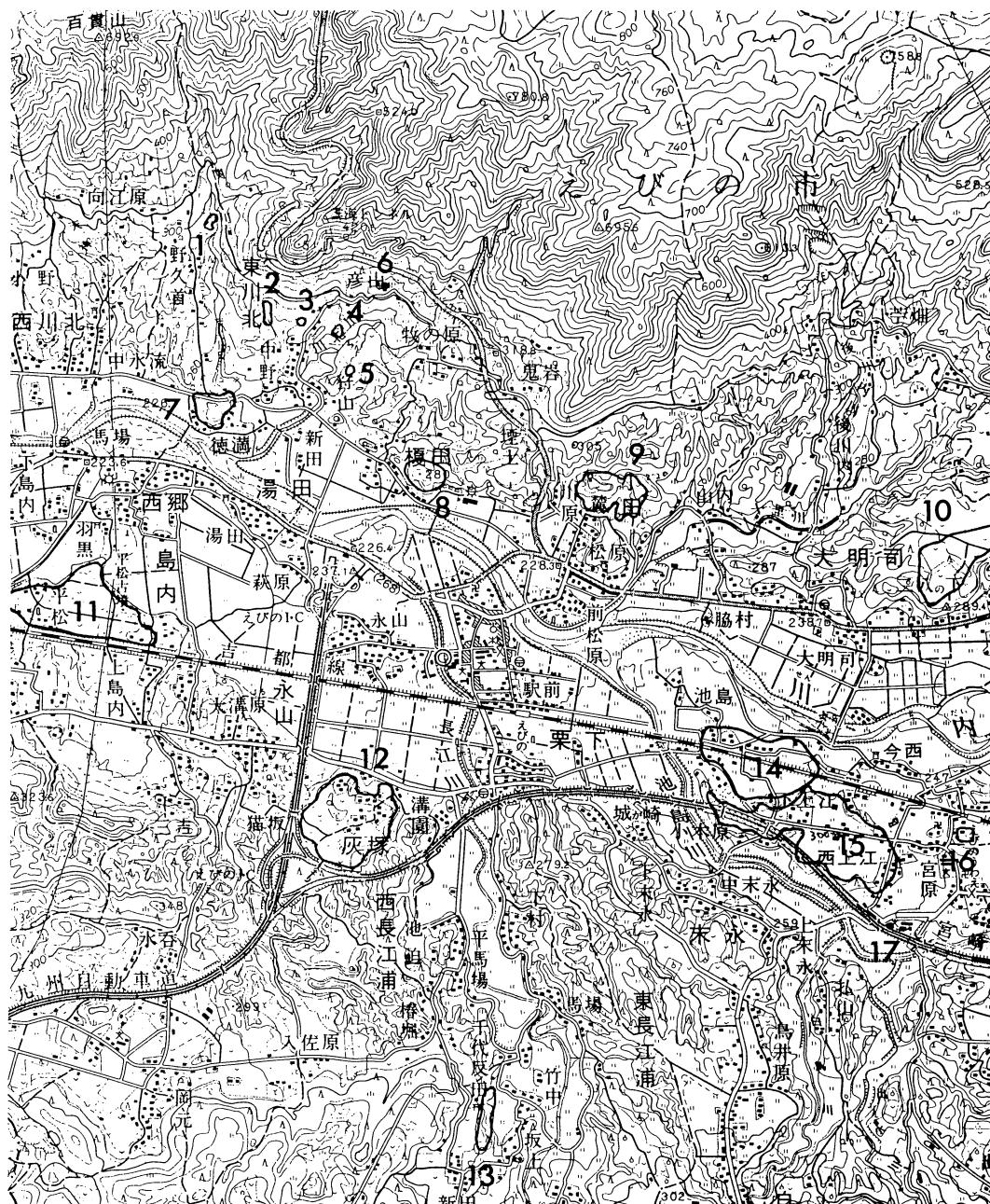
5. 3に同じ

6. 1994年3月 報告書刊行予定

7. 谷口 武範 1990 「永田原遺跡」『永田原遺跡 小木原遺跡群蕨地区 口ノ坪遺跡』えびの市教育委員会

8. 木崎原操氏の研究成果による

木崎原 操 1971 「小木原古墳群調査報告(第2報)『えびの』2



- | | | | |
|-------------|--------------|---------------|----------|
| 1. 野久首遺跡 | 2. 妙見遺跡 | 3. 天神後第二遺跡 | 4. 平原遺跡 |
| 5. 彦川遺跡 | 6. 彦山の板碑 | 7. 德満城跡 | 8. 園田城遺跡 |
| 9. 加久藤城跡 | 10. 芋畠地下式横穴群 | 11. 島内地下式横穴群 | 12. 灰塚遺跡 |
| 13. 西長江浦遺跡群 | 14. 永田原遺跡 | 15. 小木原地下式横穴群 | 16. 法光寺跡 |
| 17. 桑田遺跡 | | | |

図1 遺跡の位置と周辺遺跡

えびの市史談会 など

9. 石川恒太郎 1972 「小木原古墳」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』 1
宮崎県教育委員会
10. 永友 良典 1990 「小木原遺跡群蕨地区」 (7の文献)
11. 3に同じ
12. 4の文献に記載あり
13. 7に同じ
14. 文献史学の成果については、下記の文献を参考にした。
1986 『角川日本地名大辞典』 45 宮崎県 角川書店
15. 未報告。調査者の中野和浩氏の御教示による。

第4節 本報告書の記述について

(1) 遺構実測図

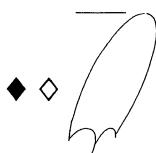
遺構の略号は次の通りとする。

S A…豎穴住居 S B…掘立柱建物 S C…土坑 S D…土壙墓 S E…溝状遺構
遺構の断面のレベルは10cmあるいは20cm単位で示している。スケールは省いた。豎穴住居の平面図中のスクリーントーン部分は焼土面を、◆印は炭化物、▲印は赤色顔料の出土地点を示す。

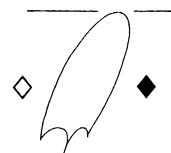
(2) 土器・陶磁器実測図

径の復元の不可能な個体の表現方法は、慣例に習い、下の通りとする。

断面を黒塗りしているものは須恵器、スクリーントーンを利用しているものは、滑石製石鍋である。

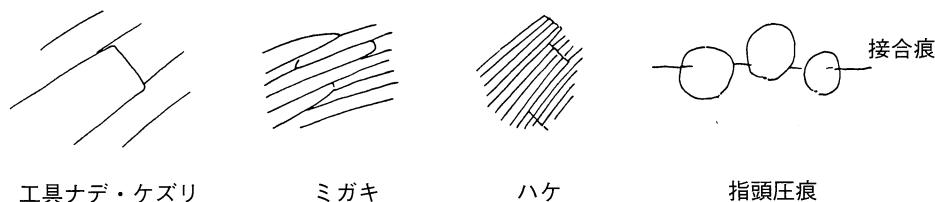


縄文土器

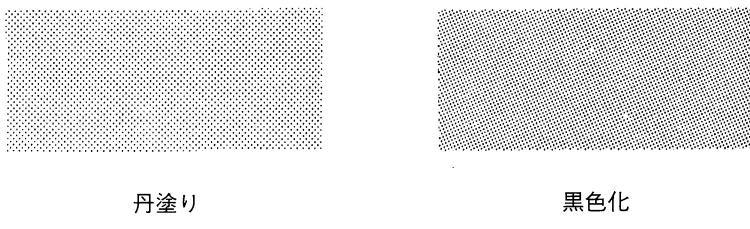


弥生土器・土師器・陶磁器

土器の器面調整法のうちナデについては、単位の明瞭な場合以外、特に図中に示さない。工具ナデ、ケズリで方向のわかるものは矢印で示した。「ていねいなナデ」とは器面上に調整の痕跡の残らない場合である。また、口唇部・突帯のヨコナデの表現は省略した。



スクリーントーンの示すところは以下の通りである。



径の復元については慎重を期したが、多くの場合（特に縄文土器については）、「この径で復元した」という模式図と考えられたい。また、小破片については必ずしも上下・傾きの確定しないものもある。

(3) 石器

石器実測図中、|—|は使用痕、▽—▽は敲打痕、○—○は使用による磨耗面をそれぞれ表わしている。また、平面図では敲打部分は点描で、研磨部分は研磨の方向の斜線を描いて表現している。

(4) 観察表・計測表

土器の胎土中に含まれる混入物については、産地を特定する手掛かりとなる可能性のあるもののみを取り上げ、下記のように記号で示している。

- A 黒色・透明でガラス質のもの
- B 黒色で光沢がある柱状のもの（角閃石）
- C 赤褐色・褐色粒（混入の著しい場合）

D 金色で薄い板状のもの（黒雲母） ただし、これらは「傾向」以上の多くを語らない。
石器計測表は表1（旧石器時代の遺物）を除き、報告書掲載の資料についてのみ作成して
いる。表中の（ ）内の値は現存値である。



挿入図版1 現地説明会

第Ⅱ章 野久首遺跡

第1節 調査の概要

野久首遺跡は川内川の支流の小河川、関川沿いの小段丘上に立地する。標高は約290mを測る。百貫山（692.9m）付近に源を発し、谷を刻みながら南へ流れていく関川が、ちょうど平野部に入り蛇行を始める辺りに、遺跡の立地する段丘がある。遺跡は、西から東に向かってゆるやかに傾斜するこの段丘のほぼ全域に広がっていると推測される。自動車道建設工事に伴う調査対象地区は、その東端付近の約2,500m²である（付図1）。

発掘調査に際しては、STA 572+20の幅杭を基点とし、N-1.5°-Wの方向に基線を定め5m間隔のグリッドを設定した。区画については、南から北を1・2・3…区、西から東をA・B・C…区と定め、その組み合わせにより表示を行なった（図3）。

発掘調査前の遺跡地の状況は、標高のやや高いA～C-1～3区が山林、小さな谷となる4～7区が水田となっており、前者の高位面においては大きな樹根に、後者の低位面においては径2m以上もある多数の巨礫に悩まされながらの調査となった。

発掘調査は、平成2（1990）年4月26日から同年7月10日までの期間実施した。遺物包含層が認められ、実際に掘り下げを行なった面積は820m²であった。調査時における遺構実測・遺物の取り上げについてはコンピュータ・システムを用い、併せて現地で調査区周辺地形図と、要所の層位断面図を作成している。

尚、古環境研究所に委託して、プラントオパール分析による水稻耕作の検証と古環境の復元を行なった。成果については第V章に掲載している。

第2節 層序（図3・4）

高位面と低位面では層位の状況が異なる。高位面側の層序は以下の通りである。

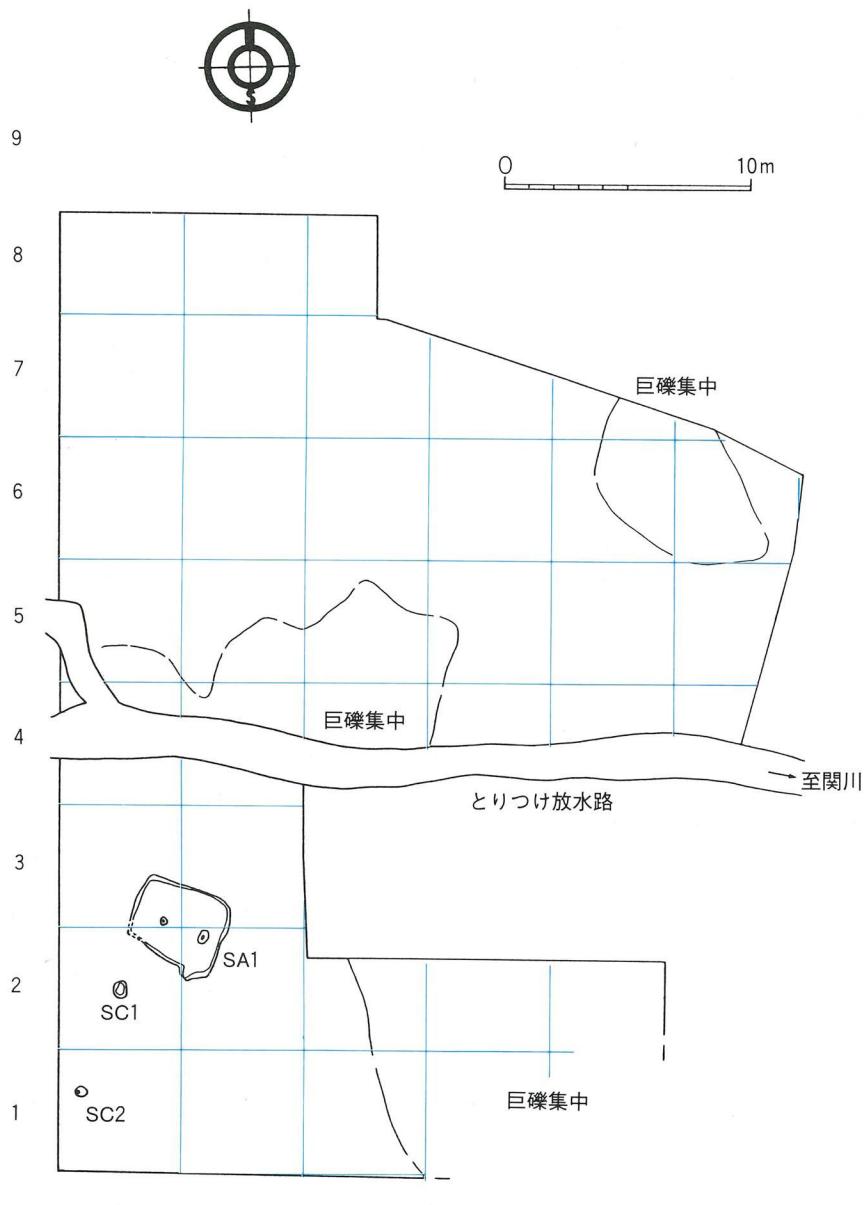
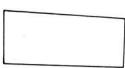
I a 層 表土、樹根を多く含む。

I b 層 黒褐色土（Hue 10YR2/2）で、I aよりも黒味が強くなる。縄文時代から古墳時代の遺物を多く包含する。

III 層 明黄褐色の粘土。この層中には礫は見られるものの、低位面側と比較するとの量は多くない。おそらくは、下部になるに従って巨礫が多くなり、基盤の河成礫層に達するものと推測される。この粘土層の上面で古墳時代の竪穴住居跡などの遺構を検出している。

この高位面の東側のD～F区においては、表土下がすぐ基盤の礫層になり、巨礫が地表面上にあらわれている。低位面側の層序は、

I a 層 現水田層。グライ化層である。



STA572+20
幅杭

図1 野久首遺跡調査区の状況 (1/300)

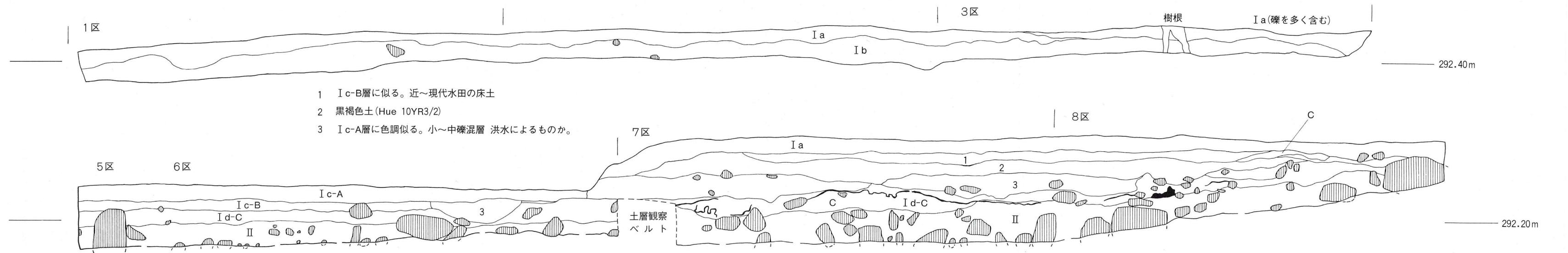


図2 A-1～8区 西壁層位 (1/40)

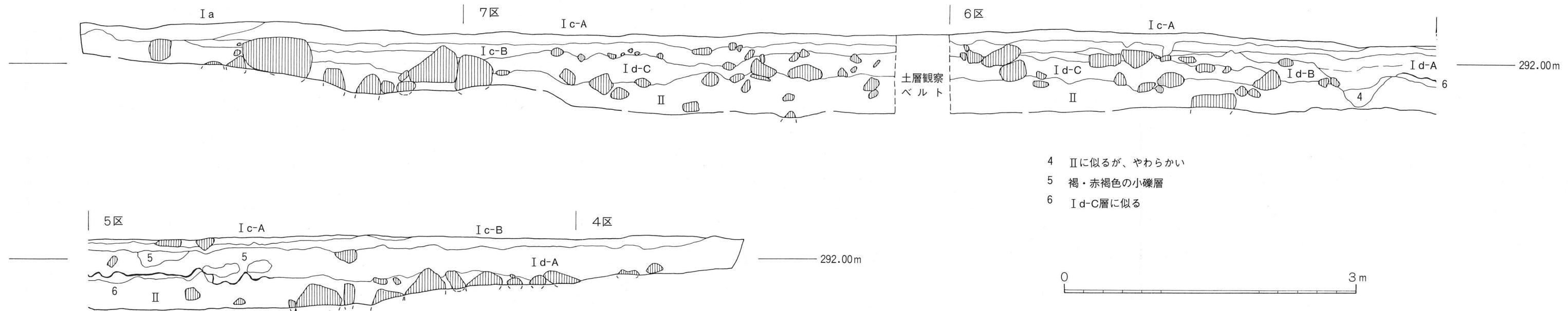


図3 B-4～8区 南東壁層位 (1/40)

- I c-A層 近～現代の水田耕作土と見られる。灰黄褐色粘質土 (Hue 10YR5/2)。
- I c-B層 同じく近～現代の水田の床上である。にぶい黄褐色粘質土 (Hue 10YR4/3)で、鉄分を多く含有する。
- I d-A層 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)。
- I d-B層 暗褐色土 (Hue 10YR3/3 Id-Aよりやや黒味強い)。
- I d-C層 暗褐色粘質土 (Hue 10YR3/3)。この層の下部、II層との層界付近から遺物が比較的多く出土する。
- II 層 黒色粘質土 (Hue 10YR2/1)。遺物を包含しない。下部は礫が多くなり、基盤の河成礫層・粘土層に続く。

となる。I・II層とも礫を非常に多く含むことから、当地点は長期間にわたって氾濫原であったと考えられる。また、北端部のA-11区では、表土の直下が基盤層となる。この付近は基盤層面が高くなっている。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

(1) 概要

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代の竪穴住居1軒と、時期不詳の土坑2基が全てである。近～現代の水田についても、畦畔等は確認できなかった。その他、A-5区で帶状の酸化鉄集積層が見られたが、人為的なものであるとの確証は得られなかった。これはプラントオパール分析でも示されているように、ウシクサ族などの植物の繁茂に起因するものと推定される。

(2) 竪穴住居

S A 1 (図4)

A・B-2・3区で検出された長軸3.8m×短軸3.2mのやや小形の竪穴住居である。検出面からの深さは約20cmを測る。覆土はI b層に似た黒褐色土である。床面はIII層の粘土層中に構築され、若干かたくしまっている。この粘土層中には礫を含み、そのうちのいくつかが未処理で残されている。特に北東側の壁面付近に多い。主柱穴は2本で、P 1-P 2の心々間の距離は1.75mを測る。柱穴の位置から、棟はNW-S Eの向きをとると推測される。北西側のP 1の底面下には巨礫が存在する。そのためか、P 1は、P 2に比べて浅くなっている。南側のコーナー近くには長さ約60cm程の張り出し部がある。

遺物は、特に南西半分を中心に、床面よりやや浮いた位置から多く出土している。今回図化できた土器4点の他に、底部片1点と胴部片約10点が出土している。土器以外の遺物は見られなかった。

S A 1 出土遺物 (図 5)

1 は甕の口縁部～胴部で、胴部付近に最大径を持ち、口縁部がゆるやかに外反する。頸部から口縁部にかけて搔きあげ気味のタテハケを施した後に、口縁部付近をヨコナデしている。このためタテハケはほとんど消えかけており、頸部付近にわずかに痕跡を残す。口縁端部は場所によって若干肥厚気味に外方に張り出す。S A 1 出土土器群の中では唯一、所属時期の比定の可能な個体である。2 は壺の胴部で、内外面とも工具によるナデが施される。3 は脚台状となる甕の底部である。剝落の状況から、器底部と脚部の間に円盤形の粘土塊を充填して成形した様子がうかがえる。4 も同様の甕の底部の破片である。

これら S A 1 出土土器群の胎土中には、褐色・赤褐色の粒子が多く含まれている。胎土中に含まれる鉄分に起因するものと推測される。

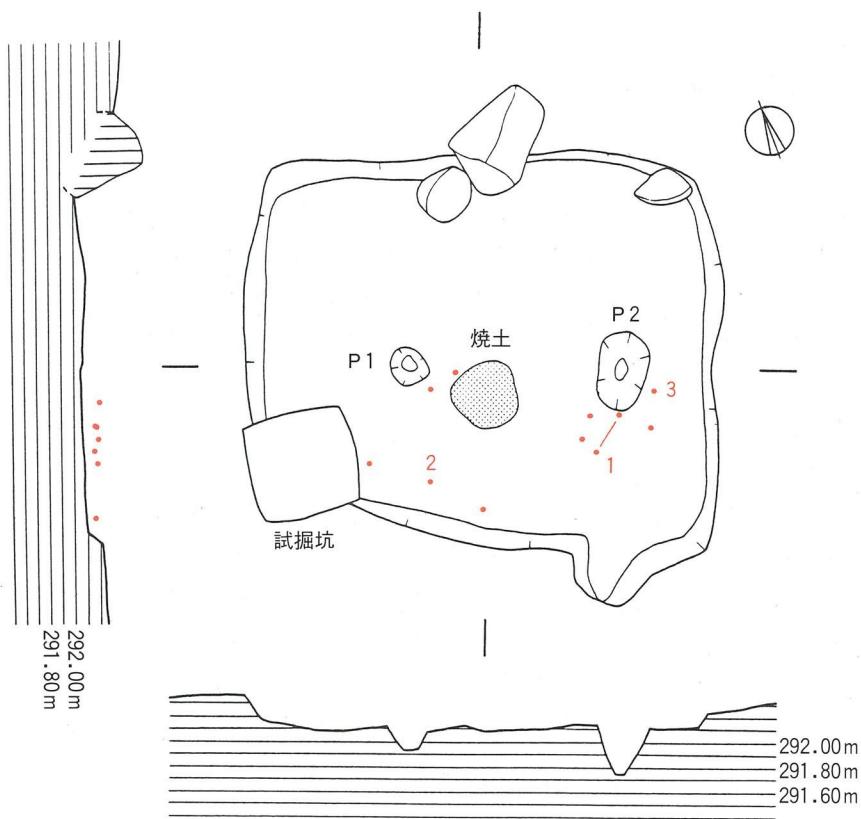


図4 S A 1 (1/60)

第4節 その他の時代の遺構と遺物

(1) 概要

前述の通り、検出された2基の土坑は出土遺物もなく、構築時期不明のものである。覆土はいずれも褐色土で粘性が弱い。

遺物はSA1出土土器以外、まとまった分布状況を示すものがほとんどない。各地区・層からまんべんなく出土しており、土器などはほとんどが小破片である。特に時代が下るほど散発的な出土となる。

(2) 縄文土器（図6）

量的には少なく、破片数にして40点程である。

5・6は単節の縄文（2段RL?）を施す。同様の個体は、他に15点程出土しており、早期の平柄式と考えられる。このうち5は内面にも縄文が見られる特異なもので、さらにわずかに突帯の痕跡も認められる。7はわずかに内側に屈曲する口縁部である。半裁竹管による押し引き文が施される。8~10は、口唇部と口縁端部の刺突文と横位の沈線文が施される。沈線内には纖維痕も見られる。後期土器と考えられ、図示した以外にも小破片が数点出土している。

(3) 弥生土器・土師器（11~26）

11・12は摩滅や剥落が著しい。両者とも突帯を巡らすが、貼りつけ方、貼りつけ後の調整とともに雑であり、太さが一定にならない。11の口縁屈曲部から胴部の突帯の間には縦位あるいは「ひ」字形の粘土紐貼りつけが、胴部突帯の下部には「U」字形の小さな粘土紐の貼りつけが見られる。14は、接合はしないものの11の底部である可能性が高い。15も、色調等が11などの一群に類似する。13は壺か異形の甕であろう。外面に柳描の波状文・平行線文を施す。18・19に見られる突帯は、南九州の古墳時代中期~後期の土器の特徴である。18の刻目には棒状工具に巻き付けた布目の圧痕が残る。20・21は壺、22~24は甕で、23・24は頸部以下の内面にヘラケズリを施す。25・26は高台付の椀・杯類である。

(4) 陶磁器（27~48）

27~34は青磁である。数量的には碗の小破片が多い。28は縦の刻線による蓮弁文を施すものである。33は底部で、疊付が露胎となる。見込みは蛇の目に釉剥ぎされる。34は白磁の小形容器である。35~42は染付である。35は瓶の口縁、36~40は碗で、草文や丸文などが描かれる。41は玉取獅子文の皿で輸入物である。

陶器は赤褐色の胎土の、在地系のものが多い。43は碗の底部で、高台内が露胎となる。45は水差であろうか。46は茶家の蓋である。庇より上の部分に施釉している。47・48は茶家である。いずれも口縁上端部は釉をカキ取っている。47は胴部下半部も無釉となり、ススが付

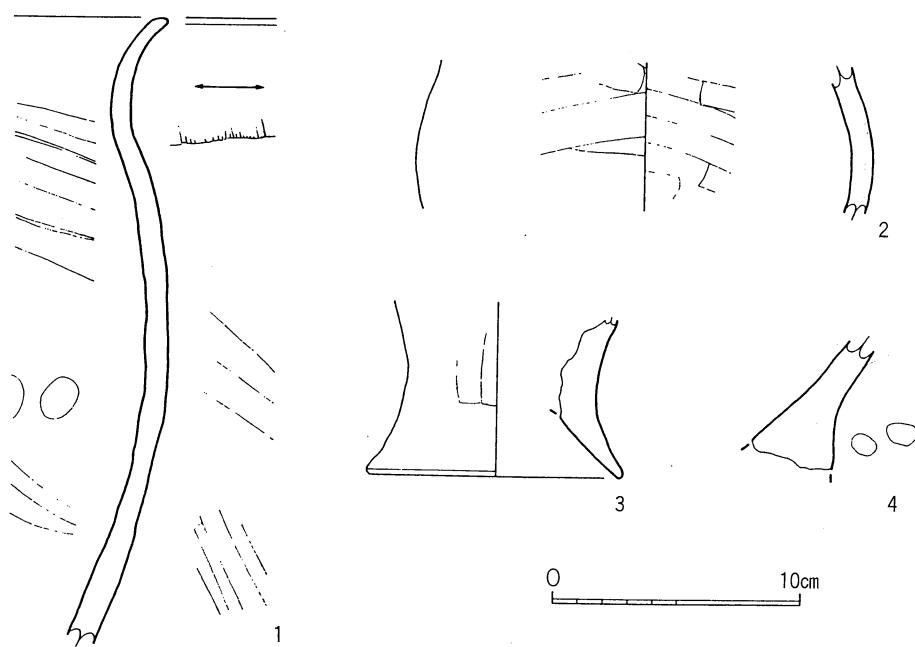


図5 S A 1 出土土器実測図 (1/3)

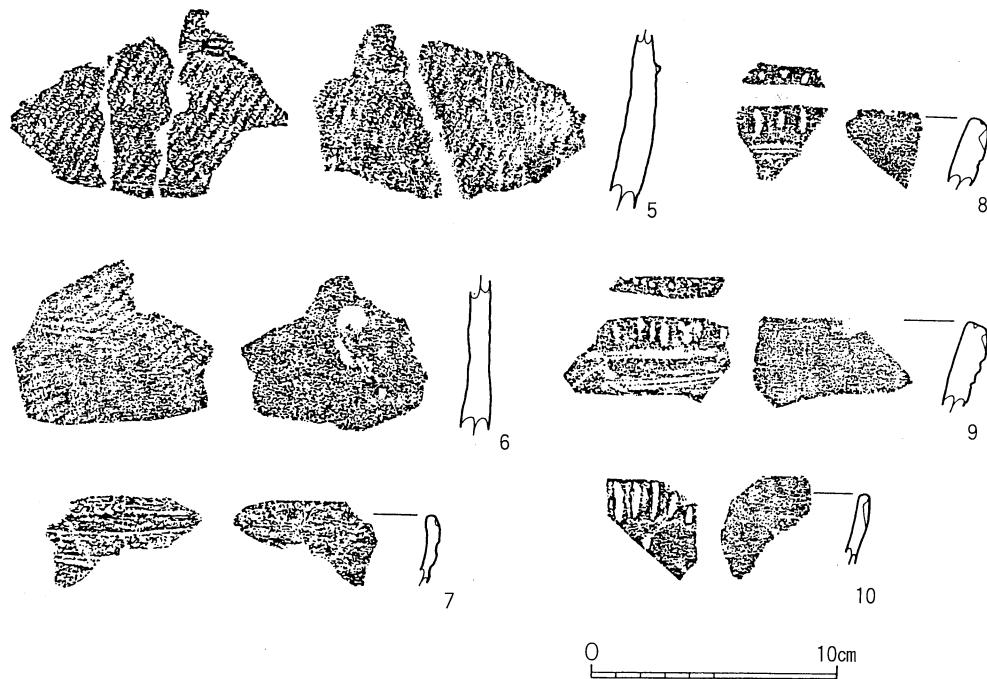
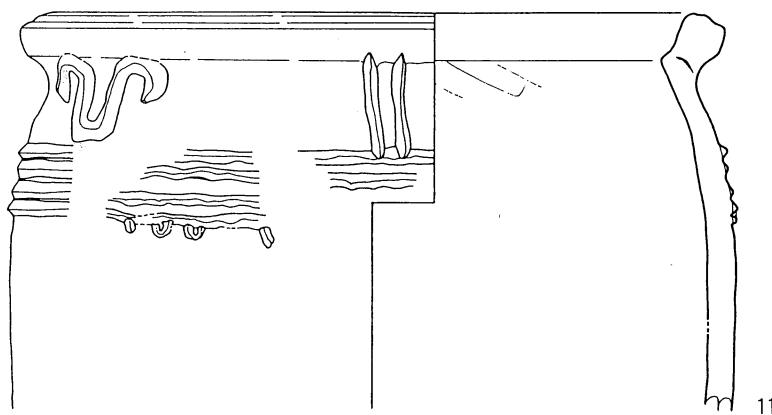
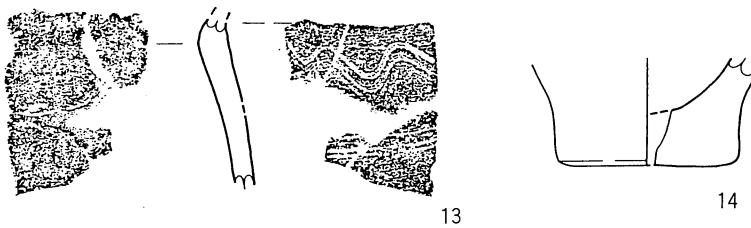
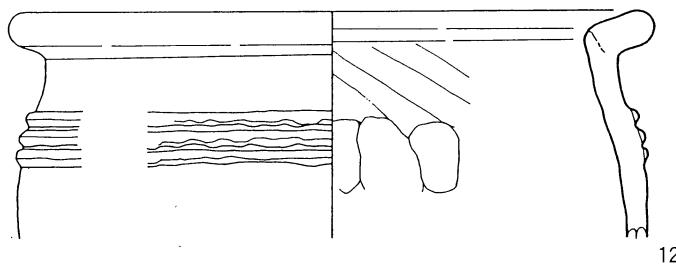


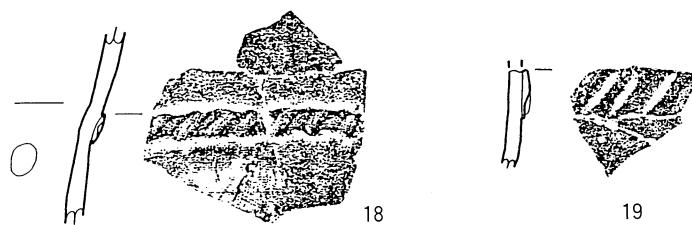
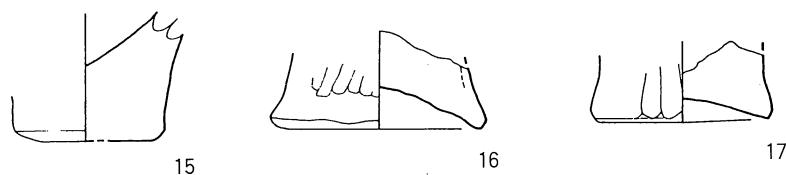
図6 土器実測図(1) (1/3)



10cm
○

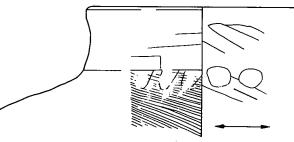


14

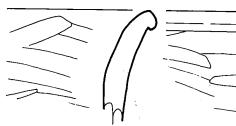


19

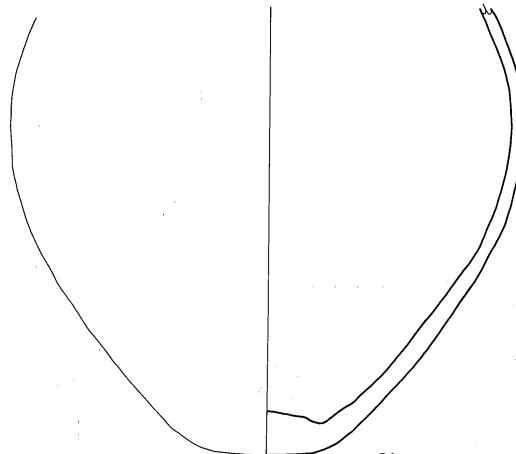
図7 土器実測図(2) (1/3)



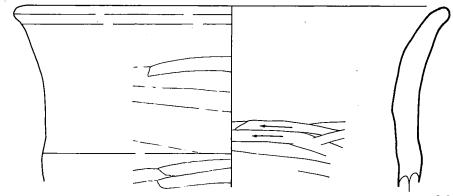
20



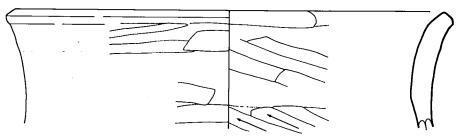
22



21



23



24



27



28



25



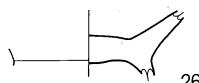
29



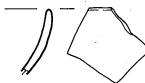
30



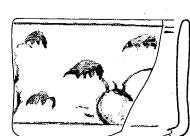
31



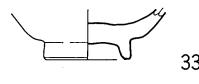
26



32



40



33



37



41



34



38



42



35



39



36



図8 土器・磁器実測図 (1/3)

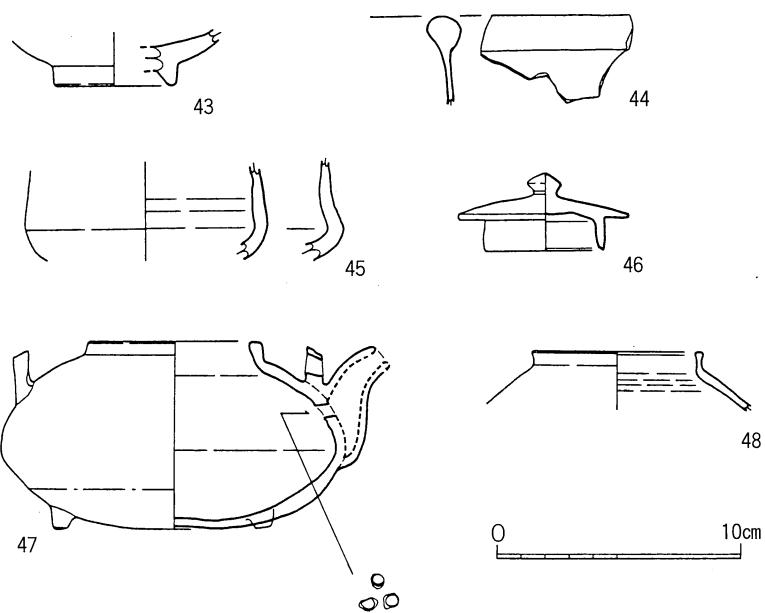


図9 陶器実測図 (1/3)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色 調	備 考
1	S A 1		㊣工具ナデ ㊣ナデ	A・C	㊣明黄褐 ㊣浅黄褐	㊣スス付着
2			㊣ナデ ㊣工具ナデ	C	㊣淡黄 ㊣浅黄橙	
3			㊣ナデ ㊣ナデ	C	㊣にぶい橙 ㊣橙	
4			㊣㊣ナデ	C	㊣淡黄 ㊣淡黄・橙	
5	A-3	I b	㊣繩文(2段R L)		㊣内灰黄	貼付突帶
6	A-1	I	㊣繩文・ナデ ㊣ナデ(風化)		㊣浅黄橙 ㊣にぶい黄橙	
7	C-4	I d	㊣ナデ(風化)・半裁竹管による押引文 ㊣ナデ(風化)	C	㊣内灰褐	
8	A-1	I	㊣ナデ・刺突文・沈線文 ㊣ナデ	C	㊣にぶい橙 ㊣にぶい褐	
9	A-1	I b	㊣ナデ・刺突文・沈線文 ㊣丁寧なナデ	C	㊣にぶい橙 ㊣にぶい褐	
10	A-1	I b	㊣ナデ・沈線文 ㊣ナデ		㊣にぶい橙 ㊣にぶい黄橙	

表1 土器観察表(1)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
11	E-4-5	I d	⑧⑨ナデ(風化)	B	⑧暗褐・橙 ⑨橙・褐	
12	B-1	I	〃	B	⑧褐灰・明黄褐 ⑨にぶい褐・灰黄褐	⑧スス付着 ⑨一部炭化物付着
13	B-1	I	⑧ナデ・櫛描波状文・平行線文 ⑨ナデ		⑧にぶい橙 ⑨橙	
14	C-D-5	I d II	⑧⑩丁寧なナデ ⑨ナデ	B	⑧⑨赤褐	
15	A-1	I	⑧⑨⑩ナデ	A・C	⑧⑨にぶい赤褐	
16	B-1	—	⑧工具ナデ ⑩ナデ	C・礫	⑧⑩にぶい黄褐・黒褐	
17	A-3	—	⑧⑩ナデ・工具ナデ	C	⑧明赤褐・灰褐 ⑩灰褐	
18	B-7	II	⑧⑨ナデ	C	⑧⑨にぶい黄橙	⑧一部スス付着 貼付突帯
19	A-5	I d	〃	C	⑧にぶい黄橙 ⑩明黄褐	貼付突帯
20	A-1	I	⑧⑨工具ナデ	C	⑧淡黄・浅黄橙 ⑩淡黄	
21	B-6-7	I d	⑧⑨——	C	⑧明黄褐 ⑨にぶい黄橙	
22	A-2	I	⑧ナデ ⑩工具ナデ		⑧⑨にぶい黄橙	
23	A-1	I	⑧ナデ・工具ナデ ⑨ナデ・ケズリ	C	⑧にぶい橙・橙 ⑩にぶい橙	⑧スス付着
24	A-1	I	⑧工具ナデ ⑨工具ナデ・ケズリ	C	⑧にぶい橙・黒褐 ⑨にぶい橙	
25	B-6	I d	⑧⑨回転ナデ	C	⑧浅黄橙・淡橙 ⑩にぶい黄橙	
26	B-6	I d	〃	C	⑧⑨黄橙	

表2 土器観察表(2)

No	遺構・区	層	種別	法量(単位cm)	胎土 (色)	色調	備考
27	E-F-4-5	I	青磁		灰白	⑧⑨綠	
28	B-3	I a	〃		灰白	⑧⑨淡綠	
29	F-5	I d	〃		灰黒	⑧⑨綠灰	
30	A-2	II	〃		灰	〃	
31	A-1	I	〃		灰褐	⑧⑨灰白	
32	A-5	I a	〃		灰褐	⑧⑨灰	

表3 陶磁器観察表(1)

No	遺構・区	層	種別	法量(単位cm)	胎土 (色)	色調	備考
33	A-2	I b	青磁	⑩3.4	灰白	⑧⑨緑	
34	B-7	I c	白磁		白	⑧⑨灰白	
35	D-5	I d	〃	⑩(6)	白	⑧⑨白	
36	E・F-4・5	I	染付	⑩(2.1)	灰褐	—	
37	B-7	I c	〃		白	—	
38	A-5	I a	〃		白	—	
39	C-5	I d	〃	⑩(7.8)	白	—	
40	A-2	I b	〃		白	—	
41	E-6	I c	〃		灰褐	—	
42	C-5	I d	〃		白	—	
43	B-5	I c	陶器	⑩(4.8)	赤褐	⑧⑨オリーブ褐	
44	A-5	I a	〃		灰褐	⑧⑨緑	
45	B-2	I b	〃		黒褐	⑧⑨黒	
46	A-2	I b	〃	⑩4.9 ⑩7.1	赤褐	⑧黒褐 ⑨赤褐	
47	A-2	I b	〃		赤	⑧べっこう ⑨にぶい黄	⑩スス付着
48	A-1	I	〃	⑩(6.8)	赤褐	⑧⑨べっこう	

表4 陶磁器観察表(2)

着している。

(5) 石器 (図12・13)

小剝片まで含めると100点近くに上る。2点の磨製石鎌を除いて、縄文時代の所産と見られるが、いずれも詳細な時期は特定できない。石材は、黒曜石、チャート、頁岩等が多く用いられる。石材、数値等の詳細は計測表を参照されたい。

49~51は石匙である。うち51は縦形の石匙の欠損品である。52は片方に自然面を残す。搔器の破片と考えられる。53は石核調整剝片、54は二次加工剝片、55は使用痕のある剝片。56は打面を残してはいるものの、ほぼ全周に調整が及ぶ。扁平な円形搔器状となる。57~62は打製石鎌である。62は未製品であろうか。63・64は磨製石鎌である。それぞれ粘板岩・頁岩?

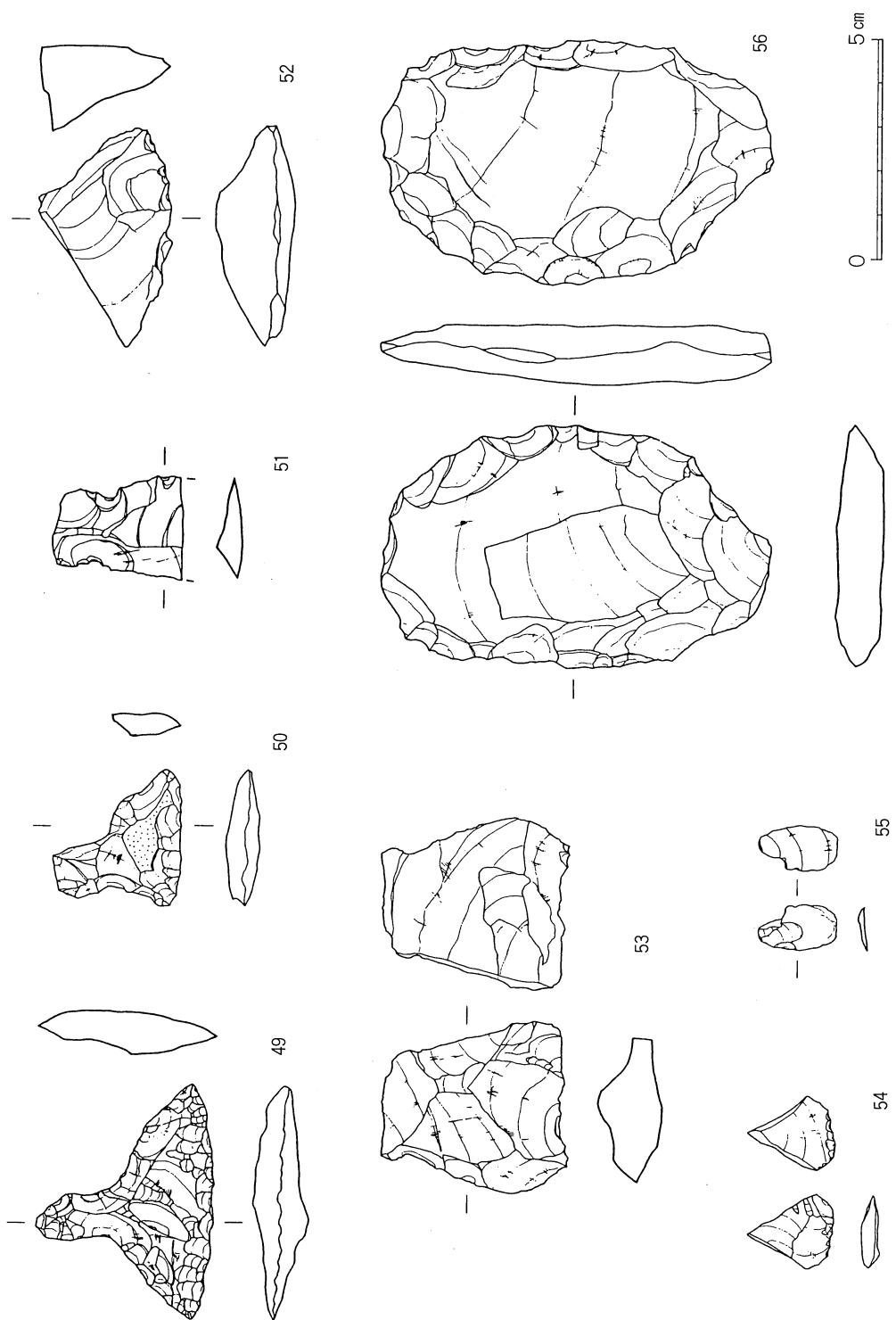


図10 石器実測図(1) (2/3)

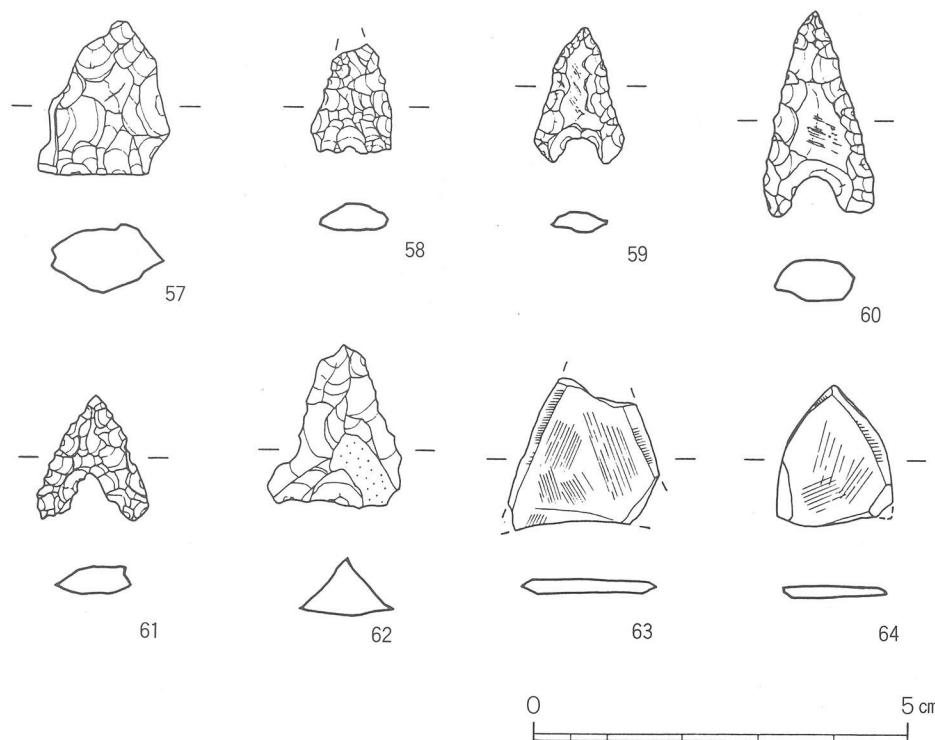
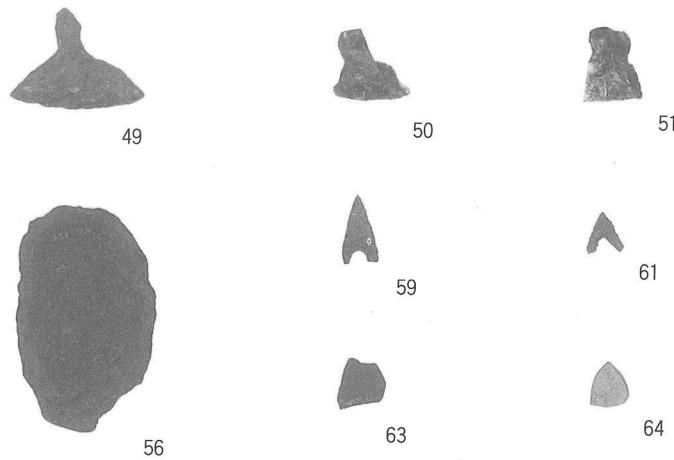


図11 石器実測図(2) (1/1)



挿入図版 1. 石 器

No	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
49	石匙	チャート	4.02	5.28	1.06	13.40	
50	〃	〃	2.89	3.08	0.64	5.00	
51	〃(縦型)	〃	3.23	2.36	0.65	4.65	
52	搔器?	〃	4.95	3.04	1.76	17.40	
53	剥片	〃	4.18	3.87	1.41	22.10	
54	〃	〃	1.91	1.71	0.40	1.15	
55	〃	黒曜石	1.78	1.05	0.22	0.40	
56	円形搔器?	安山岩	8.53	5.47	1.33	75.90	
57	石鎌	石英	2.06	1.76	0.88	2.70	
58	〃	黒曜石	1.48	1.10	0.39	0.50	
59	〃	頁岩	1.76	1.19	0.26	0.45	
60	〃	安山岩	2.70	1.45	0.47	1.50	
61	〃	黒曜石	1.65	1.50	0.30	0.50	
62	石鎌未製品	〃	2.15	1.76	0.76	1.70	
63	磨製石鎌	粘板岩	1.92	2.04	0.16	1.00	
64	〃	〃	1.81	1.53	0.16	0.70	鉄分含有? 赤褐色を呈する

注 第Ⅱ章の観察表・計測表中の「層」の記述のうち、IとあるものはIa層・Ib層といった細分層を特定できない資料。調査の初期のものが多く、ほとんどIa層と見られる。

表5 石器計測表

製で、研磨痕がよく残る。

第5節まとめ

これまで述べてきた通り、本遺跡においては、SA1出土土器以外の遺物は出土状況が概ね散発的で、ほとんどが流れ込みによって堆積したものと考えられる。そのため原位置を保持しておらず、共伴関係や編年的前後関係などの情報を引き出すことはできない。この要因としては、本遺跡の位置が河畔にあたり、氾濫原の状況を呈していたこと、および、特に近世以降、生産に関わる地（主として水田）として利用されていたことが大きい。しかしながら、個々の遺物の中には注目すべきものも多い。以下、それらについて簡単に触れていくたい。

弥生土器のうち、特に11・12の突帯甕は異色のものと言えよう。厚手の倒「L」字形の口縁部や粗雑な多条の三角突帯等が特徴となる。類例としては都城市・大岩田村ノ前遺跡のSC3出土土器を挙げることができる。特に口縁部内面の凹みや器面調整（ナデ）、焼成等に

近縁性が認められる。同様の土器は、都城市・祝吉第二遺跡第13号住居跡や鹿児島県菱刈町・前畠遺跡などの内陸部の遺跡から出土している。³
⁴

これらの土器の所属時期については、大岩田村ノ前遺跡 S C 3 で共伴した広口壺や肥後系の甕、そして先に触れたそれらの土器の特徴から、大岩田村ノ前遺跡の報告中でも想定された通り、中期中葉あたりと見るのが妥当と考えられる。また、11に付されたような異形の突帯の分布を含めると、南九州内陸部の中の小地域色の現出を捉えることも可能になるかも知れない。今後、注意を払っていきたい。

S A 1 については、1の甕の特徴から古墳時代初頭の時期を与えられよう。あまり明瞭ではないが、搔きあげ気味の調整を施し、ゆるやかに外反する口縁部～頸部の特徴が指標となる。現在のところ、日向内陸部地域に拠るべき編年案がないため、薩摩・大隅地域の編年と対比させるならば、多々良友博のIV期に並行するものと見られる。⁵ 都城市・向原第2遺跡の S A 2・S A 3⁶ や西郷村・内野々遺跡 S A 2 の甕、あるいは鹿児島市・大龍遺跡 5次の40号土坑出土の甕⁷（口縁部から胴部に限る）等との間に近縁性が認められよう。セットとなる壺は判然としないが、丸底気味の平底という点から、包含層出土の21の壺あたりがほぼ同時期となろうか。

S A 1 は床面積が9.9m²と、規模の面からは小さめの住居と言える。ただし、今回の調査ではこの S A 1 を1基のみ単独で検出したにすぎなかったため、当該期の普遍的な方なのかどうか、当然のことながら慎重にならざるを得ない。つまり、時間的・地理的特徴と意味付けできることかもしれないし、逆に特殊な住居であった可能性もある。このことについては、IV章でも触れてみたい。

以上のように、本遺跡およびその近辺では、縄文時代早期からの長期にわたって、（間欠期はあるものの）連綿と人の営みがあったことを伝えている。加えて、先に触れた注目すべき遺物の出土など、今回の調査の意義は大きいと言えよう。

(註)

1. 新東 晃一 1989 「塞ノ神・平桟式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
2. 粕畠 光博 1991 『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』 都城市教育委員会
3. 面高 哲郎 1982 『祝吉遺跡』 都城市教育委員会
4. 青崎 和憲 1983 『前畠遺跡』 菱刈町教育委員会
5. 多々良友博 1981 「成川式土器の検討」 『鹿児島考古』15 鹿児島県考古学会
6. 粕畠 光博 1990 『向原第1・2遺跡』 『平成元年度遺跡発掘調査報告』

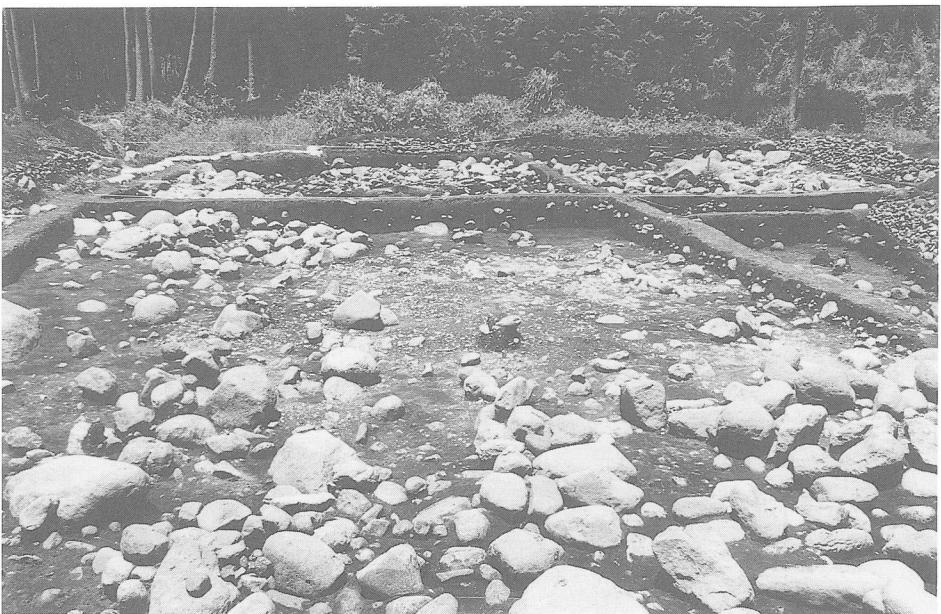
都城市教育委員会

7. 東 憲章 1992 『内野々遺跡－林業試験場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』 宮崎県教育委員会
8. 鹿児島大学考古学研究室 1986 『大龍遺跡－大龍小学校校舎改築及び給食室建設に伴う第5次・第6次緊急調査発掘調査報告書』 鹿児島市教育委員会

図版



1 層位の状況



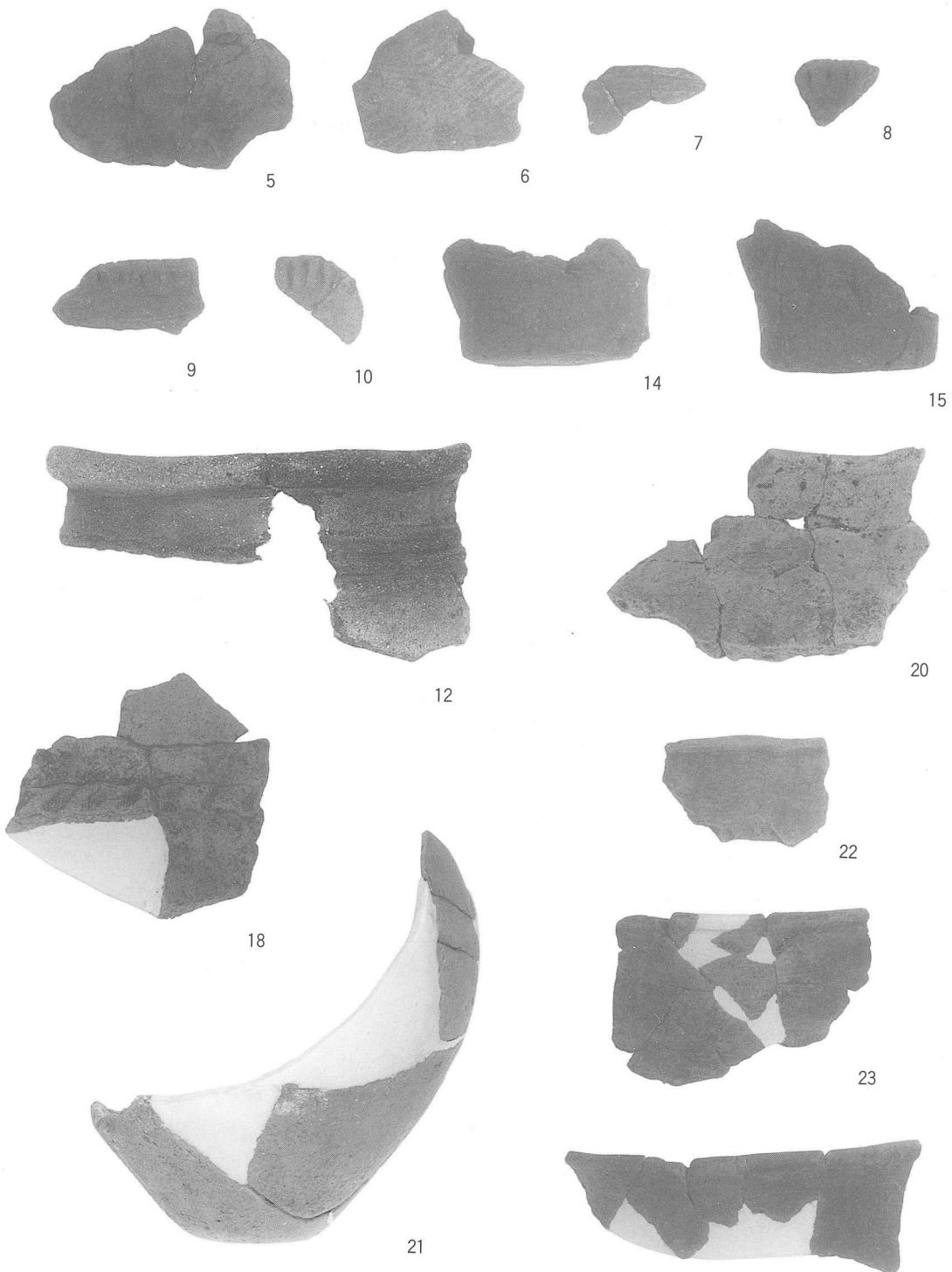
2 調査区の状況



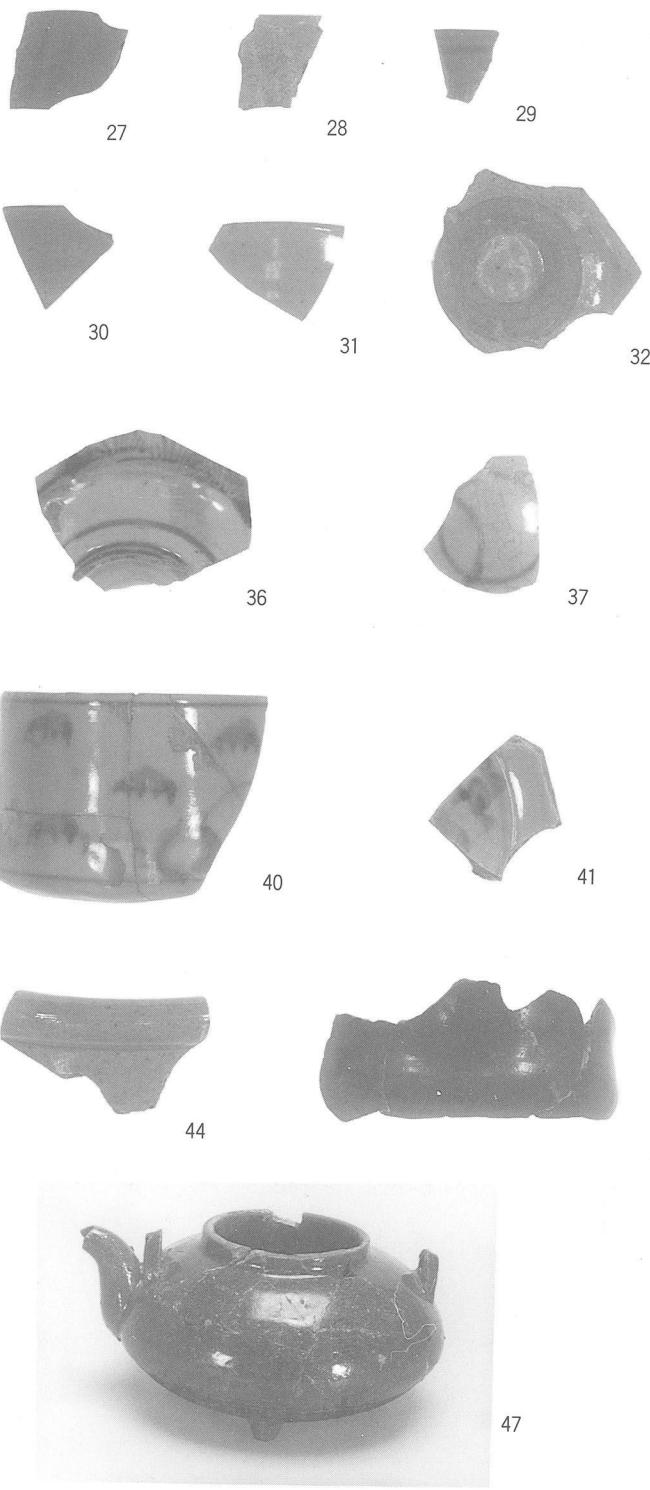
3 S A 1



4 S A 1 出土土器



5 縄文土器・弥生土器・古墳時代の土師器



6 陶磁器

第Ⅲ章 平原遺跡

{

第1節 調査の概要

平原遺跡はえびの市大字東川北字平原に所在する。遺跡地は北～北東側の山稜から西にゆるやかに傾斜する低丘陵性の舌状台地の先端部に位置する。平均標高は約225mで、北側と南側に入る狭小な開析谷の谷底との比高差は約20mを測る。調査開始前の近辺は、開削がすすみ不定形の段々畑、棚田が広がる状況であった（付図2）。

調査は自動車道建設予定地内の約3,900m²が対象となったが、遺跡そのものはさらに北東側に広がっていたと推測される。まず、田畠の畦畔にはほぼ沿う形で基線を定め（N-72°-W）、5mグリッドを組み、西から東をA…B…C、南から北を1…2…3と規定して、その組み合わせで区画表示を行なった（図1）。

平成2（1990）年7月4日から平成3（1991）年1月8日までの調査の結果、試掘調査でも想定されたように縄文時代、古墳時代、古代末～中世、近世の各時期の遺構・遺物が認められた（図1）。特に古墳時代では「埋甕」遺構、古代末～中世では周溝を有する土壙墓という重要な遺構が検出されており、多大な成果を上げている。

尚、現地での遺物の取り上げ、遺構実測にはコンピュータ・システムによる測量方式を用いている。

第2節 層序（図2・3）

前述の通り、調査区内は数段の段々畑、棚田となっており、各「段」ごとに微妙に層位の状況が異なる。ここでは各段に共通する基本層序について触れる。

- I 層 現水田耕作土。重機使用により除去。
- II 層 暗い黄灰褐色粘土で、酸化鉄の小粒子が混入する、旧耕作土。粘性強い。
層中に若干の遺物を含む。
- III 層 明るい黄褐色粘土の旧耕作土。酸化鉄を包含するが、II層よりも少なくなる。
層中に、水田床面と目される幅2cm程度の酸化鉄の集積が認められる。
土器や石器の小破片を含む。
- IV 層 黒褐色の粘質土で、主たる遺物包含層。出土遺物は土師器・須恵器、陶磁器、打製石器、鐵器など。
- V 層 黄色の粘土で基盤層。この層の約1m下から礫層となる。

包含層のIV層は、西側には比較的厚く堆積しているが、南東側では薄く、部分的に見られる程度となる。また、この地域に広く認められるアカホヤ層は、当調査区内では明瞭な層を成していない。しかしながら、試掘時の観察ではところどころでブロック状に存在するとい

うことであり、開墾等による改変で失なわれたものと考えられる。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

(1) 「埋甕」遺構（図4）

K-9区の基盤層の上位の粘質土層面で検出している。径約35cm程の円形に掘り凹め、口縁部と底部を打ち欠いた（口縁部については後世の攪乱の可能性も残るが）甕を据え置いている。甕の内部には、炭化物を含んだ暗褐色土が充満しており、甕と土坑との間の埋土の粘質土には、とくに上部に赤褐色に焼土らしきものが見られた。炭化物も上部により多い。

この遺構は、南九州の古墳時代後期の竪穴住居跡の床面の中央部にしばしば見られる「埋甕」炉と同種のものと推測される。そのため、竪穴住居跡の痕跡を探る目的で精査を行なつたが、壁面の立ち上がりや柱穴等は検出できなかった。

(2) 古墳時代の遺物（図5・図6）

1は、前述の「埋甕」遺構の本体である。工具による太めの刻目突帯を巡らすもので、外側は二次的火熱を受けてやや脆弱になっている。口縁部と底部を欠くため、編年の位置づけは困難となっている。

2は刻目突帯を持つ甕の胴部、3～5は甕の底部である。6は壺の底部か。7・8は大形の椀あるいはマリ状の鉢であろう。9は高杯の杯部と脚部の接合部付近である。

第4節 古代の遺構と遺物

(1) 挖立柱建物

S B 1

I-8区でまとまる柱穴群が検出されたが、諸般の事情により、記録を欠いている。

(2) 周溝を有する土壙墓・土壙墓

S D 1（図7）

F-11・12区にまたがって検出されている。幅約0.9m程の周溝を巡らすもので、内部には埋葬主体部と推定される土壙がある。上部はかなり削平を受けており、また南側と南西側には流水の作用による陥没孔もあり（スクリーントーン部分）、遺構の残存状況は余り良好とは言えない。残存する深さは、主体部中央付近でも検出面から0.2m程度である。以上により、本来存在したと考えられる上部構造は不明となっている。

検出面付近には多数の土器片が散在していた。それらを取り上げて、遺構を掘り上げると特に中央の土壙を中心に比較的まとまった状態で土器が出土している。

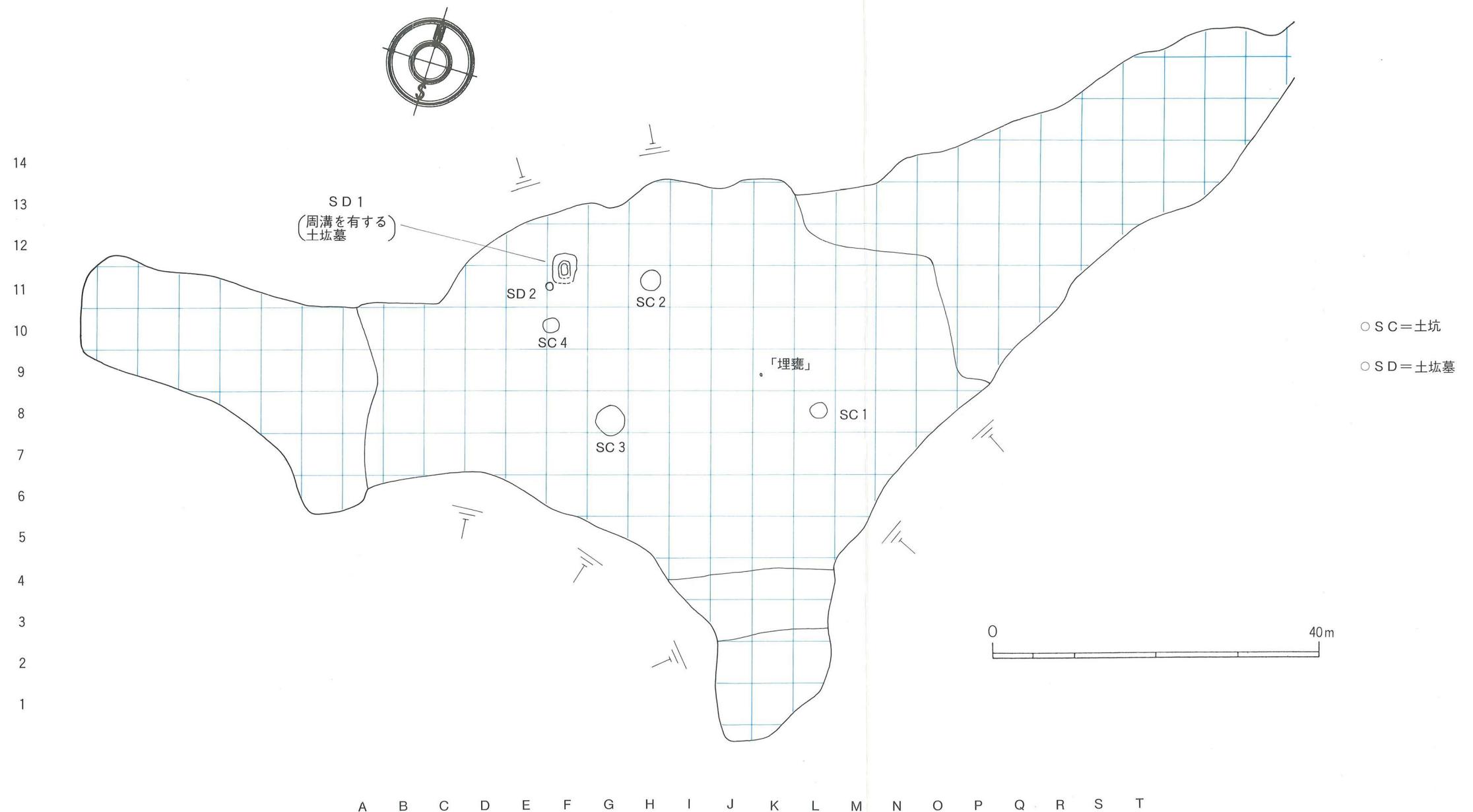


図1 平原遺跡調査区の状況 (1/600)

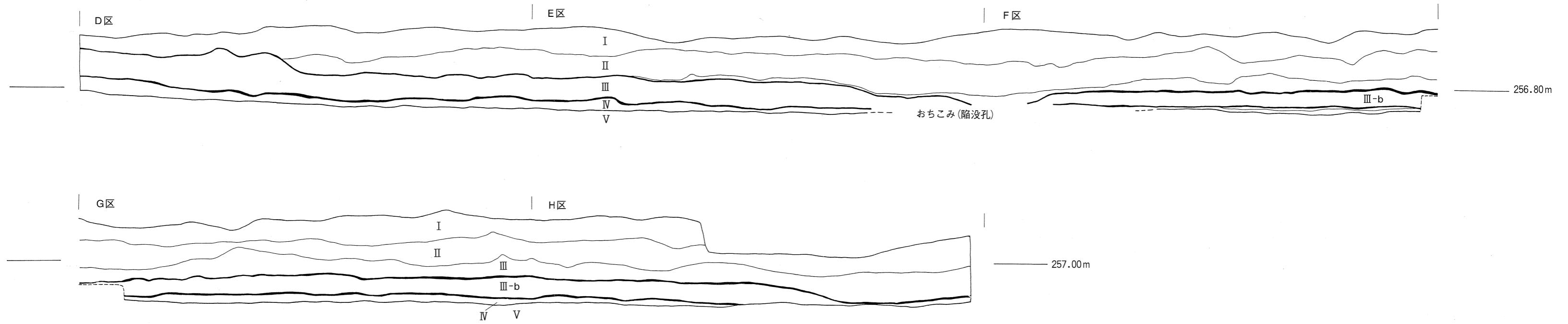


図2 D～H-10区 北壁層位 (1/40)

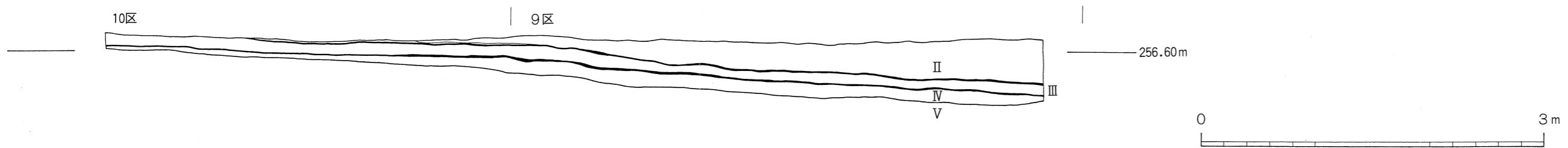


図3 F-9～10区 東壁層位 (1/40)

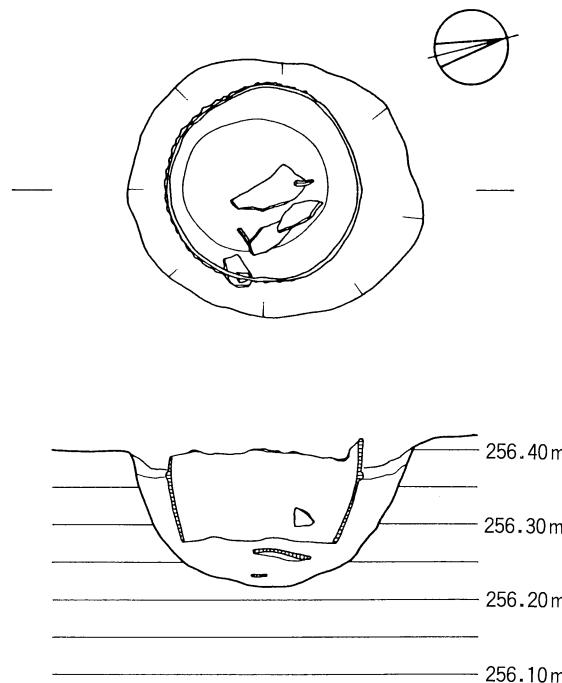


図4 「埋甕」出土状況 (1/10)

S D 1 出土土器 (図8)

12・15・18が中央の土壙、それ以外が周溝出土土器である。器種としては、甕、杯、皿、碗、黒色土器、布痕土器が認められる。

10・11は甕で、口縁部がなだらかに外反する。内面の頸部以下はケズリを施す。12は皿で底面は回転ヘラ切り後未調整。14は黒色土器杯のA類で、内面はミガキとなる。15は高台付碗で外内面とも丹念なミガキ調整がなされる。20・21は黒色土器碗で、おそらく20にも高台が付くと見られる。22は布痕土器である。

S D 2 (図7)

S D 1 の南隣に位置する、径1m程の小さな土壙である。S D 1 同様、あまり残存状況は良好でない。遺物は比較的まとまって出土している。

S D 2 出土土器 (図9)

23は口縁部が肥厚する甕。頸部以下はケズリが施され、稜が明瞭となる。24～27は杯で全てヘラ切り離しであるが、その後24は未調整、25は板目の擦過痕が残る。26・27は丁寧にナデられる。

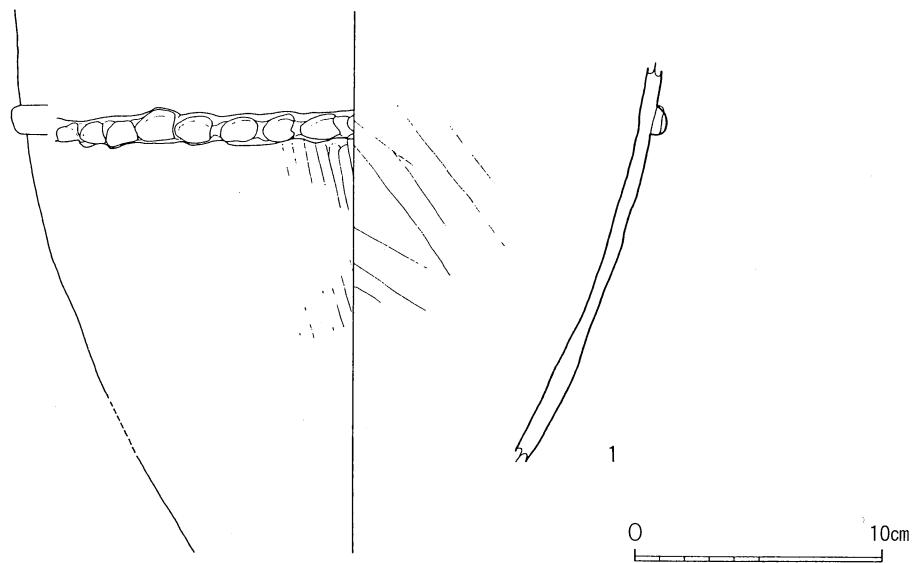


図5 「埋甕」実測図 (1/3)

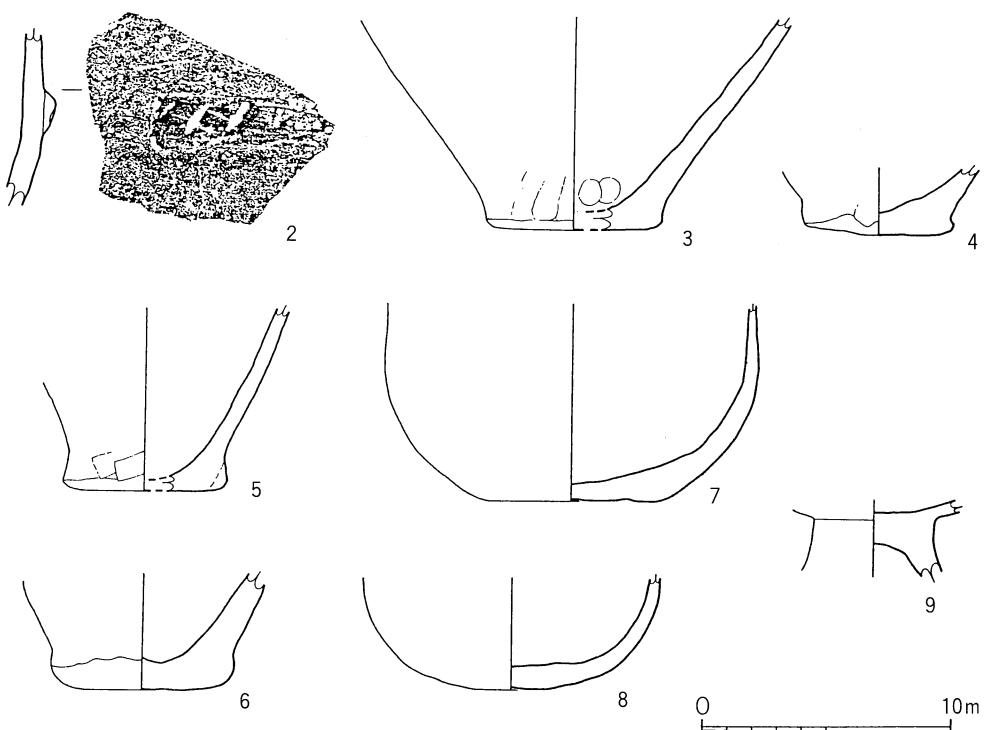


図6 土器実測図(1) (1/3)

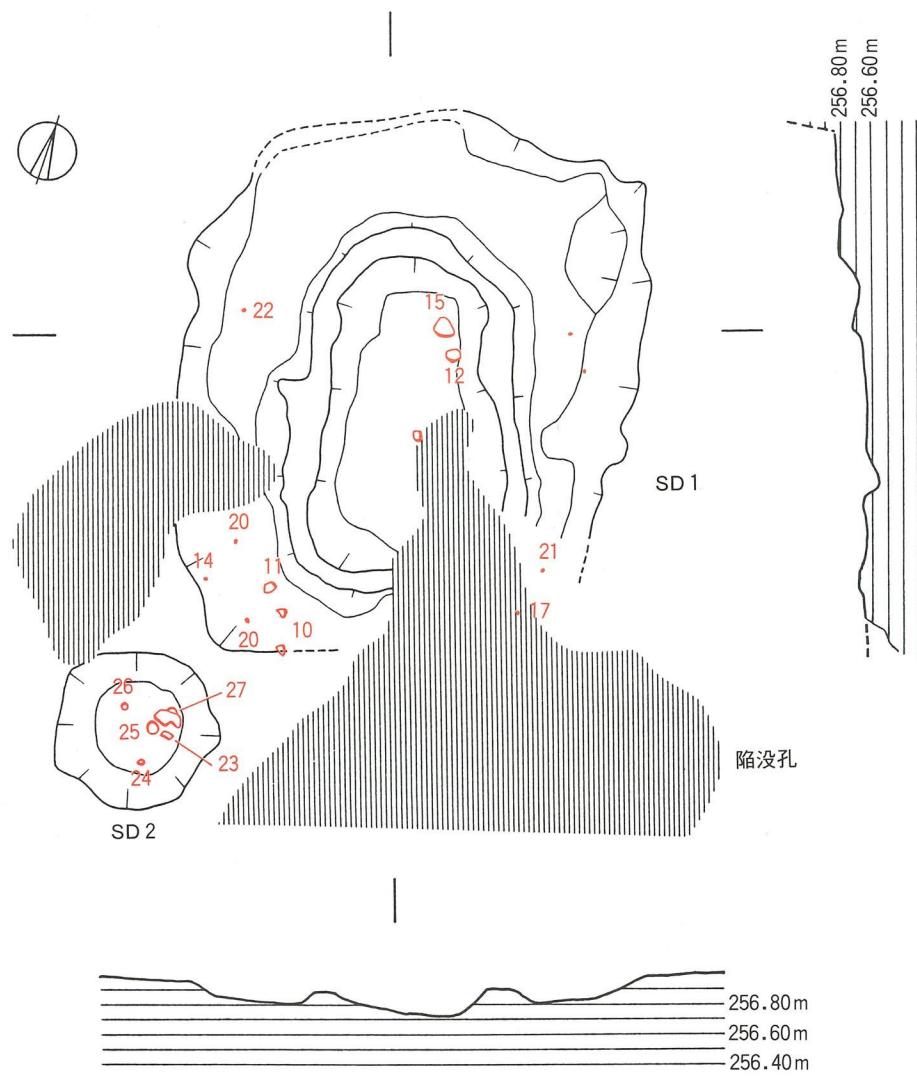


図7 SD 1・SD 2 (1/50)

(3) 古代～中世の土器・金属加工製品・陶磁器 (図10～図12)

土師器は数量的に最も多い。28～32は甕、33は鉢である。甕は口縁部の外反の度合い、肥厚の有無等により分類可能であるが、胴部の張り具合の判明する個体は少ない。34～47は杯である。径や形態を基にした分類は後に行なうが、特に底部が外方に張り出す型式のものが目立つ。全てヘラ切り底である。48～51は皿である。48・50のみ糸切り底。52～57は高台付碗である。58～62は黒色土器碗である。A類に属するようであるが、58は外面も一部黒色化させる。

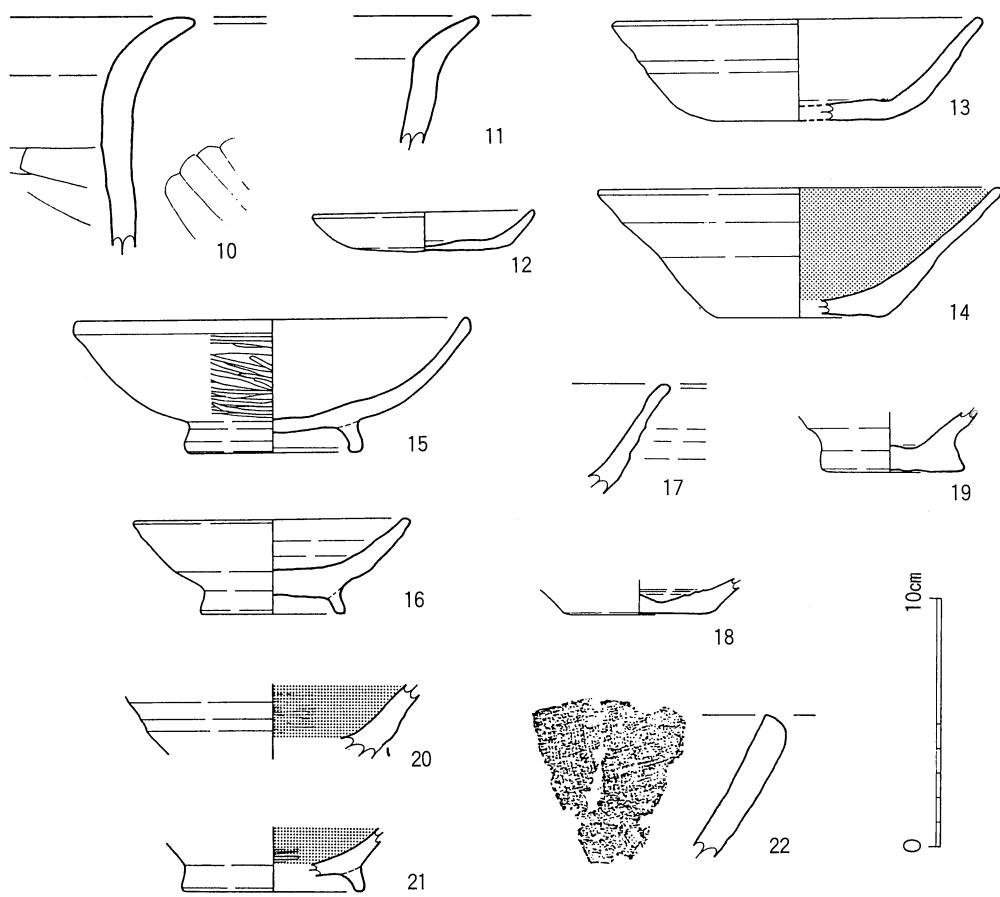


図8 SD 1 出土土器実測図 (1/3)

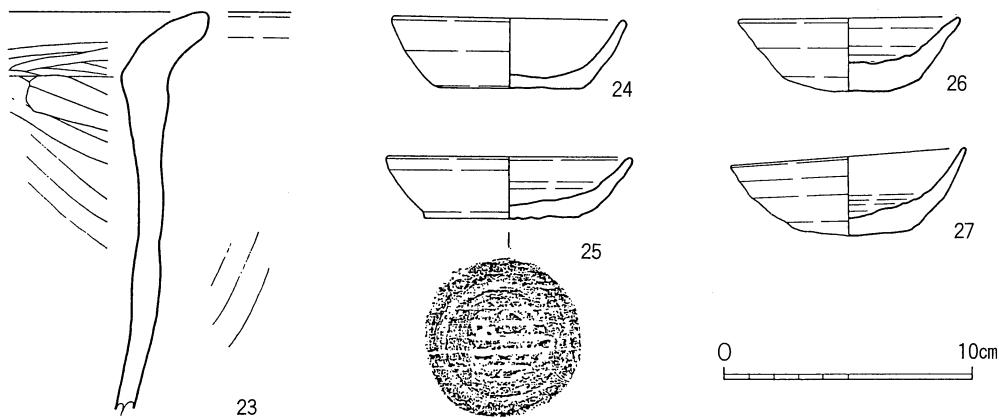


図9 SD 2 出土土器実測図 (1/3)

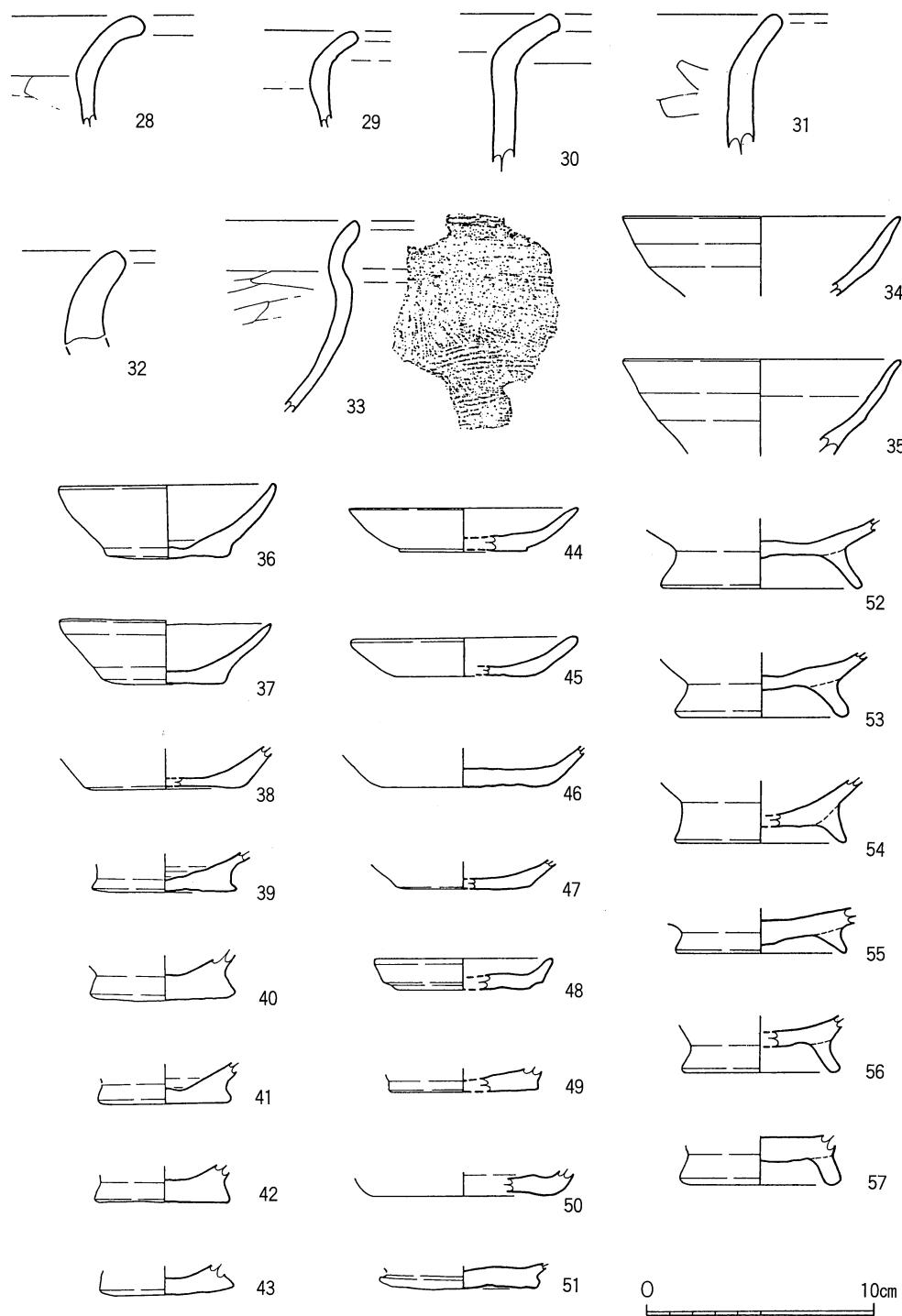


図10 土器実測図(2) (1/3)

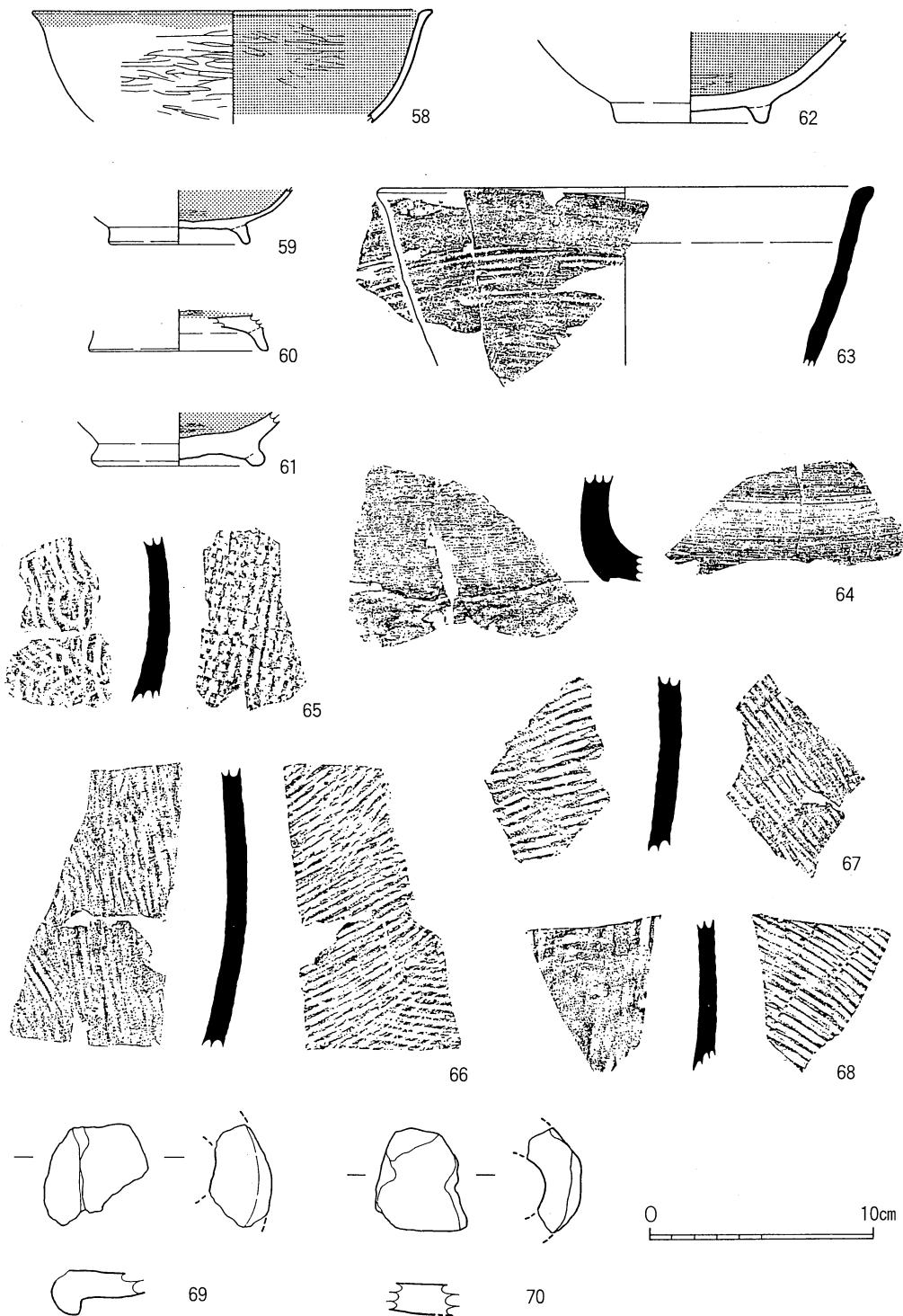


図11 土器・金属加工製品実測図 (1/3)

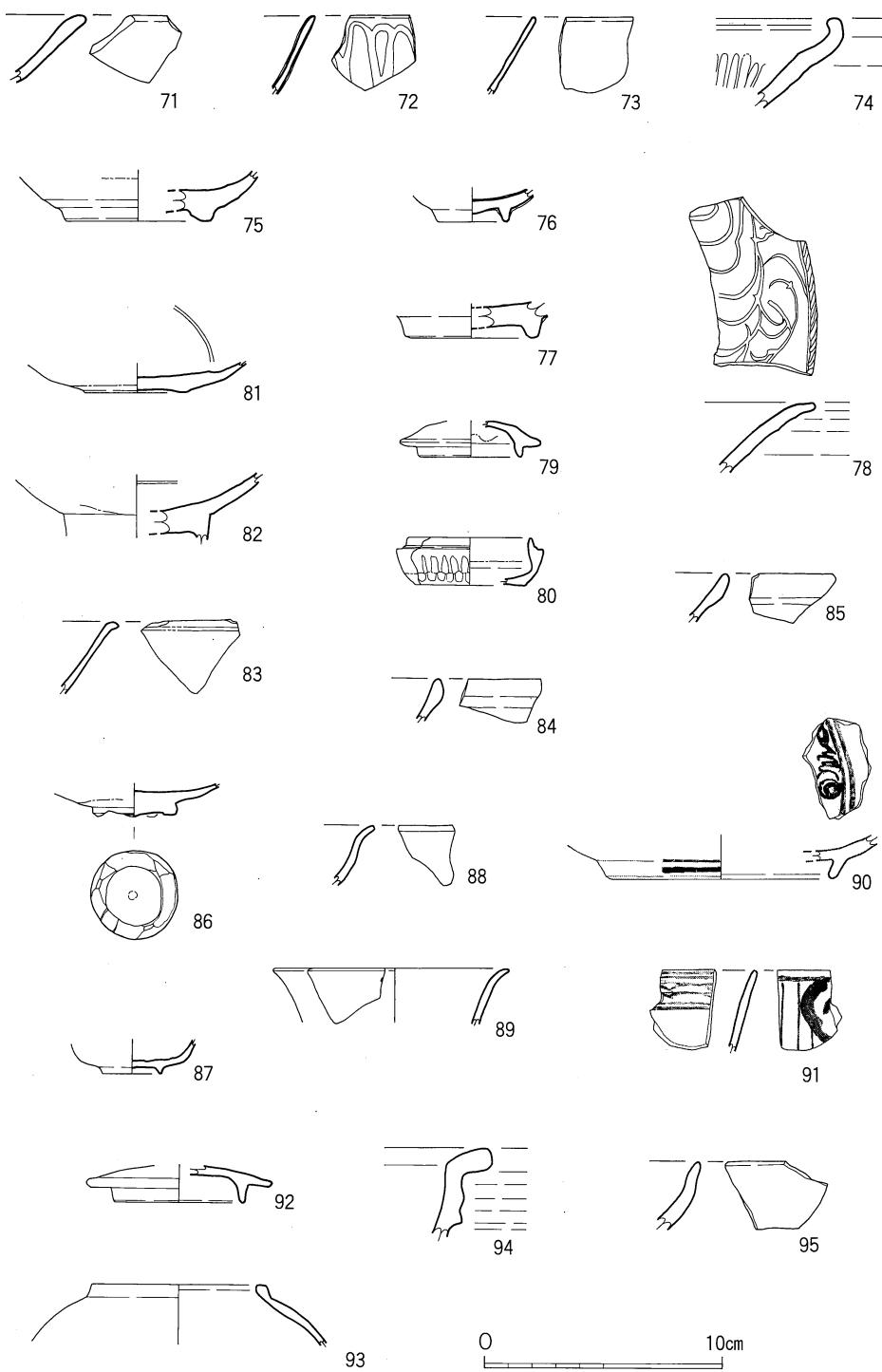


図12 陶磁器実測図 (1/3)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
1	K-9	—	㊈ナデ ㊉工具ナデ	C・礫	㊈黄橙・にぶい橙 ㊉灰黄褐・浅黄橙	㊈スス付着
2	J-9	III	㊈㊉ナデ	C・礫	㊈㊉浅黄橙	
3	J-9	IV	㊈㊉㊊ナデ	C	㊈浅黄橙 ㊉淡黄	㊈炭化物
4	J-9	III	㊈工具ナデ ㊉㊊ナデ		㊈淡橙・灰褐 ㊉浅黄橙	
5	H・I-7	IV	〃		㊈㊉浅黄橙	
6	K-9	IV	〃		〃	
7	K-9	—	㊈㊉㊊ナデ	C・礫	㊈浅黄橙・黄灰 ㊉浅黄橙	㊈丹塗りの痕跡
8	K-9	IV	㊈ナデ? ㊉ナデ	C	㊈浅黄橙・灰黄褐 ㊉淡黄・黄灰	㊈丹塗り
9	H-7	IV	㊈ミガキ? ㊉ナデ		㊈赤褐 ㊉赤灰・暗赤灰	㊈丹塗り
10	SD1 周溝		㊈ナデ ㊉ケズリ	礫	㊈黒 ㊉淡黄	
11			〃		㊈にぶい橙 ㊉黄橙	
12	SD1 中央土壤		㊈㊉回転ナデ		㊈㊉橙	
13	SD1 周溝		〃		㊈㊉浅黄橙	
14			㊈回転ナデ ㊉ミガキ	C	㊈橙・褐灰 ㊉にぶい褐・黒褐	
15	SD1 中央土壤		㊈㊉ミガキ		㊈明黄褐・橙 ㊉浅黄橙	
16	SD1 周溝		㊈㊉回転ナデ	C	㊈浅黄橙 ㊉橙	
17			〃		㊈㊉浅黄橙	
18	SD1 中央土壤		〃	C	㊈浅黄橙 ㊉にぶい橙	
19	SD1 周溝		〃		㊈浅黄橙・灰白 ㊉浅黄橙	
20			㊈回転ナデ ㊉ミガキ	礫	㊈浅黄橙 ㊉黒	
21			〃	C	㊈淡黄・にぶい黄橙 ㊉黒褐	
22			㊈ナデ? ㊉布痕		㊈橙 ㊉黄橙	
23	SD2		㊈ナデ ㊉ケズリ	B	㊈橙 ㊉明赤褐	㊈スス付着 ㊉一部炭化物付着
24			㊈㊉回転ナデ	C	㊈浅黄橙 ㊉黄橙	
25			〃	C	㊈㊉浅黄橙	㊈板目擦過痕

表1 土器観察表(1)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
26	SD2		㊂㊃回転ナデ	A	㊂にぶい橙・浅黄橙 ㊃浅黄橙	
27			〃	B	㊂にぶい橙 ㊃橙	
28	C-9	IV	㊂ナデ ㊃ナデ・工具ナデ	B・C	㊂明赤褐 ㊃にぶい赤褐	
29	H-7	IV	㊂㊃ナデ		㊂浅黄橙 ㊃黄橙	
30	E-12	V	〃	B	㊂㊃橙	
31	I-11	IV	㊂ナデ ㊃ナデ・工具ナデ	A	㊂浅黄橙 ㊃浅黄橙・にぶい黄橙	
32	F-10	IV	㊂ナデ ㊃工具ナデのちナデ	B・C	㊂㊃にぶい橙	
33	F-12	IV	㊂ナデ・ハケ ㊃ケズリ	A・B	㊂㊃にぶい黄橙・褐灰	㊂スス付着
34	H・I-8	IV	㊂㊃回転ナデ		㊂㊃浅黄橙	
35	G-12	IV	〃		㊂浅黄橙・灰褐 ㊃浅黄橙・にぶい褐	
36	H-8	IV	〃	C	㊂㊃浅黄橙	
37	H-8	IV	〃	C	㊂浅黄橙 ㊃黄橙	
38	E-11	IV	〃	C	㊂㊃浅黄橙	
39	C-10	IV	〃		㊂㊃淡黄	
40	D-9	III IV	〃	C	〃	
41	C-10	IV	〃		㊂㊃灰白	㊂㊃一部炭化物付着
42	E-9	III	〃	C	㊂淡黄橙 ㊃灰白	
43	L-8	IV	〃	C	㊂㊃浅黄橙	
44	K-12	V	〃	C	〃	
45	D・E-8	IV	〃	C	〃	
46	G-12	IV	〃	C	㊂㊃にぶい橙・にぶい褐	
47	G-9	IV	〃	C	㊂㊃浅黄橙	
48	E-10	IV	〃		㊂にぶい橙 ㊃橙	㊃糸切り
49	C-10	II	〃	C	㊂㊃浅黄橙	
50	C・H-10・11	III IV	〃		㊂㊃淡黄	㊃糸切り

表2 土器観察表(2)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
51	H-8	IV	回転ナデ		浅黄橙 灰白	炭化物付着
52	I-12	IV	〃	C	にぶい黄橙 橙	
53	H-8	IV	〃	C	回転ナデ	炭化物付着
54	I-8	IV	〃	C	〃	
55	G-12	IV	〃	C	〃	炭化物付着
56	C-9	IV	〃	C	回転ナデ	
57	G-7	IV	〃	C	回転ナデ	
58	G-12	IV	ナデ・ミガキ ミガキ	B	にぶい黄橙・黒 黒	
59	H-8	IV	回転ナデ ミガキ	B	浅黄橙・黄灰 褐灰	
60	G-7	IV	〃		淡黄 黑褐	一部黒変
61	G-9	IV	〃	C	浅黄橙 褐灰	
62	E-9	IV	〃	C・礫	浅黄 褐灰	
63	E-H-7~11	III IV	タタキ ナデ		回転ナデ	
64	C-D-9~10	IV	ヨコナデ カキメ・同心円タタキのちナデ		〃	
65	K-M-9~11	III IV	格子目タタキ 同心円文		回転ナデ	
66	D-F-9~10	IV	平行タタキ 平行線文		にぶい黄橙・浅黄橙 灰白	
67	L-N-8	IV	〃		回転ナデ	
68	F-11	IV	平行タタキ 同心円文		淡黄 灰白	

表3 土器観察表(3)

須恵器の出土数は少ない。63は鉢、64~68は甕の頸部・胴部である。

69・70はふいごの羽口である。69には黒色を呈する鉱滓が付着している。

陶磁器は、種別・器種ともに多様であるが、出土状況は極めて散発的で、小破片が多い。

71~78は青磁、79~87は白磁である。72は蓮弁文を施す碗、75は碗の底部で、見込みは蛇の目釉はぎがなされる。78は皿で口縁部に刻線を有する。79・80はいわゆる青白磁の合子。84・85は玉縁口縁の碗、86は切り高台の皿の底部、87は白磁の小皿の底部。見込みが蛇の目釉はぎとなる。88~91は染付で、90は玉取獅子文の皿である。92・93は在地系陶器の茶家の

No	遺構・区	層	種別	法量(単位cm)	胎土 (色)	色調	備考
71	K-7	IV	青磁		白	④④緑 ④灰白	
72	I-11	IV	〃		灰白	④④灰緑 ④灰白	
73	B-9	III	〃		灰	④④灰緑 ④灰	
74	J-6	III	〃		白	④④灰緑 ④灰白	
75	J-6	V	〃	⑩(6.1)	灰白	④④青緑 ④灰白	
76	D-10	III	〃	⑩3	灰	④④灰緑 ④灰黒	
77	E-7	III	〃	⑩(5.6)	灰	④④灰緑 ④灰	
78	J-9	II	〃		白	④④灰緑 ④灰白	
79	H-9	III	白磁(青白磁)	⑩(4.2) ⑩(5.95)	白	④④青白 ④白	
80	I-11	IV	〃	⑩(5.2) ⑩(6.2) ⑩2 ⑩(4.6)	白	④④青緑 ④灰白	
81	L-8	III	白磁	⑩4.4	灰白	④④灰緑 ④灰白	
82	F-8	—	〃		灰白	④④灰緑 ④灰	
83	J-8	III	〃		白	④④灰緑 ④灰白	
84	F-10	III	〃		白	④④青緑 ④灰白	
85	H-12	P1	〃		白	④④灰緑 ④灰白	
86	F-8	IV	〃	⑩3.6	白	④④灰白 ④白	
87	M-10	V	〃	⑩2.5	白	④④青白 ④白	
88	K-7	II・III	白磁(?)		白	④④白 ④白	
89	J-6	II・III	染付	⑩(9.8)	白	④灰白	
90	H-6	II	〃	⑩(9.4)	白	〃	
91	L-6	III	〃		白	〃	
92	F-G-11	II・III	陶器	⑩(5.4) ⑩(7.8)	赤褐	④褐 ④④赤褐	
93	G-9	II	〃	⑩(7.3)	赤褐	④暗オリーブ ④褐 ④赤褐	
94	H-9	II	〃		黒褐	④④暗オリーブ・赤褐 ④赤褐	
95	G-6	II	〃		灰黒	④④黒・褐 ④灰	

表4 陶磁器観察表

蓋と口縁部、94は鉢、95は天目茶碗である。

第5節 その他の時代の遺構と遺物

(1) 石器 (図13・14)

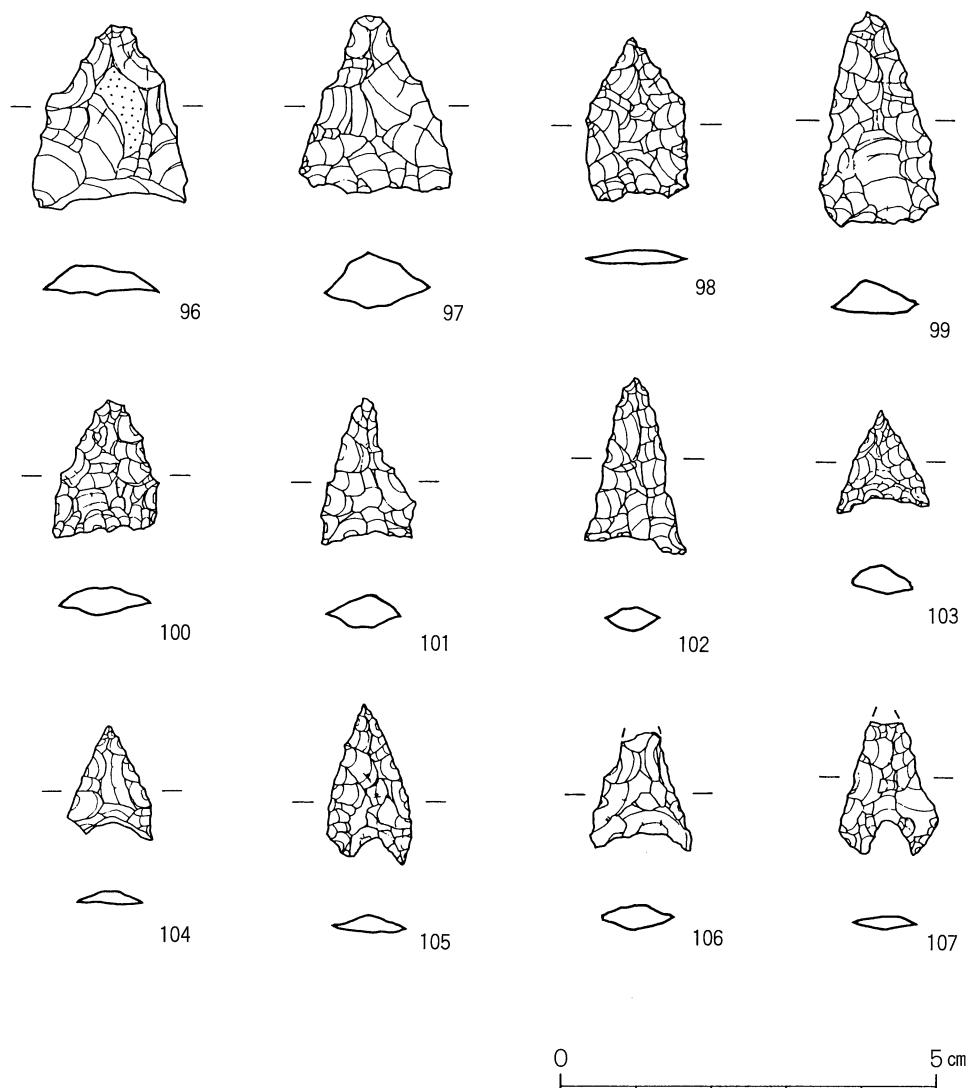


図13 石器実測図(1)(1/1)

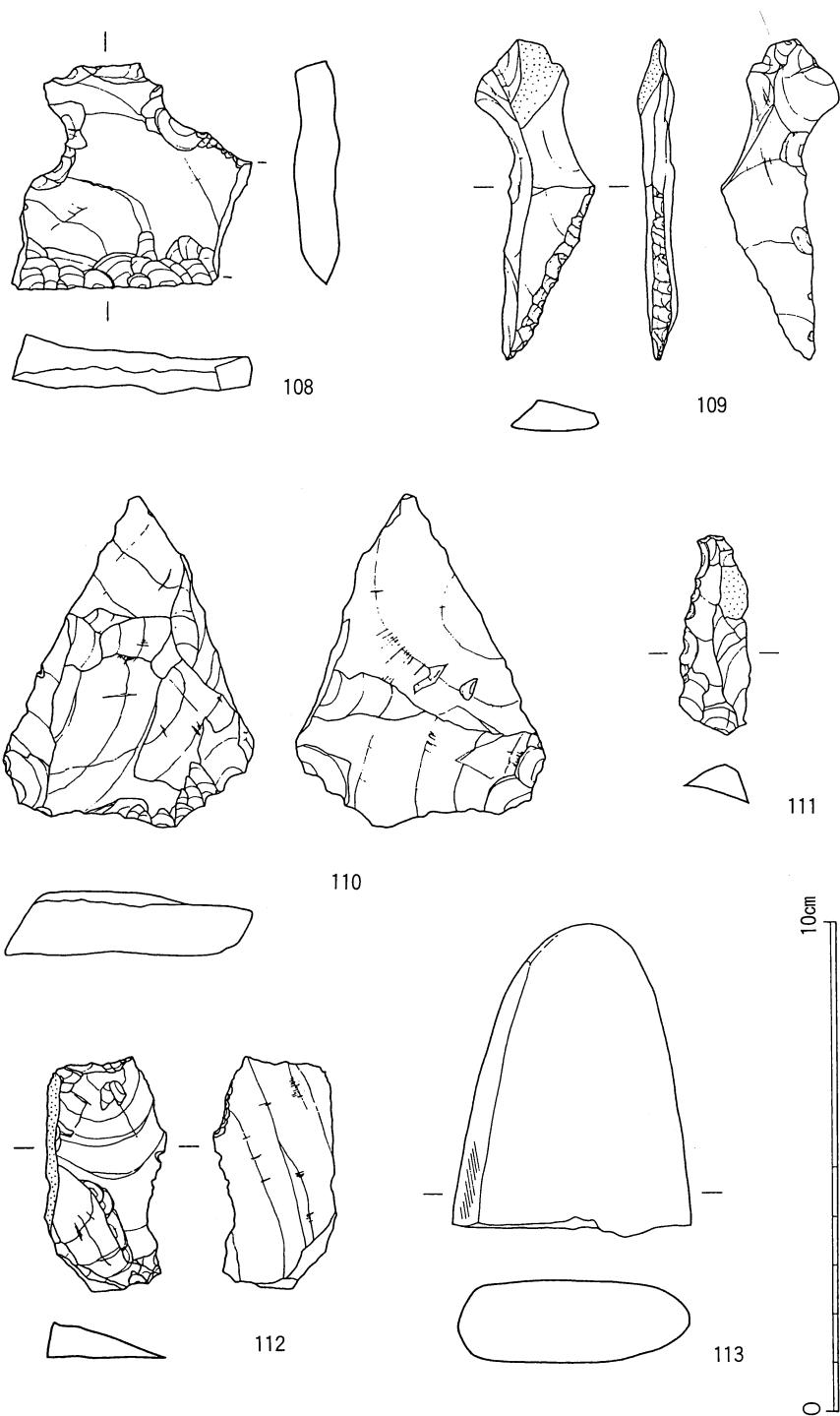


図14 石器実測図(2) (2/3)

以下に掲げる石器は、全て縄文時代のものと考えられるものの、今回の調査では縄文土器と判明する個体が皆無であったため、詳細な時期等は不明である。ただし、試掘調査において少量の早期土器片が出土していることから、早期に属する可能性が高い。

96～107は打製石鎌である。96は未製品であろうか。108は横形、109は縦形の石匙である。110・112は剝片、111は削器か。113は磨製石斧の基部の破片である。

(2) 時期不明土坑

S C 1～S C 4は、出土遺物もほとんど無く、時期、機能ともに不明な土坑である。覆土はいずれも灰色の粘土で、炭化物を含むものもあるが、状況から自然炭化材と見られる。これらは人為的な作事の痕跡ではなく、流水の作用による陥没孔であろう。図1に示した以外にも、S D 1付近など数箇所認められる。

No	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
96	石鎌未製品	チャート	2.40	2.08	0.71	3.50	
97	石鎌	々	2.47	2.18	0.69	3.00	
98	々	姫島 黒曜石	2.14	1.37	0.24	0.90	
99	々	チャート	2.81	1.64	0.43	2.05	
100	々	々	1.78	1.55	0.42	1.10	
101	々	姫島 黒曜石	1.97	1.41	0.55	1.05	
102	々	チャート	2.25	1.45	0.40	1.00	
103	々	黒曜石	1.35	1.33	0.44	0.45	
104	々	チャート	1.48	1.20	0.28	0.40	
105	々	姫島 黒曜石	2.27	1.17	0.25	0.55	
106	々	安山岩	1.63	1.45	0.45	0.85	
107	々	姫島 黒曜石	1.78	1.35	0.20	0.50	
108	石匙	チャート	4.80	5.05	0.88	26.35	
109	々	安山岩	6.50	1.91	0.60	7.60	摩滅著しい
110	剝片	チャート	6.87	5.25	1.30	39.80	
111	々	々	4.24	1.49	0.86	4.80	
112	々	々	4.80	2.44	0.66	10.30	
113	磨製石斧	砂岩	6.54	4.85	1.77	79.30	

注 ふいごの羽口は69がD-8区 IV層、70がJ-12区 IV層の出土。

表5 石器計測表

第6節　まとめ

(1) 「埋甕」遺構について

これについては、他遺跡の事例から判断して、堅穴住居に伴う施設であった可能性が大きい。この種の遺構は近年、検出例が増えており、宮崎市・淨土江遺跡208号住居や新富町・藤掛遺跡など、いずれも竈が出現する直前の6世紀後半前後の時期の火処と見られる。

(2) 古代末の墓制について

S D 1・S D 2について、次項で触れる出土土器の年代観から、「古代末」の所産と考えた。

S D 1は前述の通り上部の削平が著しく、不確定な部分も多いが、遺存した平面形から近年検出事例の増えている塚墓の可能性がある。塚墓は、静岡県磐田市・一の谷中世墳墓群の報告で用いられた呼称で、「盛り土、すなわち塚を築いた墓。周囲に方形に溝をめぐらし、その中に埋葬部が設けられる」との規定がなされている。³ S D 1は、「盛り土」以外の要件を満たしている。「盛り土」の有無の点については、繰り返し述べるように、本来の在り方は不明と言わざるを得ない。

南九州での同種の遺構の検出例としては、宮崎市・宮崎学園都市遺跡群の前原西遺跡（⁴「14～15世紀」）、鹿児島県鹿屋市・榎崎A遺跡（⁵「平安時代」）が知られている。

他の例と比較すると、本遺跡のそれは周溝の内部に対して墓壙面積の占める割合が高い点が特筆される。これでは余り高い盛り土は想定できることになる。副葬品に、他と隔絶する内容のものがない（ただし墓壙まで攪乱を受けている点には注意を払う必要がある）こともあり、この土葬墓の被葬者は、土着的な基盤を持った在地有力者（有力農民など）ということになろうか。⁶

(3) 土師器について

法量と器形の点から出土した土師器を見ていく。

甕については、口縁部以外の状況が不明である。えびの市・永田原遺跡の分類も参考に、器形の分類を行なった。

A　　口縁部～頸部が肥厚し、外反する。

B　　口縁部～頸部の肥厚が見られない。

I　　口縁部が最大径となる。

II　　口縁部径と胴部径がほぼ同じか胴部径が上回る。

a　内面の稜線が明瞭

b　内面の稜線が不明瞭

これに従うと、A類は23と32のみで、しかも32は頸部以下が不明である。A—I—a類に

は23が該当する。B類では、I-aが11・30、I-bが10・31、IIの可能性があるのが28・29である。図面を掲載した以外にも10個体ほど判別可能な破片があるが、A類は少ないようである。

杯については、最も出土量が多い為計測表を作成した（図15）。それによれば、口径9～10cm、器高2～3.5cmの範囲に多くが収まる。それ以外には口径12～15cm、器高4～5.5cmの比較的大形の一群、口径7.5cm、器高1.5cm以下の小形のもの、という2グループが認められる。

大形の一群は、SD1出土の13・14（黒色土器A類）と包含層出土の34・35である。それぞれ2個体ずつであるが、さらに口径の差から13・14と34・35という2亜群に分けて考えてみよう。前者は、底部から体部にかけてナデられ、特に13は稜を形成しない。後者については、底部は不明であるが、35を見る限り外方に張り出すようである。どちらも薄く仕上げられる。

最も多い中形の一群は、底部が外方に張り出す特徴を示す場合が多い。また、淡黄色を呈し、胎土中に褐色の粒子を多く含む。例外は24～27で、26・27は底部と体部の境を丁寧にナデする。

小形のものは、48のみである。糸切り底で、時代の下る資料である。

椀、黒色土器、皿については考察を加える程の材料を見いだせないが、椀については15など体部が内弯気味になる形態となる。その他については器形を知り得ないが、少なくとも数

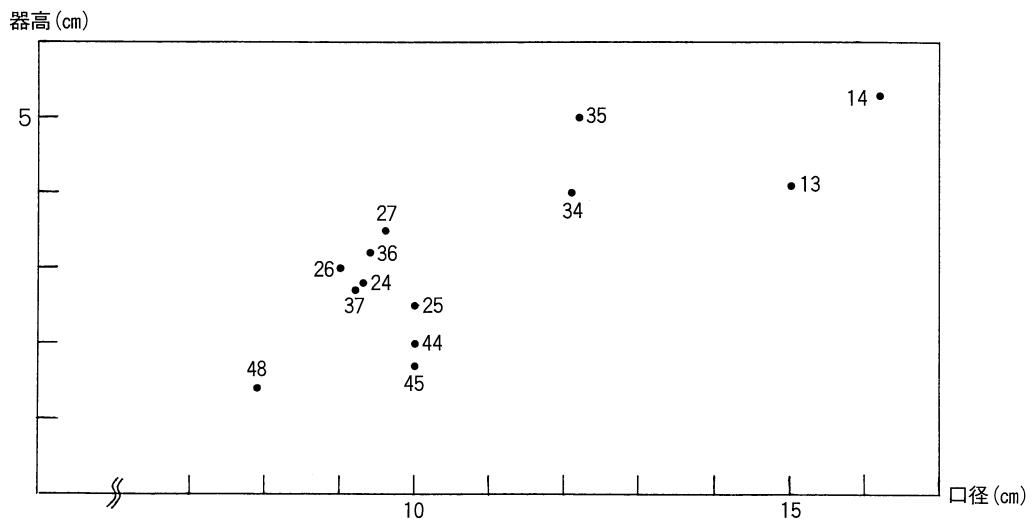


図15 土師器杯の法量の分布

量的には器種組成の中で一定量を占めることが窺える。⁸

黒色土器では、薄く精緻な仕上げのもの（58・59）と厚手で、胎土中に褐色の粒子を多く含むもの（60・61）の二者が認められることに注目しておきたい。

以上見てきた土器群の年代については、有力な手掛かりとなる伴出遺物がなく、また当地域の古代～中世の土器編年が全く手つかずの状況であるため、判然としない。おおよそ中心となる年代は、高台付椀、黒色土器や、小型化した杯より11世紀代に位置づけられよう。糸り底のものは14世紀～15世紀代であろうか。陶磁器の大半は後者に関連すると見られる。在地系陶器には近世に下るものもあり、それを加えれば、本遺跡は大きくは3時期にわたって形成されたとすることができよう。

現段階では、該期の土器に対する理解が十分でないため、必ずしも遺跡の保有する編年の情報を正確にくみとれていない。機会を見つけて再考したい。

(註)

1. 野間 重孝 1981 『浄土江遺跡』 宮崎市教育委員会
2. 岩永哲夫他 1983 『藤掛遺跡』 新富町教育委員会
3. 山崎克己他 1993 『一の谷中世墳墓群遺跡』 磐田市教育委員会



挿入図版1 S D 1 中央土壙出土土器

4. 面高 哲郎 1988 「前原西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』 4
宮崎県教育委員会
5. 中村和美他 1992 『榎崎A遺跡』 鹿児島県教育委員会
6. 3の文献では、塚墓の被葬者は本領に葬られた北条氏のトップクラスの従者以下の層であるとの見解を石井進氏の論から引用しながら述べている。
7. 谷口 武範 1990 「永田原遺跡」『永田原遺跡・小木原遺跡群蕨地区・口ノ坪遺跡』
えびの市教育委員会
8. 宮崎学園都市遺跡群の各遺跡では、古代は椀の割合が低いようである。
岡本 武範 1991 「日向における古代末の土器 一宮崎学園都市遺跡群を中心として」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ 日本中世土器研究会

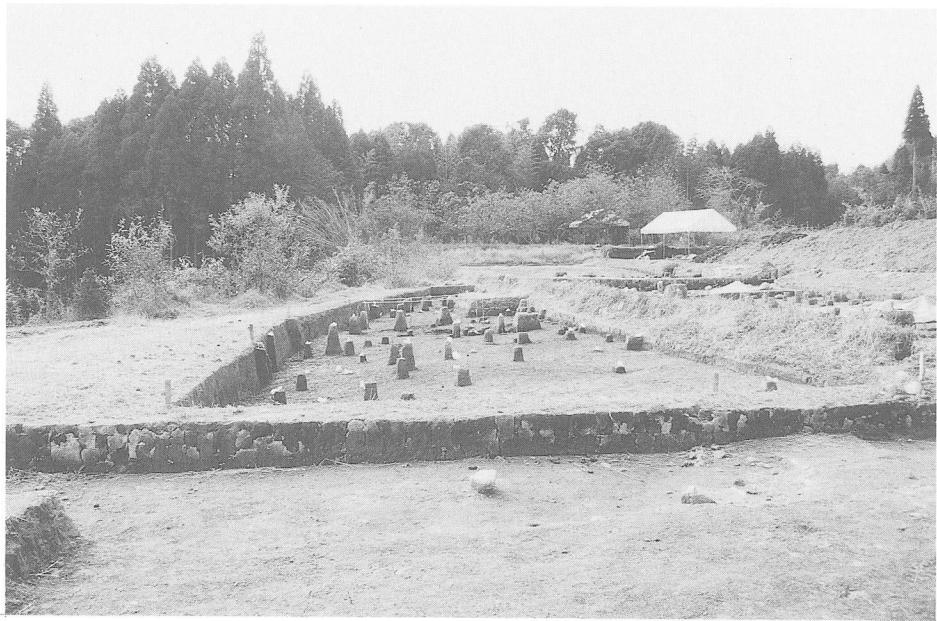
図版



1 平原遺跡遠景



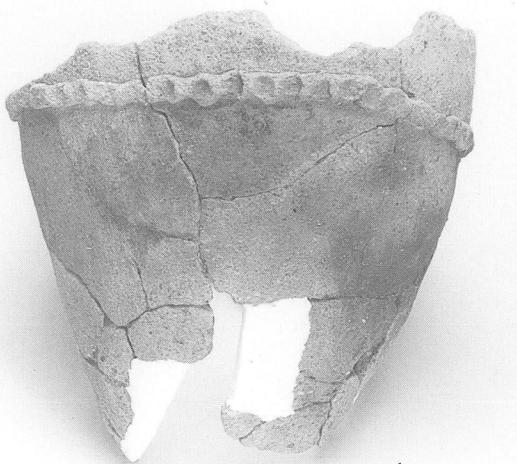
2 調査区の状況(1)



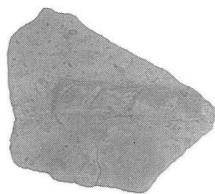
3 調査区の状況(2)



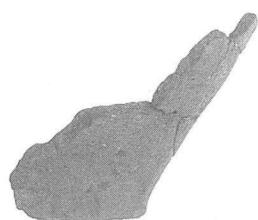
4 I-8区 遺物出土状況



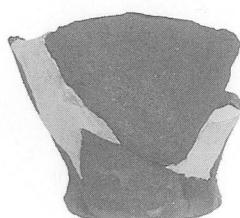
1



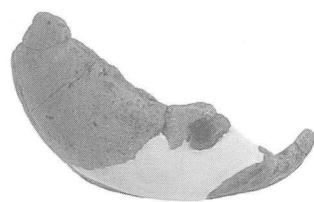
2



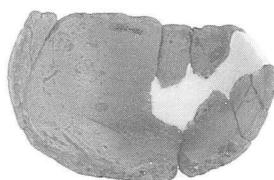
3



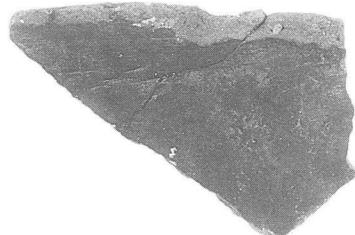
5



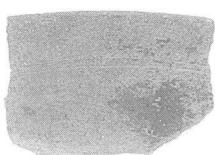
7



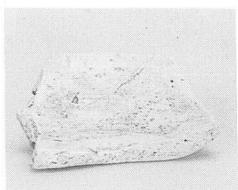
8



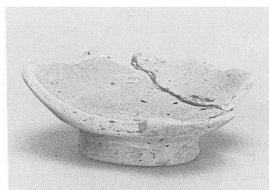
10



11



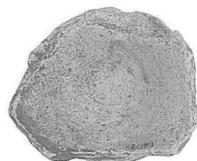
13



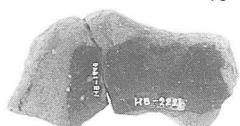
16



18



19

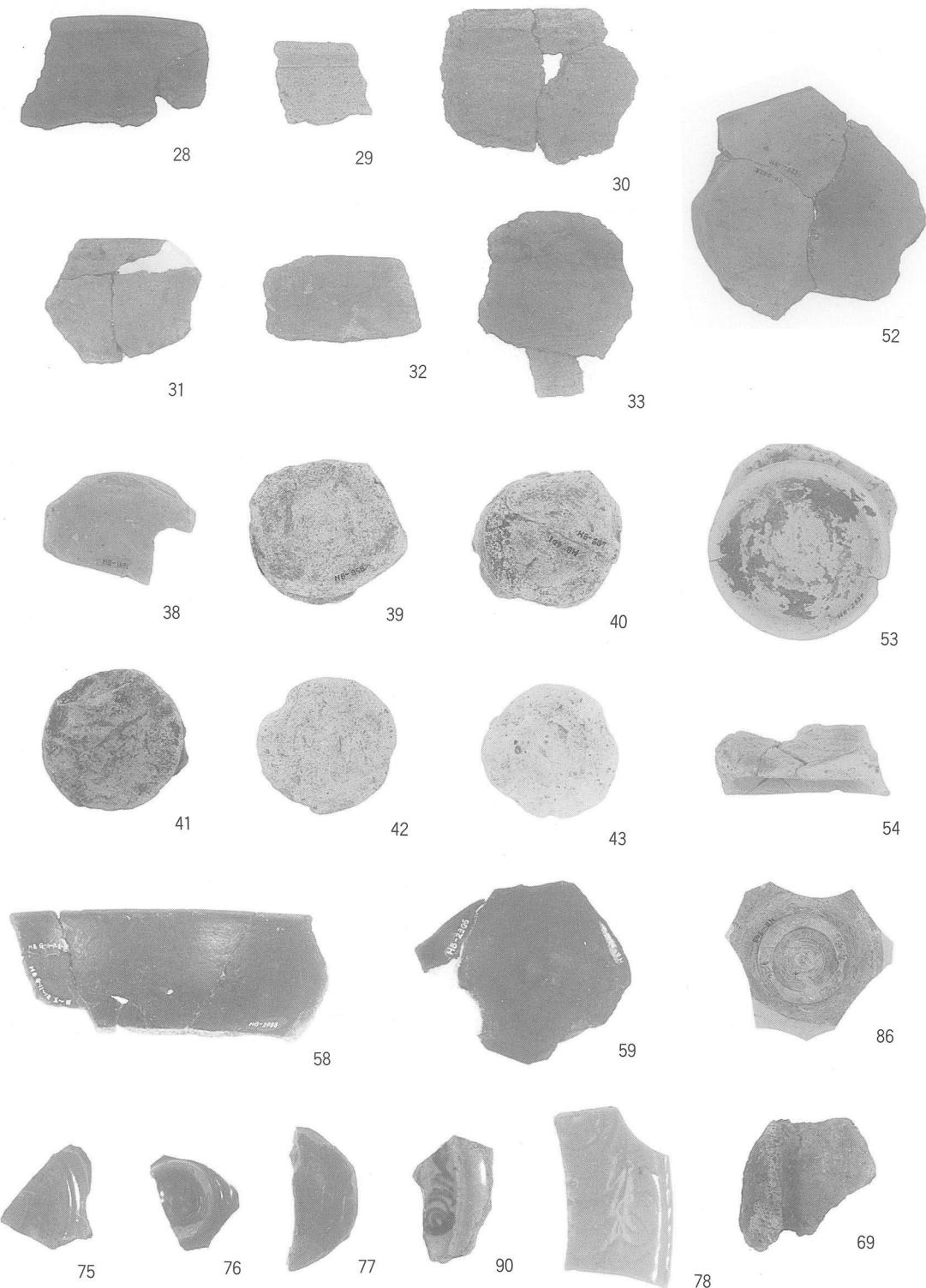


20



21

5 古墳時代の土器・S D 1周溝出土土器



6 古代～中世の土器・陶磁器・金属加工製品

第Ⅳ章 妙見遺跡

第1節 調査の概要

妙見遺跡も平原遺跡と同様の条件の、緩斜面を成す丘陵のほぼ全域に広がっている。谷底面との比高差は約15mを測る。今回発掘調査を実施した3遺跡の中では唯一、遺跡のほぼ全域が対象区となり、大きな成果を上げることができた。

発掘調査に際しては、まず地形に沿って、基線を定め(N-26°50'-E)、それをもとに10mグリッドを設置していった。そして、北から南を1・2・3…区、東から西をA・B・C区として、その組み合わせで区画を表示した。

発掘調査着手前の遺跡地は山林、荒れ地となっており、巨大な杉の樹根によりかなり攪乱を受けており、表土中に土器片やチップが多数露出している状況であった。

発掘調査は、平成2(1991)年5月27日から平成3年3月16日まで実施している。途中、梅雨時期の長雨に悩まされ、しかも、予期しなかった古墳時代の集落の出現という事態で、調査期間が大幅に延びる結果となった。掘り下げ面積は4,300m²である。

調査においては、まず後述する遺物包含層のⅡ・Ⅲ層を掘り下げ、Ⅲ b層(「アカホヤ」層)上面で遺構の検出作業を行なった。検出された遺構の時代は、大きく中世と古墳時代に分かれる。中世の遺構は10区~13区を中心に認められ、基本的にⅡ層土を覆土とする。主な遺構としては竪穴住居1基、掘立柱建物1棟、溝状遺構2条などが挙げられる。古墳時代の集落は、竪穴住居42基、土坑14基などより成る(図1)。さらにⅢ b層除去後、Ⅳ・V層の縄文時代早期の調査を行なったが、期間の問題からV層の掘り下げは部分的にしか成し得なかつた(図2)。

第2節 層序(図3~図8)

F区東壁を中心に層位図を作成している。基本層序は以下に示す通りである。

- I 層 表土。粘性小。樹根を多く含む。前述の通り、遺物も多く含む。
- II 層 褐色土。中世に形成された層と考えられる。
- III a 層 鈍い黄橙色土(Hue 10YR6/4)で火山灰の土壤化層。オガクズ状。古墳時代の遺物包含層であるが、縄文土器片の出土も多い。
- III b 層 「アカホヤ」層。鬼界カルデラ起源の火山灰。下部には降下軽石や火碎流が見られ、IV層との層界は不整合となる。鮮やかな黄橙色(Hue 10YR7/8)を呈し、かたい。ところどころクラックが入り、ブロック状になる。
- IV a 層 褐色土(Hue 10YR4/4)。砂質。縄文時代早期の遺物を包含する。
- IV b 層 やや黒味がかった褐色土で、小礫を含む。D・E-11・12区のみに見られる。

- IV c 層 赤味がかった暗褐色土 (Hue 5 YR4/2) で、粗砂・細礫を含む。
- IV d 層 暗赤褐色土 (Hue 5 YR4/2)。IV c ・ IV d 層ともに F ~ H - 3 ・ 4 区付近（浅い谷地形を呈する）に見られる。
- V 層 黒色土 (Hue 10YR4/4)。上部を中心に少量の遺物を含む。
- VI 層 基盤の粘土・礫層。ところによって深度に差があり、浅い 5 ・ 6 区付近などは地表下 80 ~ 100cm で現われる。

ところどころ III 層の下位に青灰色の固結ロームのブロックが見られる。「牛の脛ローム」と呼ばれるものに該当する。

第3節 旧石器時代の遺物

本遺跡は、調査中に旧石器時代の包含層が確認されておらず、縄文時代早期を上限とするものと認識していたが、計らずも調査終了後の遺物整理の段階で当時代の石器の存在が明らかになった。

本遺跡では IV 層と基盤層直上の V 層が縄文時代早期の遺物包含層であるが、V 層中の土器は貝殻文円筒土器の古い段階のものに相当し、主として上層部で出土していることから、V 層最下層部が旧石器時代の包含層に該当する可能性が高い。しかしながら、本遺跡の土層堆積状態の悪さと後述のような遺物の移動の問題もあり、出土した多数の石器・剝片類の中から旧石器時代のものだけを抽出するのは不可能である。したがつて、ここでは、明らかに旧石器時代のものと特定できる「定形化した石器」のみを取り扱い、他は縄文時代早期の遺物として包括している。

旧石器時代の石器は総数 32 点で、器種と出土点数は、ナイフ形石器 12、剝片尖頭器 1、台形石器 1、三稜尖頭器 1、細石核 4、細石刃 13 である。石材は、ナイフ形石器の 4 点を除く他はすべて黒曜石を使用している。遺物の出土層位をみると V 層出土は 1 点のみで、IV 層が 5 点、基盤層まで掘り込んだ 1 号溝状遺構中より 2 点、他は I ・ II 層となっており、遺物がかなり移動していることが窺える。石器の出土位置は C - 11 グリッドが最も多く、ここを中心とした半径 30m 以内に散在しているが、V 層調査部分が限られること（図 2 参照）や出土層位を考慮すると、台地南端の斜面に集中する傾向は捉えられるものの、厳密な意味での分布状況は把握できない。

以下、各器種について報告するが、実測図掲載資料 1 ~ 9 の計測値は表 1 に示した。

ナイフ形石器はかなり小型のものが多く、加工の状態により次の二つの類型に分類できる。

I 類は、縦長剝片を素材として基部に刃潰し加工を施すもので、1 点のみである。II 類は、素材剝片の片側に斜めの刃部を残し、両側縁に刃潰し加工を施したもので、9 点がこれに属

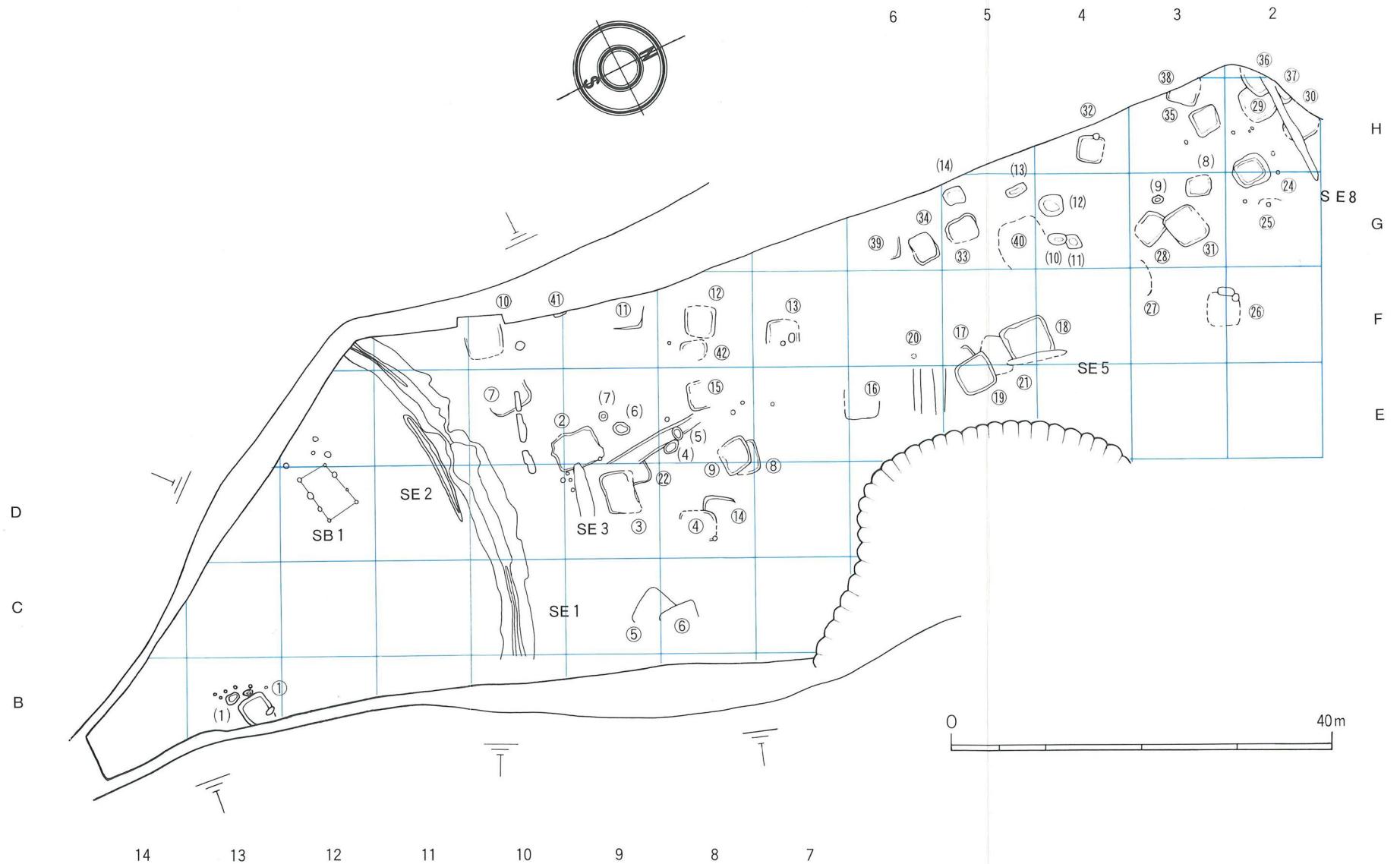


図1 妙見遺跡 古墳時代～中世遺構検出状況 (1/600)

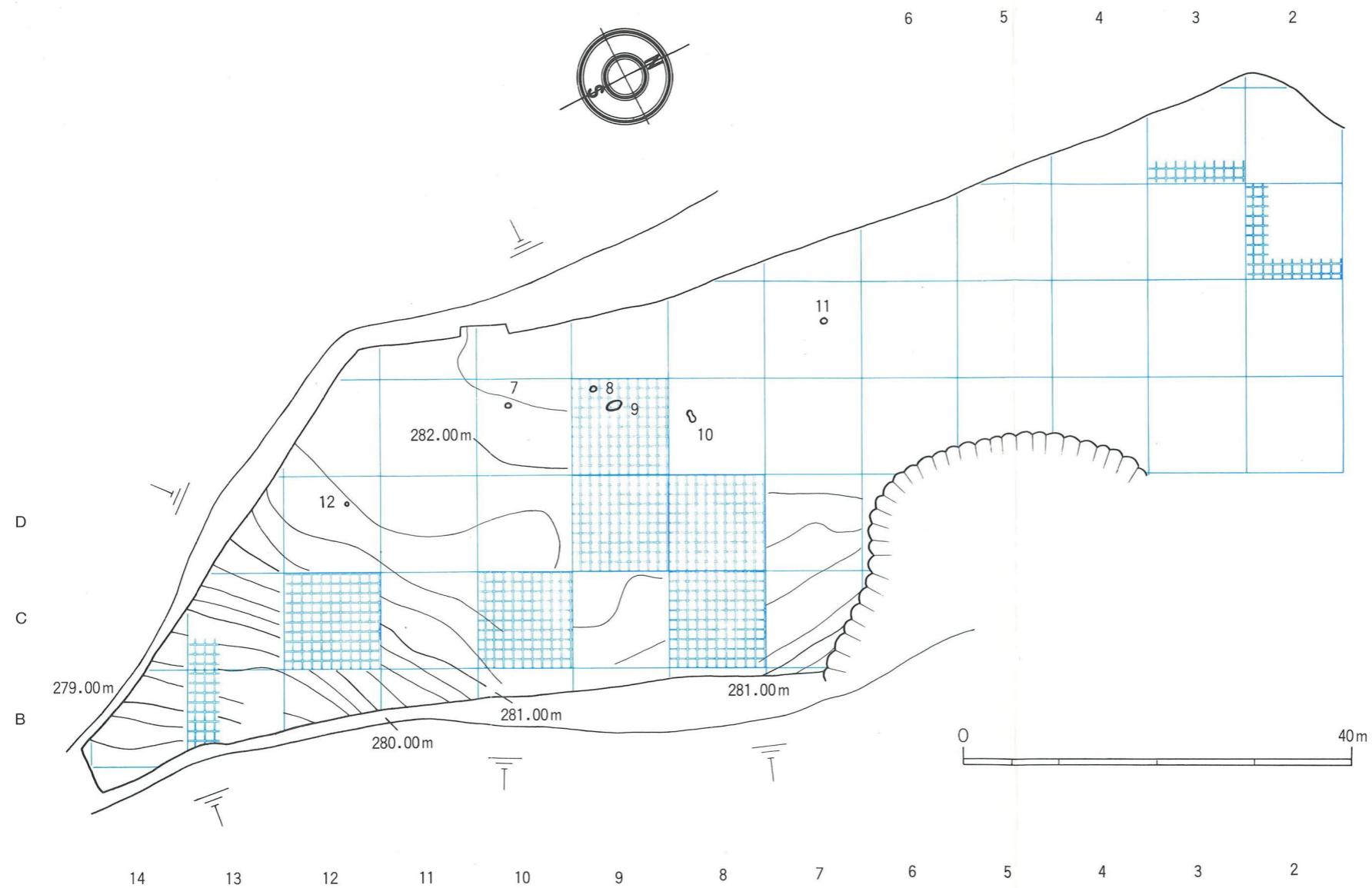


図2 妙見遺跡 繩文時代早期面の状況

- 等高線はⅣ層とⅤ層の層界でのもの
- スクリーントーン部分はⅤ層まで掘り下げを行なったところ
- 7～13は、SI=集石遺構

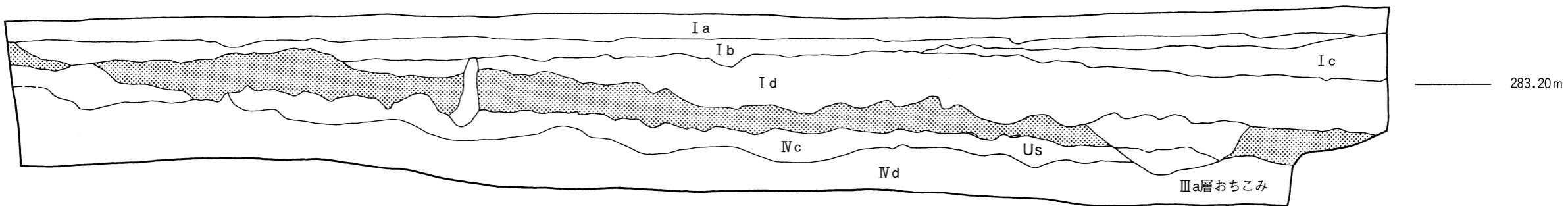


図3 F-3区 東壁層位(1) (1/40)

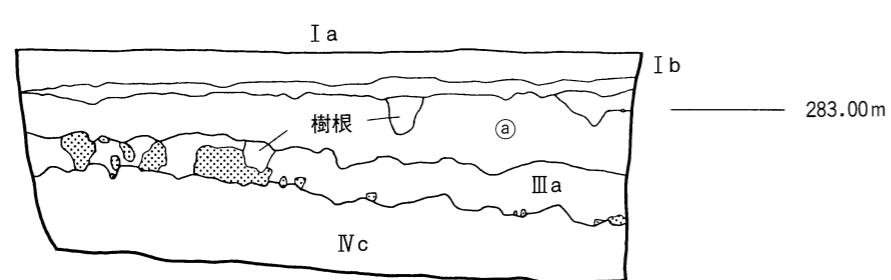


図4 F-3区 東壁層位(2) (1/40)

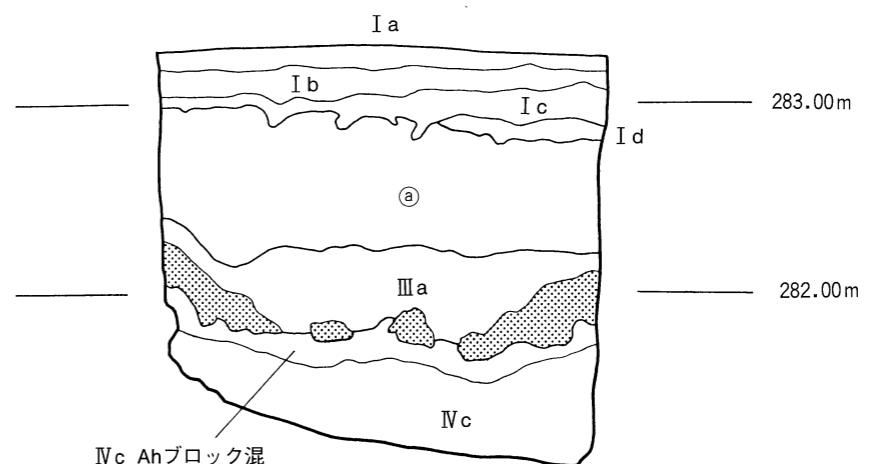


図5 F-4区 東壁層位 (1/40)

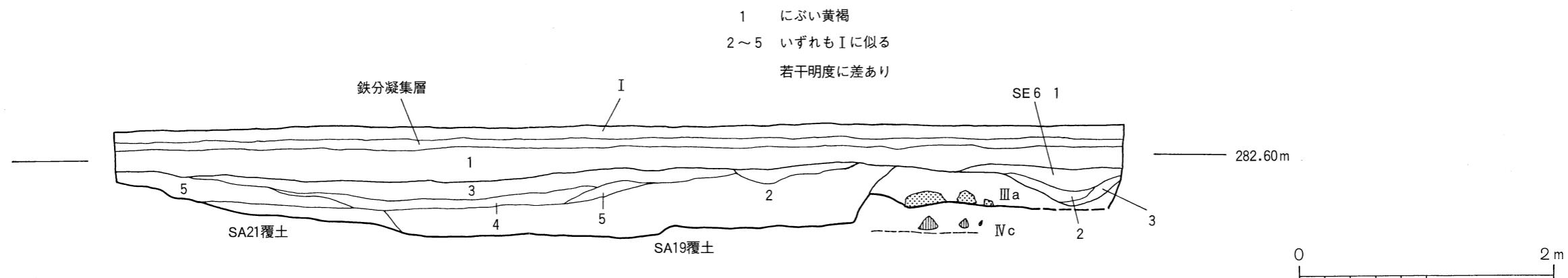


図6 F-5・6区 東壁層位 (1/40)

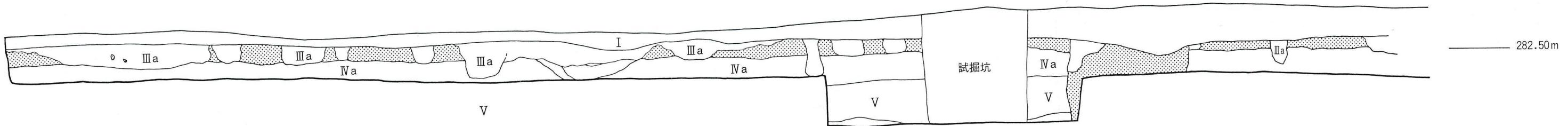


図7 F-9・10区 東壁層位 (1/40)

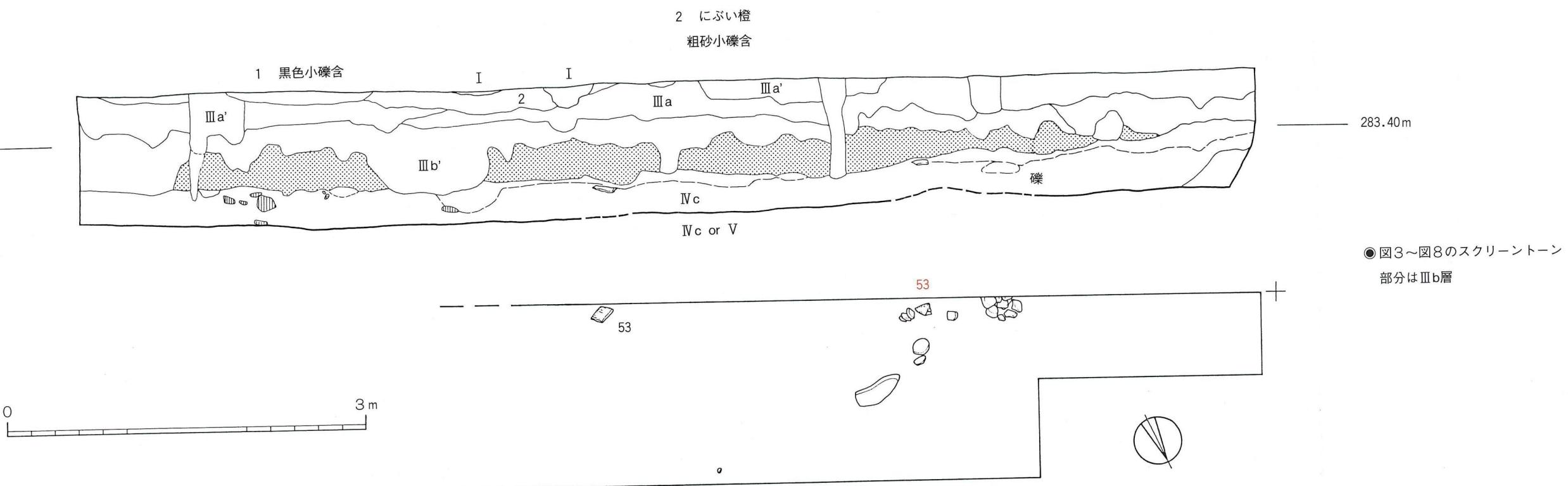
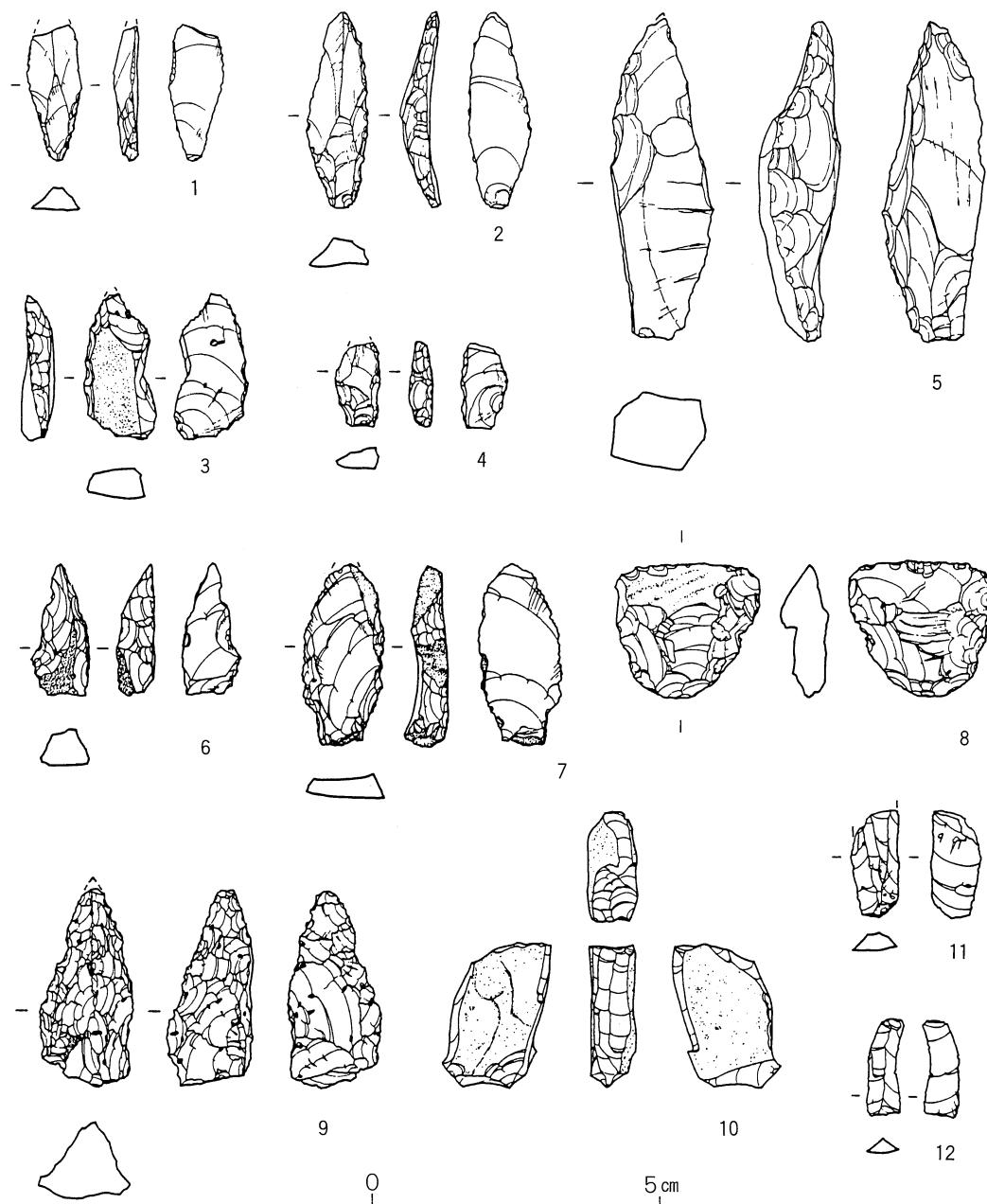


図8 G-2区 南壁層位およびIIIb層直下遺物出土状況 (1/40)

する（2～5、表1）。この中には、一方の側縁が刃潰し加工の必要のない状態になっているもの2点（3、表1c）も含めている。素材は、縦長剝片が5点、横長剝片が4点である。これらの他、所属不明の破片が2点ある。

剝片尖頭器1点（7）は黒曜石の縦長剝片を素材とし、打面（自然面）を残している。背



第9図 石器実測図(1)

No	器種	出土区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	ナイフ形石器	—	—	(2.38)	0.94	0.44	(0.90)	泥岩 ホルンフェルス	先端部欠損
2	〃	D-12	I	3.40	1.08	0.50	1.80	ガラス質 安山岩	
3	〃	C-12	IV	2.51	1.24	0.59	1.90	黒曜石	
4	〃	E-12	I	(1.49)	0.80	0.39	0.45	〃	先端部欠損
5	〃	SE1 (D-10)	—	5.62	1.56	1.33	13.60	砂岩	
a	〃	C-12	I	1.95	0.81	0.28	0.45	黒曜石	
b	〃	C-12	IV	2.87	1.24	0.69	2.45	〃	
c	〃	C-11	IVb	4.77	2.15	1.02	6.70	〃	一側縁は自然面
d	〃	C-11	I	(4.13)	(1.29)	(0.77)	(4.40)	ガラス質 安山岩	全体に摩滅著しい
e	〃	SE1 (C-11)	—	2.17	0.99	0.32	0.75	黒曜石	
6	三稜尖頭器	E-9	V	(2.35)	(1.02)	(0.67)	(1.30)	〃	基部欠損
7	剥片尖頭器	C-12	I	(3.18)	1.38	0.72	(3.15)	〃	先端部欠損
8	台形石器	E-12	I	2.33	2.52	0.81	4.70	〃	
9	三稜尖頭器	D-11	I	(3.46)	1.58	1.47	(6.40)	〃	先端部わずかに欠損

表1 石器計測表(1)

面両側縁下半に刃潰し加工を施し、基部は抉入状の加工により茎状に整形している。

三稜尖頭器は、二面加工のもの（6）と三面加工のもの（9）が1点ずつ出土している。

6は背面に自然面を残す縦長剥片を素材としている。9は白色粒状の不純物を多く含む石材で、背面両側面には石質に配慮した入念な調整加工が見られる。

台形石器1点（8）は背面に自然面を残す剥片を素材とし、背腹両面とも両側辺および下辺より調整加工が施されている。石材は、鹿児島県上牛鼻産の黒曜石である可能性が高い。

細石核4点（10）は、いずれも側面調整が不要な黒曜石の原礫を用いており、打面と剥出作業面は鋭角をなす。各々の大きさを、剥出作業面を正面にした時の最大幅×最大長(cm)で示すと、10は0.98×2.53、他の3点は1.16×2.05、1.25×2.57、幅1.82×現存1.12（下部欠損）、となっている。

細石刃（11・12）は、13点のうち完形資料が7点で、そのほとんどが長さ1.8cm前後である。

第4節 繩文時代の遺構と遺物

(1) 概要

繩文時代の遺構・遺物は、ほとんどがⅢ層（「アカホヤ」層）より下位の主にⅣ層から出

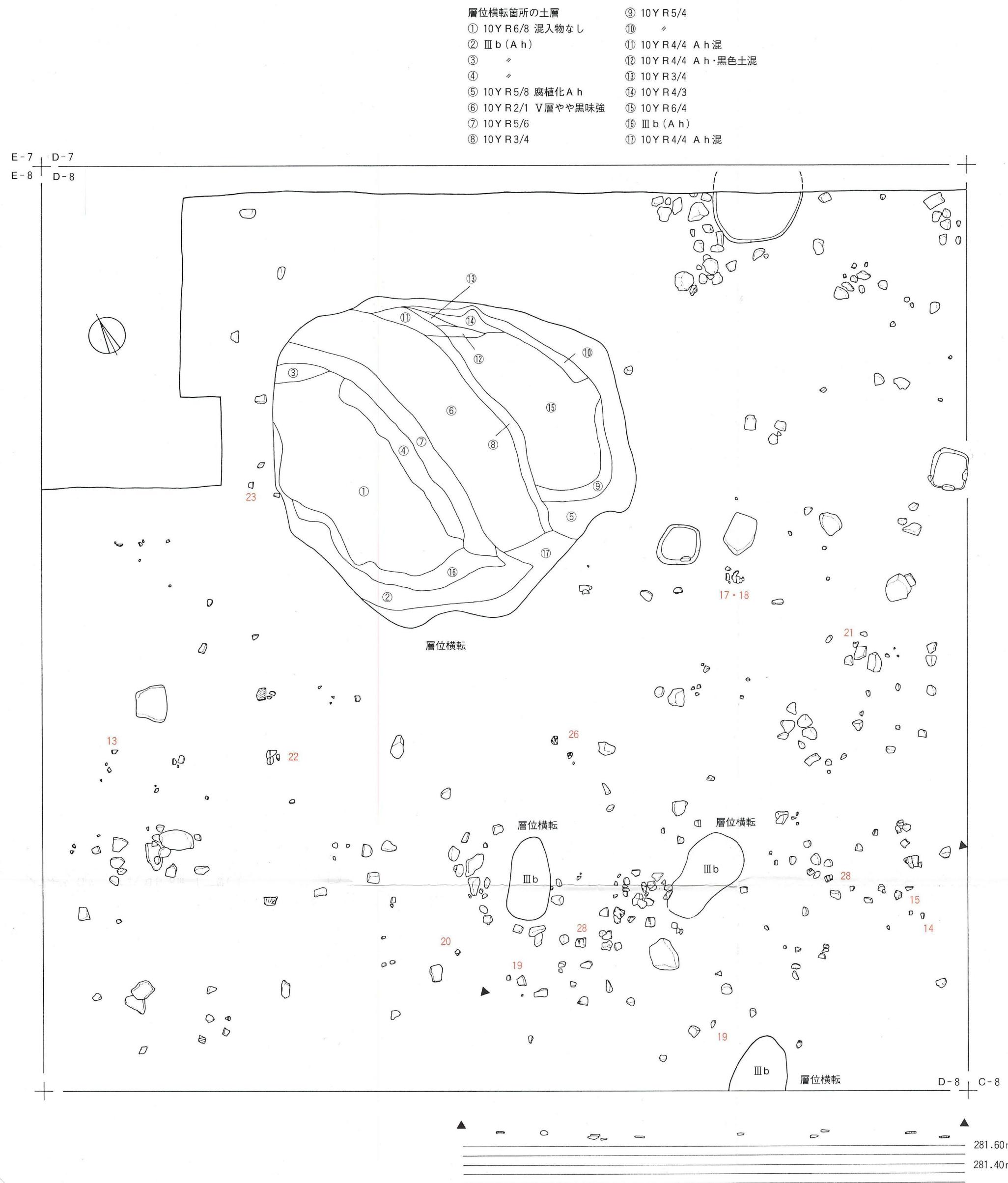


図10 D-8区 遺物出土状況 (1/40)

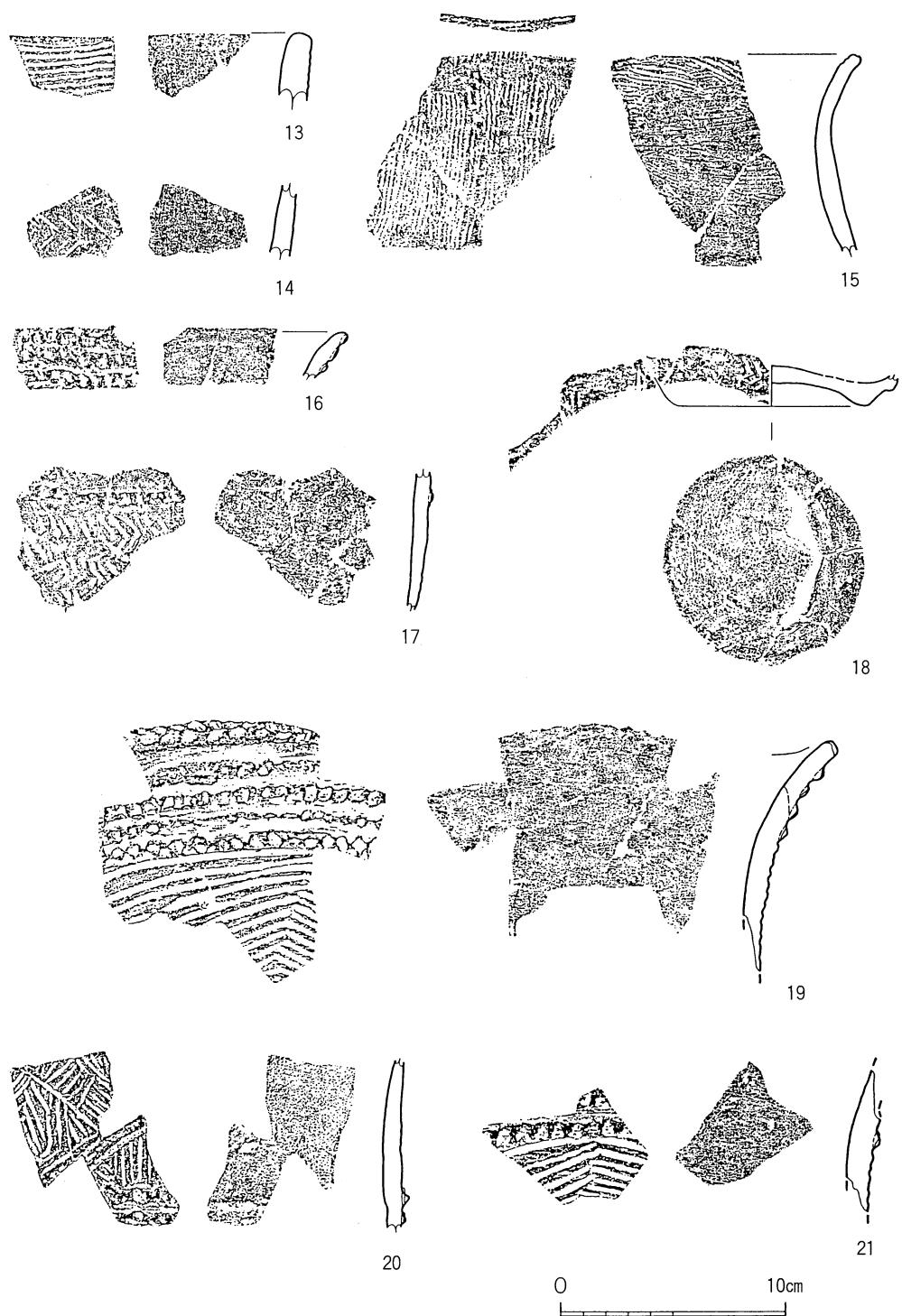


図11 D-8区 出土土器実測図(1) (1/3)

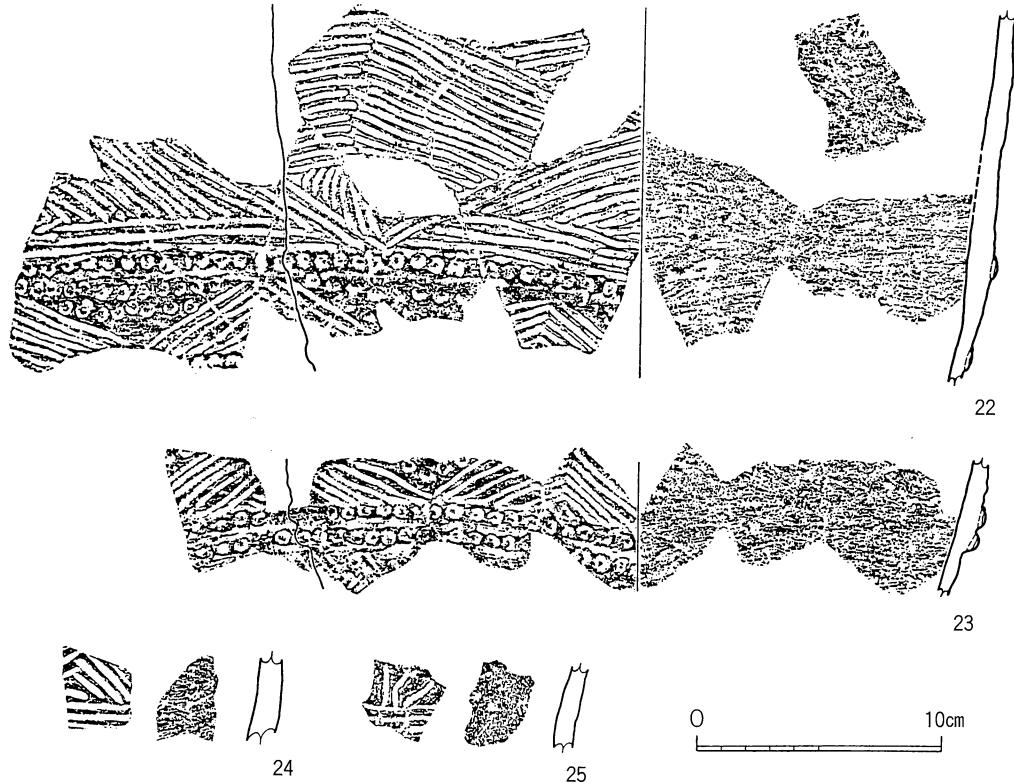


図12 D-8区 出土土器実測図(2) (1/3)

土している。南九州においては、約6300y,B,P,と推定される幸屋火碎流・アカホヤ火山灰の降下以前（本遺跡がそうであるように、宮崎県南部においては褐色土・黒色土が堆積している場合が多い）を早期と位置付けており、今回の報告もその立場に立つ。

早期の遺物の分布は、F～H-2～5区やE-4・5区、E-12区以外は濃密であり、集石遺構や赤変した礫もほぼまんべんなく見られる。E-4・5区やE-12区は包含層の薄くなっているところである。F～H-2～5区は、主たる包含層であるIVa層のかわりに細礫を含み湿り気を持ったIVc層あるいはIVd層が堆積している。それらの層は、ほとんど遺物を含まない。

ところが、そのように多量に遺物の出土する包含層が遺存していたものの、古墳時代、中世の遺構の構築や、層位横転、近・現代の開墾、植林の影響により、ところどころ攪乱を受けている。また、A・B区側は谷に向かって傾斜していくため、遺物の位置からは、特に編年的な情報は得られないであろうと推測される。このため、遺跡地の中ほどにあたり、平坦

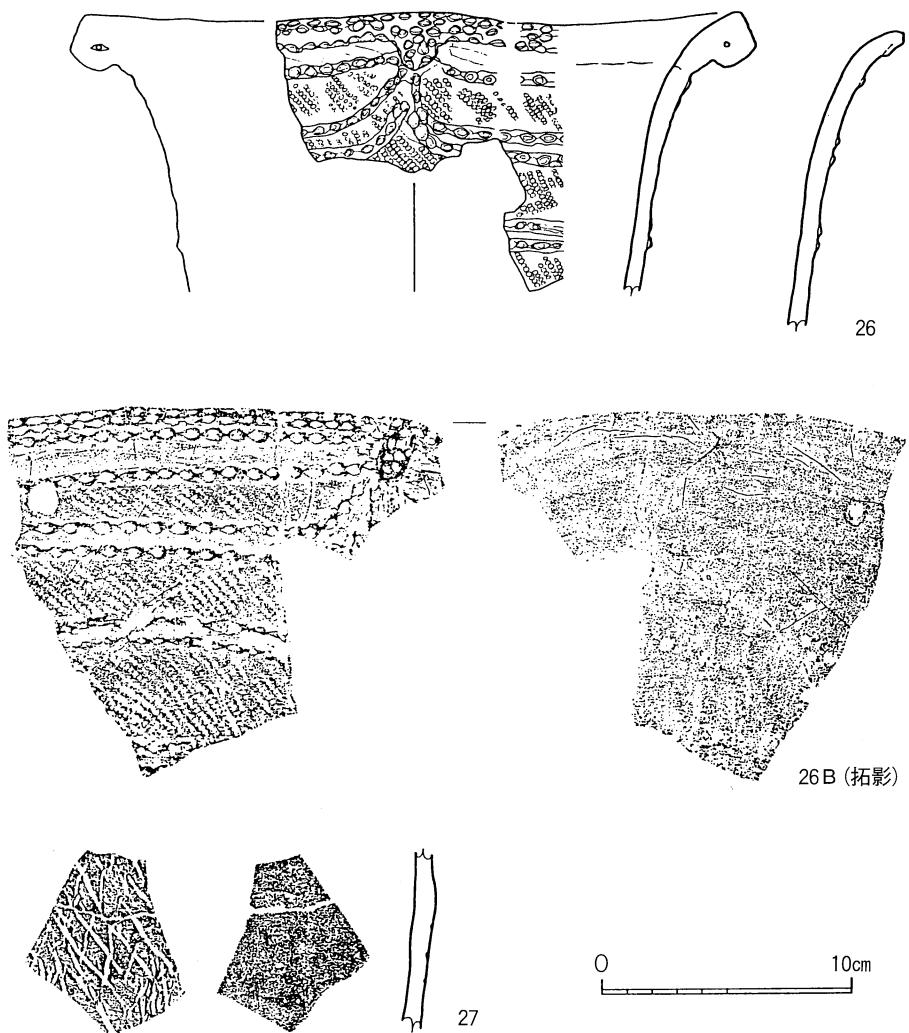


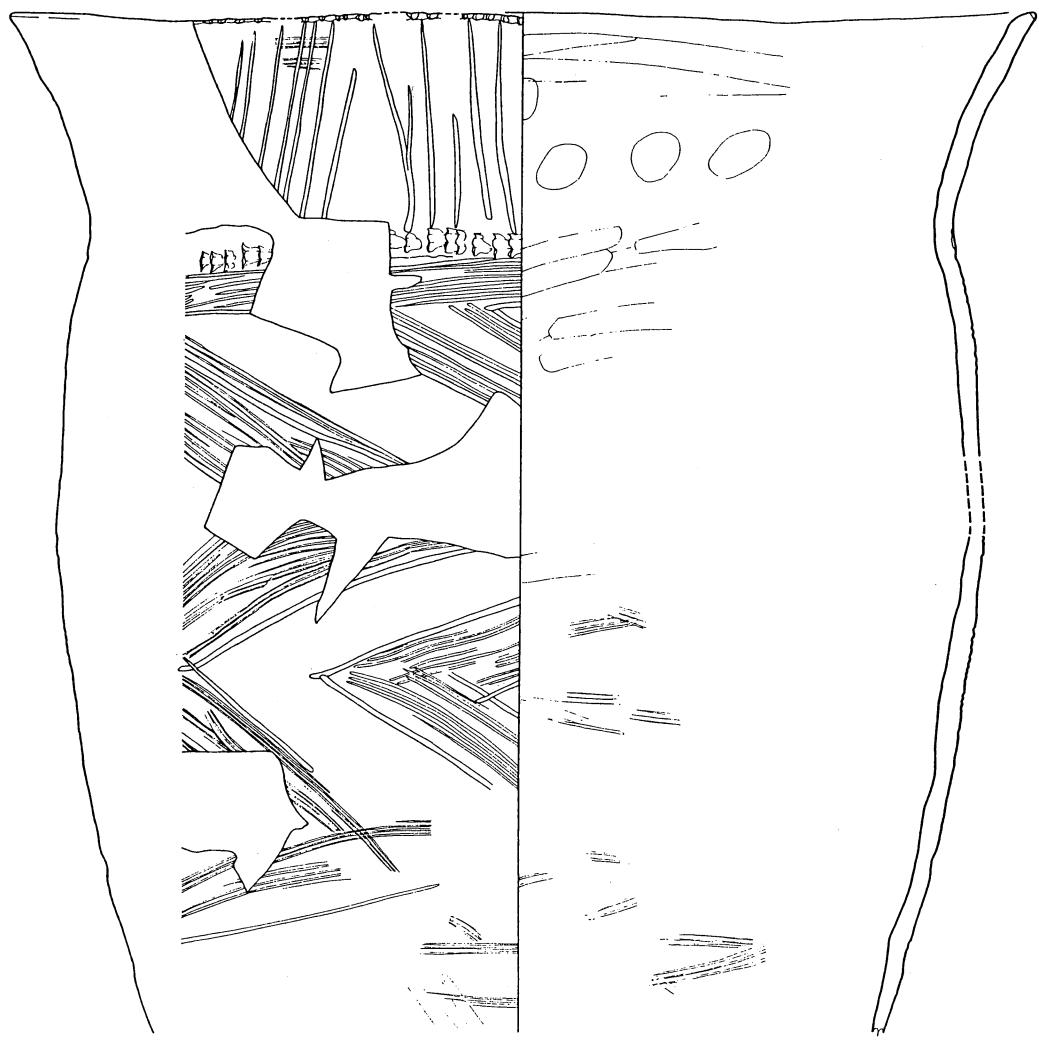
図13 D-8区 出土土器実測図(3) (1/3)

に近いD-8区、C-9区、D-9区、及びIVc層より注目すべき土器の出土したG-2区について、土器を中心に遺物・礫の出土状況を見ていき、本遺跡の包含層のあり方を見極めたい。尚、出土土器の型式名については、下記の文献を参考にしている。

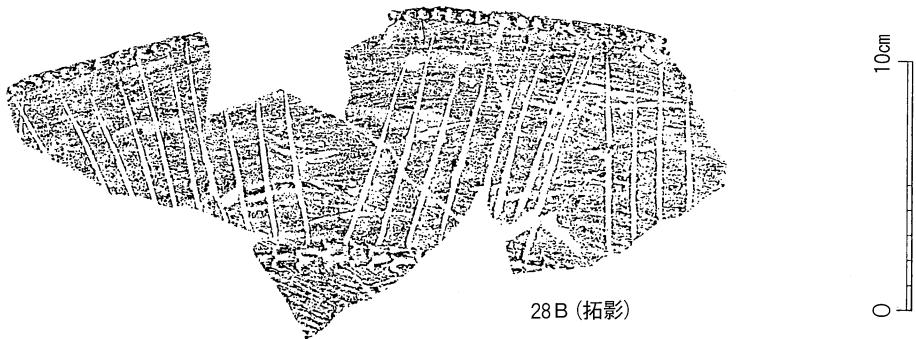
岩永 哲夫 1988 「九州東南部における縄文早期遺跡の概観 一出土土器を中心にしてー」

『宮崎県総合博物館研究紀要』13 宮崎県総合博物館

新東 晃一 1989 「早期九州貝殻文系土器様式」・「塞ノ神・平柄式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館

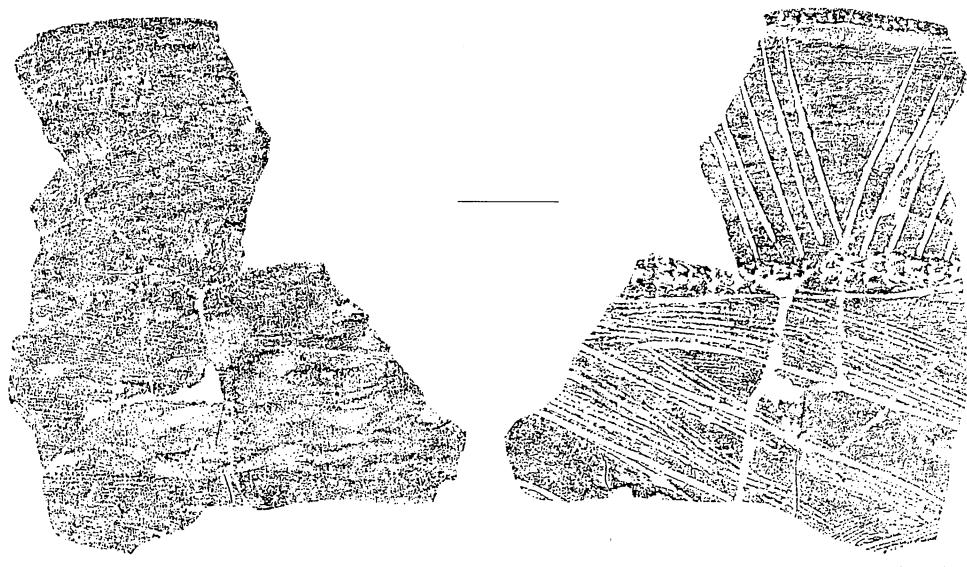


28

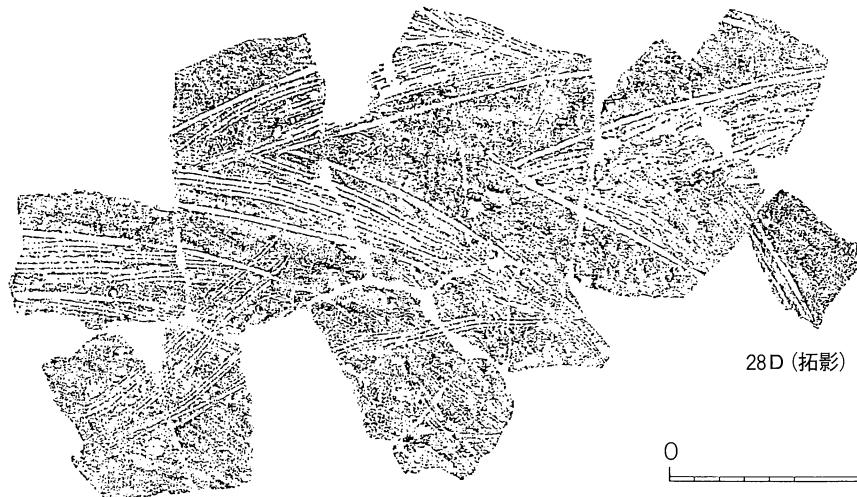


28B (拓影)

図14 D-8区 出土土器実測図(4) (1/3)



28C (拓影)



28D (拓影)

0 10cm

図15 D-8区 出土土器実測図(5) (1/3)

D-8区の状況 (図10)

塞ノ神式が1個体分、IV層とV層の層界付近のレベルよりまとまって出土している。その他の土器や礫も、そのレベルに多く見られる。一方、押型文系土器の135・136、手向山式の177はV層中より出土している。土器は他に、条痕文円筒土器 (13)、貝殻文円筒土器 (15)

手向山式（16～24・27）、平桙式前段階（26）などが見られる。22と23はおそらく同一個体で、胴部の屈曲が明瞭でなくなっている。28は口縁部に沈線文、頸部に貝殻腹縁圧痕文、胴部に沈線区画内条痕文を施す。内面調整は粗い工具ナデである。

C-9区の状況（図16）

数カ所の焼礫集中箇所（S I 3～S I 5など）がある。IV層とV層の層界付近が遺構構築面となる。土器出土レベルもその付近を示すものが多い。小穴はⅢa層のおちこみである。

出土土器は、押型文系土器（29・30）、手向山式（31～35・37・39）、平桙式あるいはその前段階（36）、塞ノ神式の底部（38）など。29は早水台式該当。38は28と同一個体である可能性が指摘できる。

D-9区の状況（図19）

IV層とV層の層界付近を構築面とする集石遺構が3基（S I 1・S I 2・S I 6）見られる。このうちS I 1とS I 6は地面をわずかに掘りくぼめる。構成礫はほとんどが焼礫で、S I 6は破碎礫が多い。他方、付近に散在する礫の中には、肉眼観察では変化の見られないものも多い。この傾向は、他区でも認められる。主な土器の出土層は、41・42・44・48・52がIV層中、40・43・45がIV層とV層の層界付近となっており、土器型式と層位の関係は明確でない。出土土器には貝殻文円筒土器の石坂式（40）、条痕文円筒土器（41～44）、手向山式（46～49）、塞ノ神式（45・50～52）などがある。手向山式の文様には多様性が認められる。45は壺形を呈し、外面には貝殻腹縁の押圧による圧痕文を施す。

G-2区の状況（図8）

Ⅲb層下部の、IVc層にアカホヤ火山灰や降下軽石のブロックが混じる不整合層から土器53が出土している。前述の通り、この付近は浅い谷地形となっており、遺物は他に土器片が数点見られたのみである。53は外内両面に（貝殻？）条痕文を施す。地文として細かい条線が見え、0段の撲糸文の可能性も考えられるが、詳細はわからない。

以上、いくつかの地点での遺物の出土状況を略述してきた。おおよそ、多くの遺物や集石遺構の礫の出土レベルである、IV層とV層の層界付近が早期の主たる生活面になると考えられ、そこにはりつく形でまとまった破片の出土しているのが手向山式、平桙式、塞ノ神式となる。小破片がまとまりなく出土している貝殻文円筒土器は、第3節においても指摘したようにV層中に生活面が求められよう。一方、Ⅲb層とした「アカホヤ」層の直下より出土した条痕文系土器は、層位の面から、最も後出のものと位置づけられる。尚、いずれの時期についても、竪穴住居などの落ち込み遺構は確認できなかった。

(2) 集石遺構

S I 7（図24）

E-10区のIV層とV層の層界付近で検出されている。浅い掘り込みの中に焼礫の集積が見

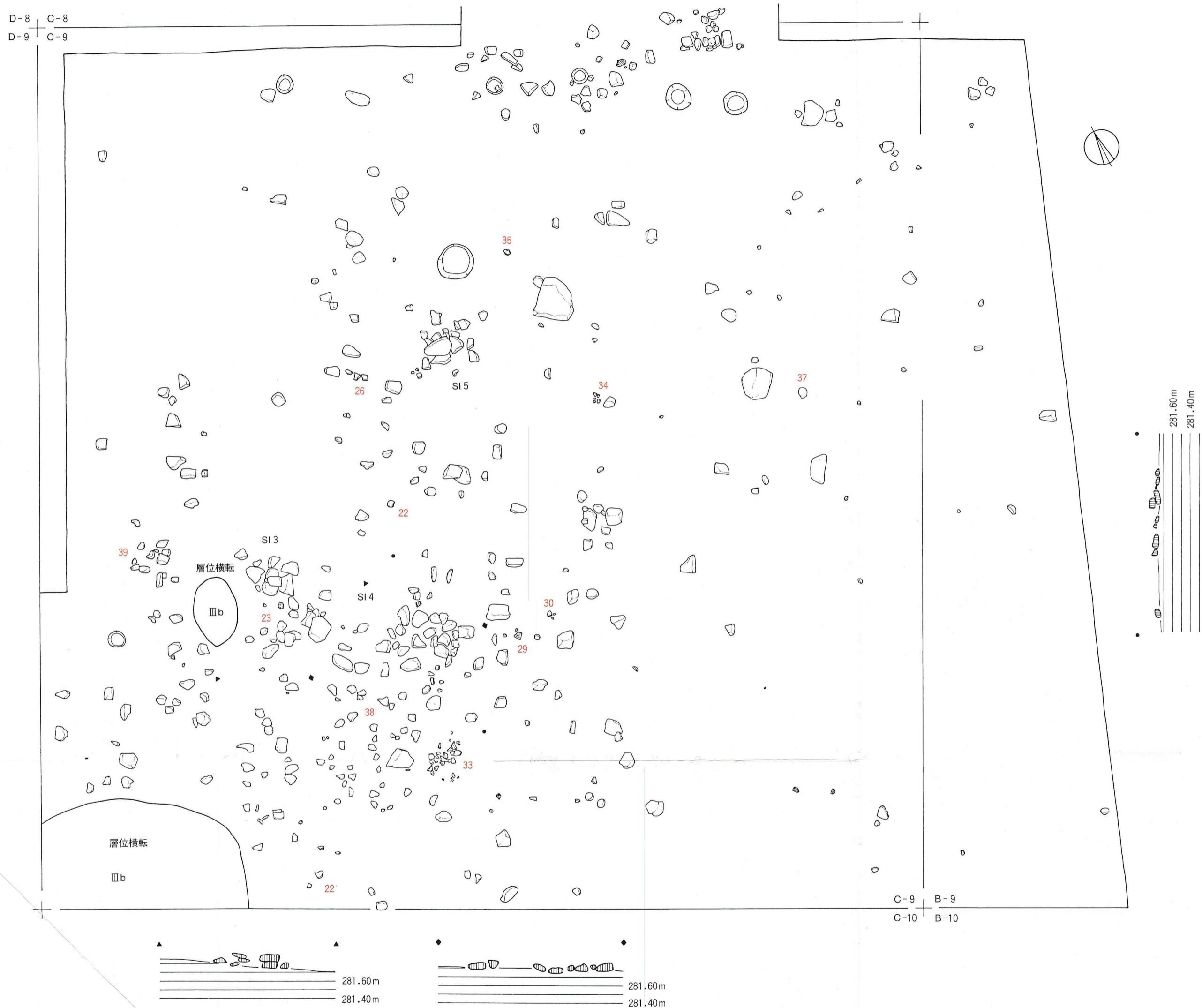
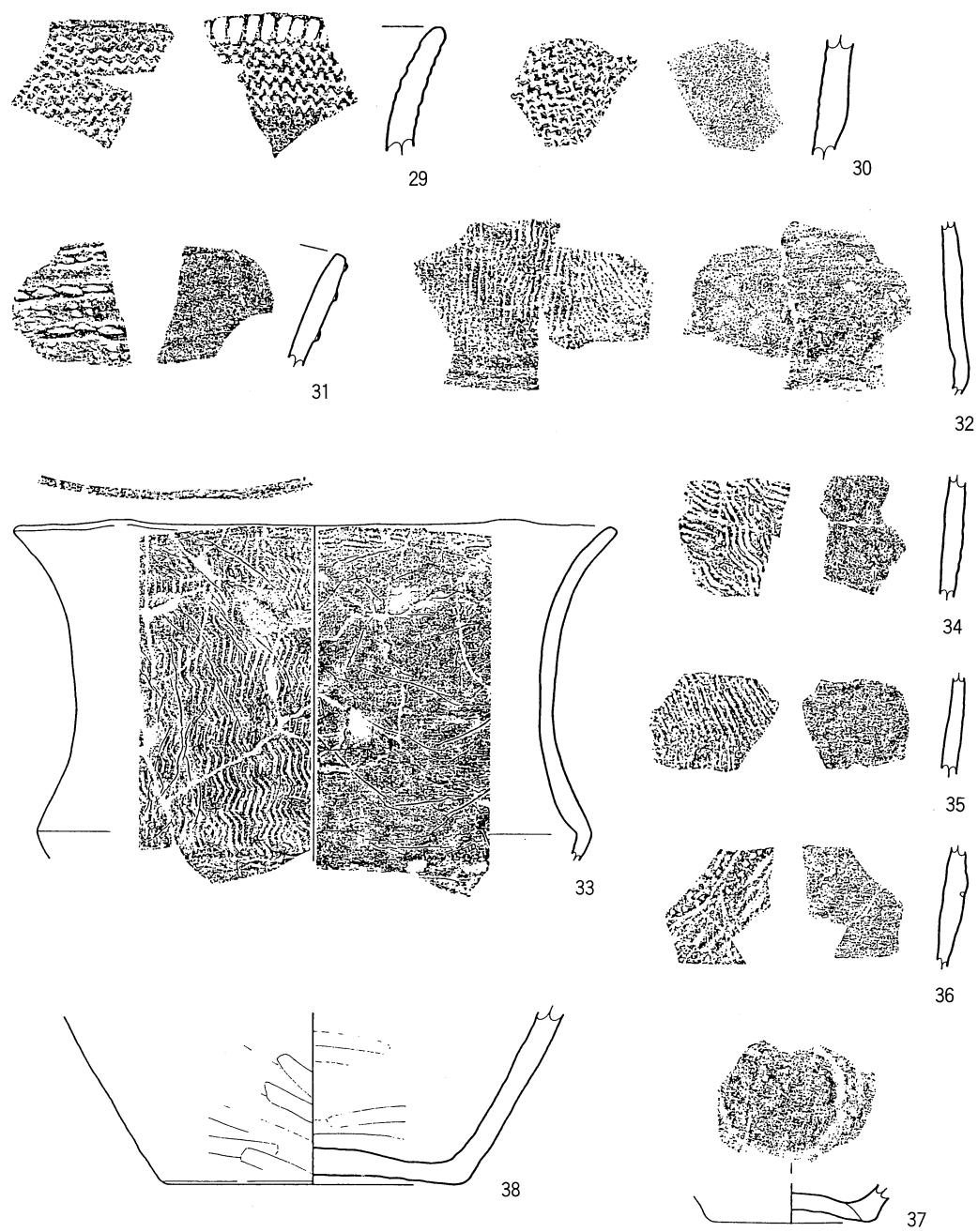


図16 C-9区 遺物出土状況 (1/40)



0 10cm

図17 C-9区 出土土器実測図(1) (1/3)

られる。掘り込みの径は約2mである。付近に数点の土器が分布している(図30)。手向山式(54~56)、平桙式(57)などである。

S I 8 (図25)

E-9区のV層上部で検出されている。礫の集中範囲の径は約1.3mである。構成礫はほとんど焼礫で、完形の礫が多い。

S I 9 (図26)

E-9区の、IV層とV層の層界付近で検出されている。礫はほぼ全て赤変しており、板状の角礫が多い。

S I 10 (図28)

2箇所の礫中箇所より成る。E-8区のIV層とV層の層界付近で検出されている。2つの浅い掘り込みを有する。構成礫は全て焼礫であり、完形礫が多いが破碎礫も若干含まれる。

S I 11 (図29)

F-7区のIV層とV層の層界付近で検出されている。礫はほとんど赤変しており、完形のものが多い。黒色の炭化物の付着している焼礫もある。付近から押型文型の土器片が出土している。58がそれで、山形押型文を横・斜方向に施す。

S I 12 (図31)

D-12区にある。IV b層下部に構築されていると見ているが、付近の土色は不明瞭で、はっきりしない。一部、S B 1の柱穴により破壊を受ける。構成礫はほとんど焼礫で、完形礫が多い。

S I 13 (図32)

F-9区のIV層とV層の層界付近で検出されている。礫の集積度は低い。完形礫が多く、全て赤変している。炭化物の付着しているものもある。

(3) 貝殻文円筒土器(59~100)

59・60は外面に貝殻条痕を施す。59は器壁が厚く貝殻条痕も粗い。ともに前平式で、V層より出土している。

外面に貝殻腹縁圧痕文を施す一群(61~83)のうち、61~64・66には楔形貼付突帯が遺存する。77以外は地文として貝殻条痕が認められる。全体に橙色・褐色を呈し、器壁が薄いものが多い。新東晃一の知覧式、本田道輝の桙ノ原タイプ²に該当する。上面から見ると略正方形を呈する角柱形の器形がある(68・77~79)ことも特徴の一つである。80・81がこの一群

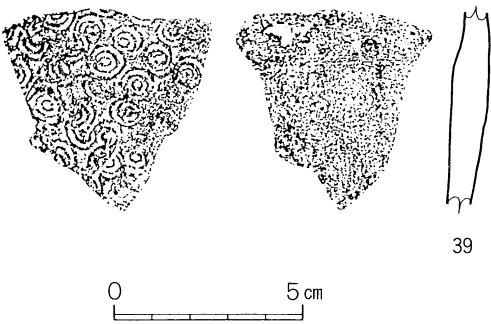


図18 C-9区 出土土器実測図(2) (1/2)

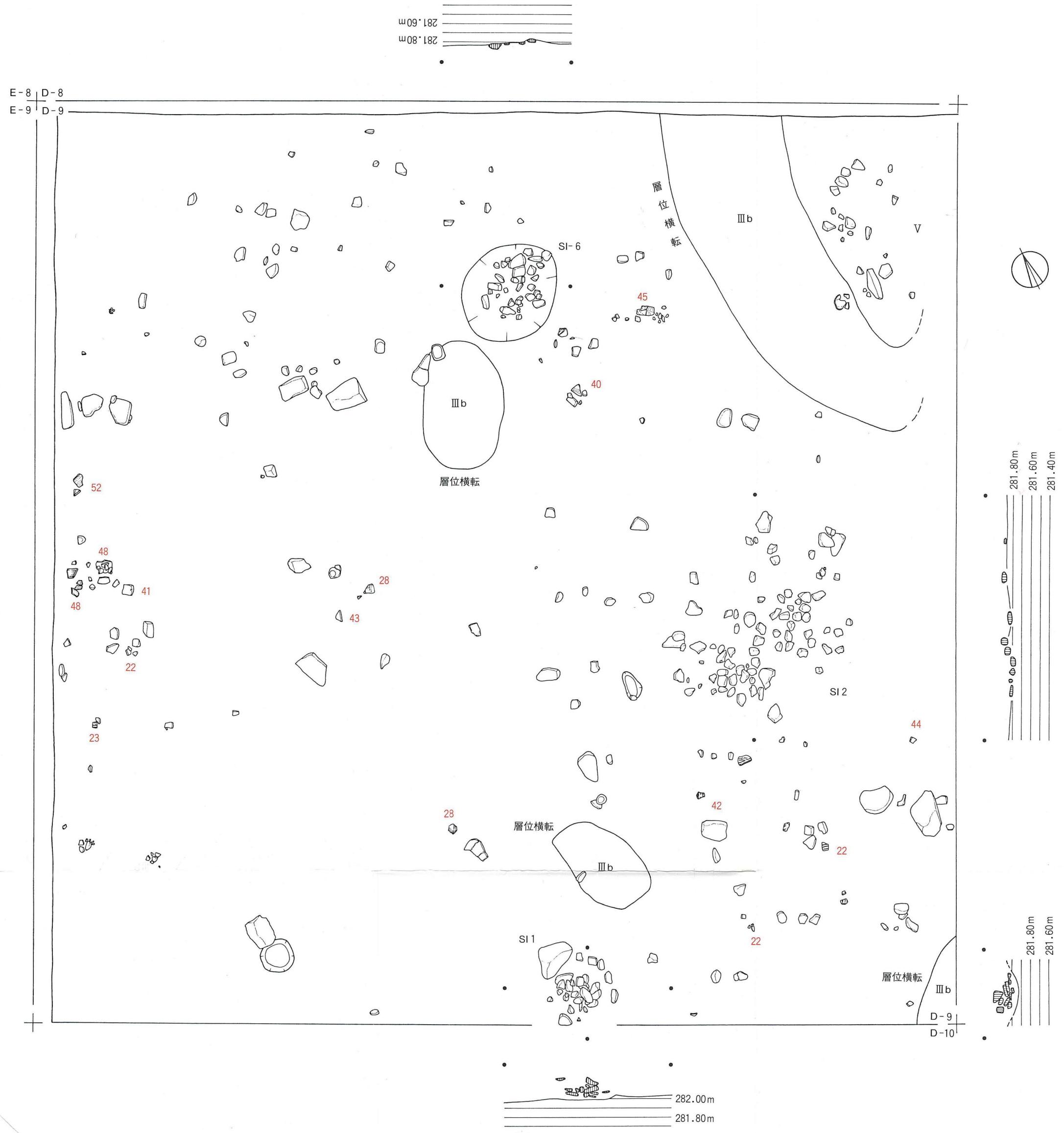
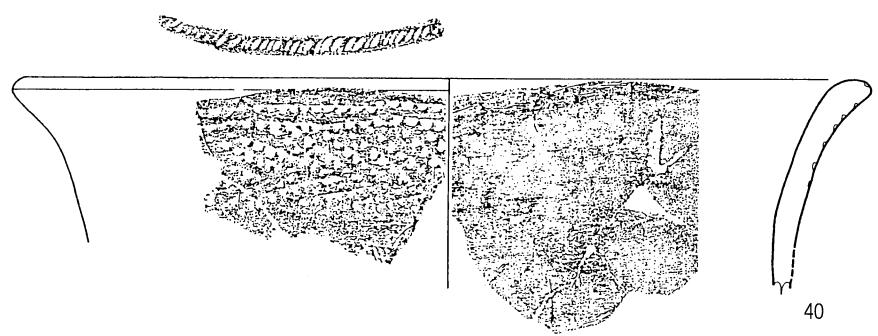
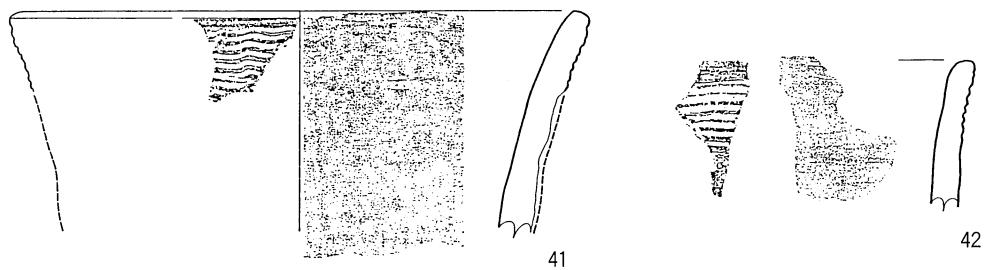


図19 D-9区 遺物出土状況 (1/40)

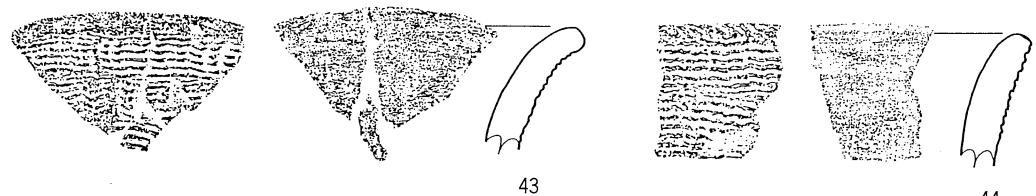


40



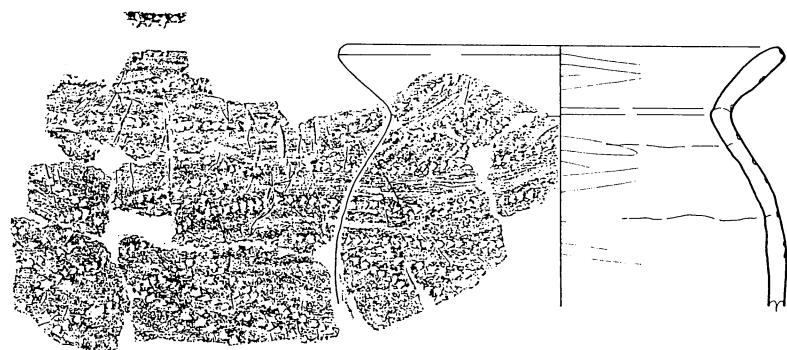
41

42

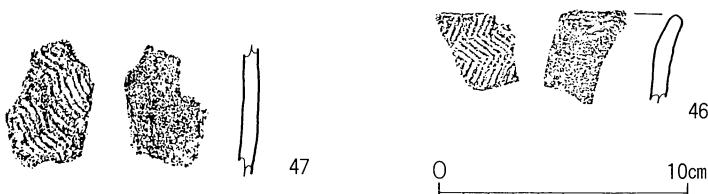


43

44



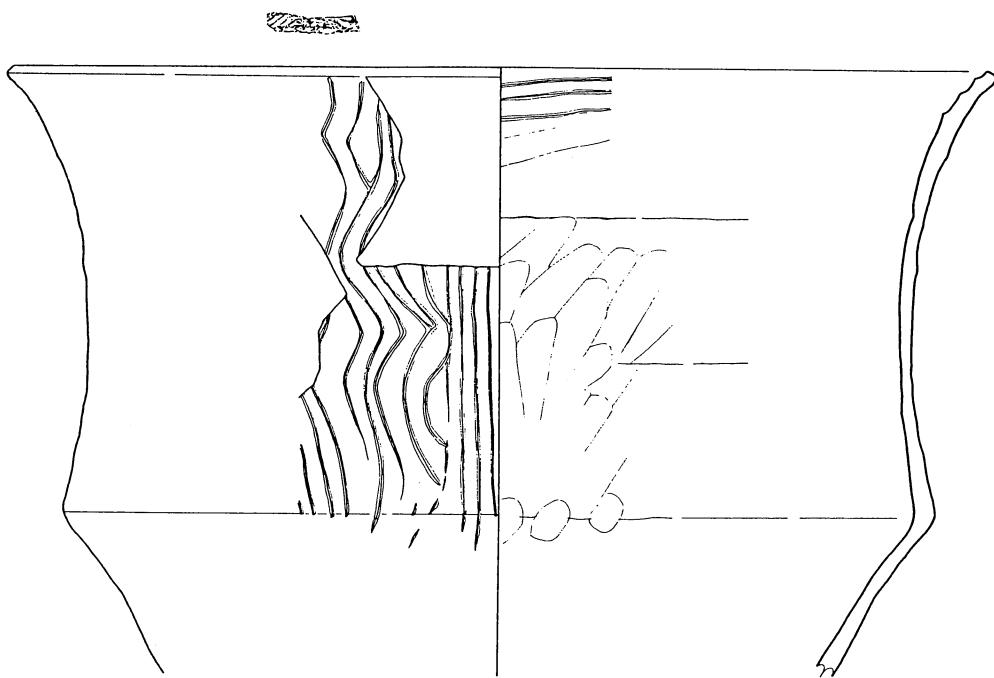
45



46

0 10cm

図20 D-9区 出土土器実測図(1) (1/3)



48

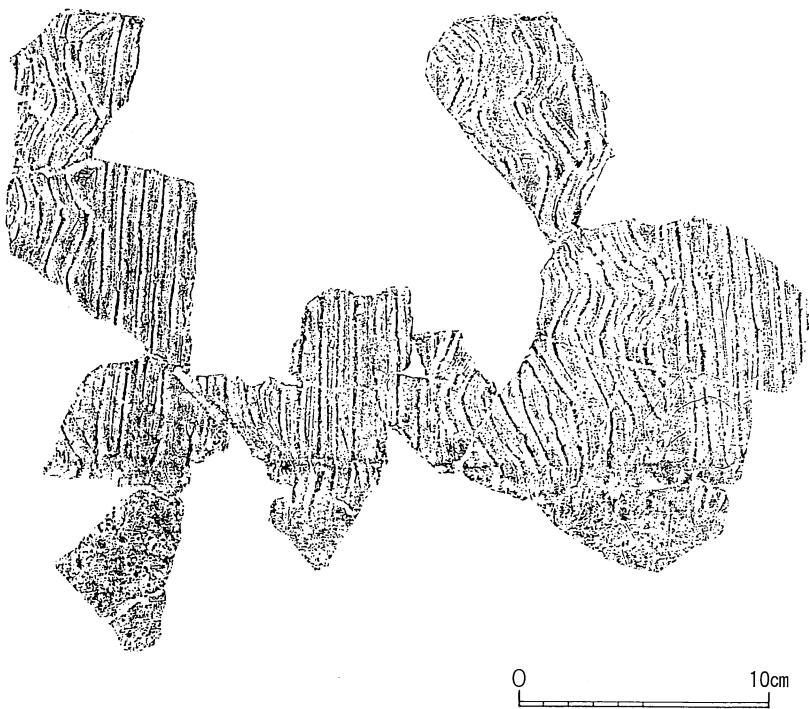


図21 D-9区 出土土器実測図(2) (1/3)

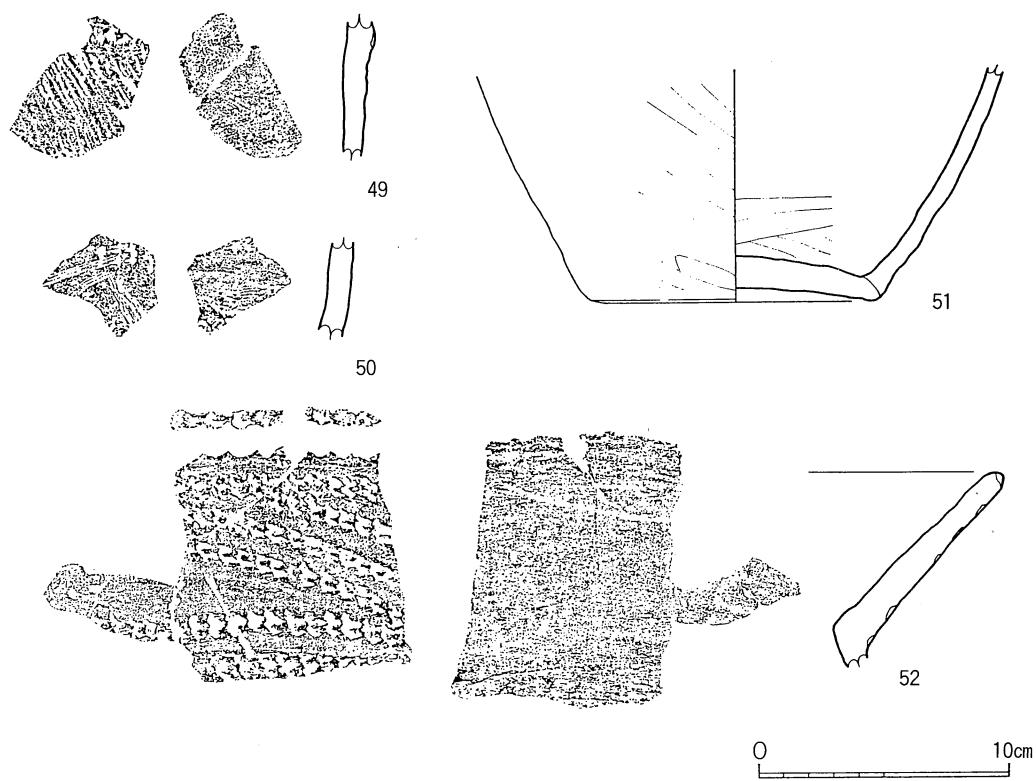


図22 D-9区 出土土器実測図(3) (1/3)

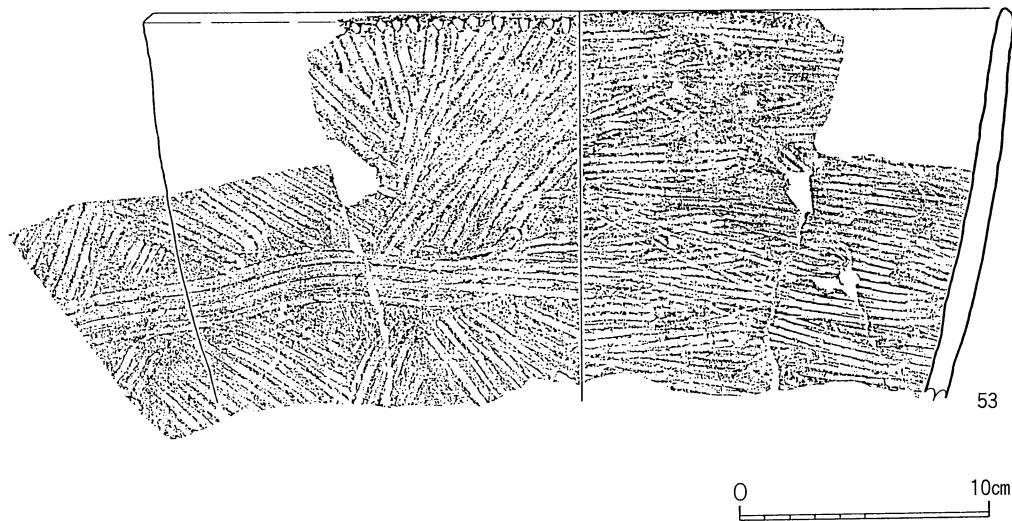


図23 G-2区 出土土器実測図 (1/3)

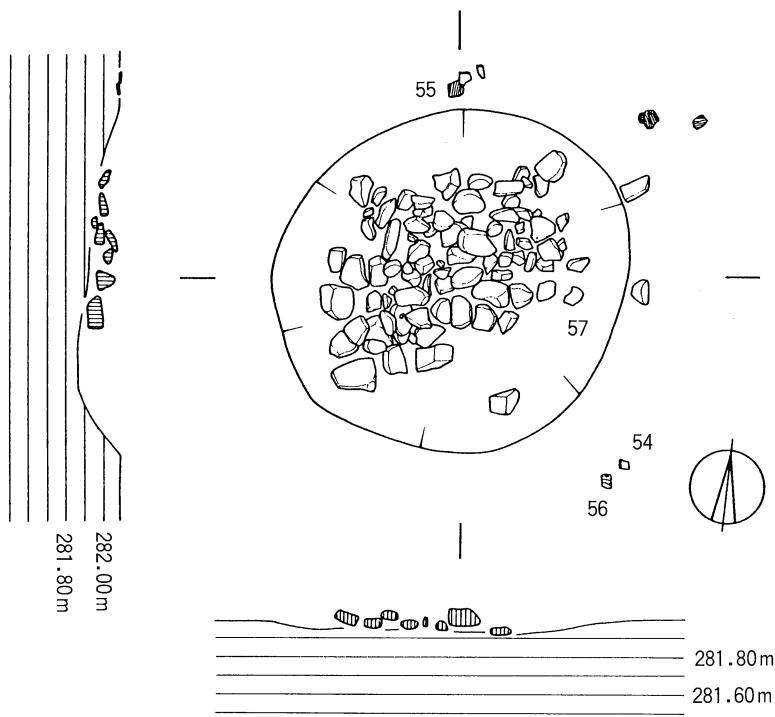


図24 SI 7 (1/40)

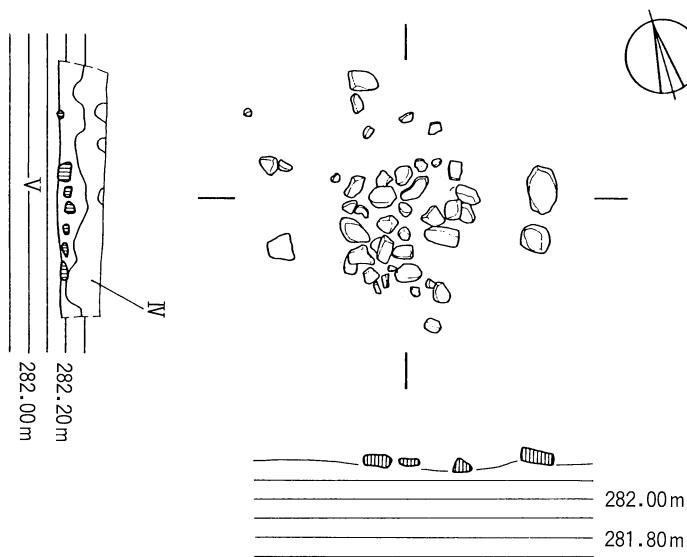


図25 SI 8 (1/40)

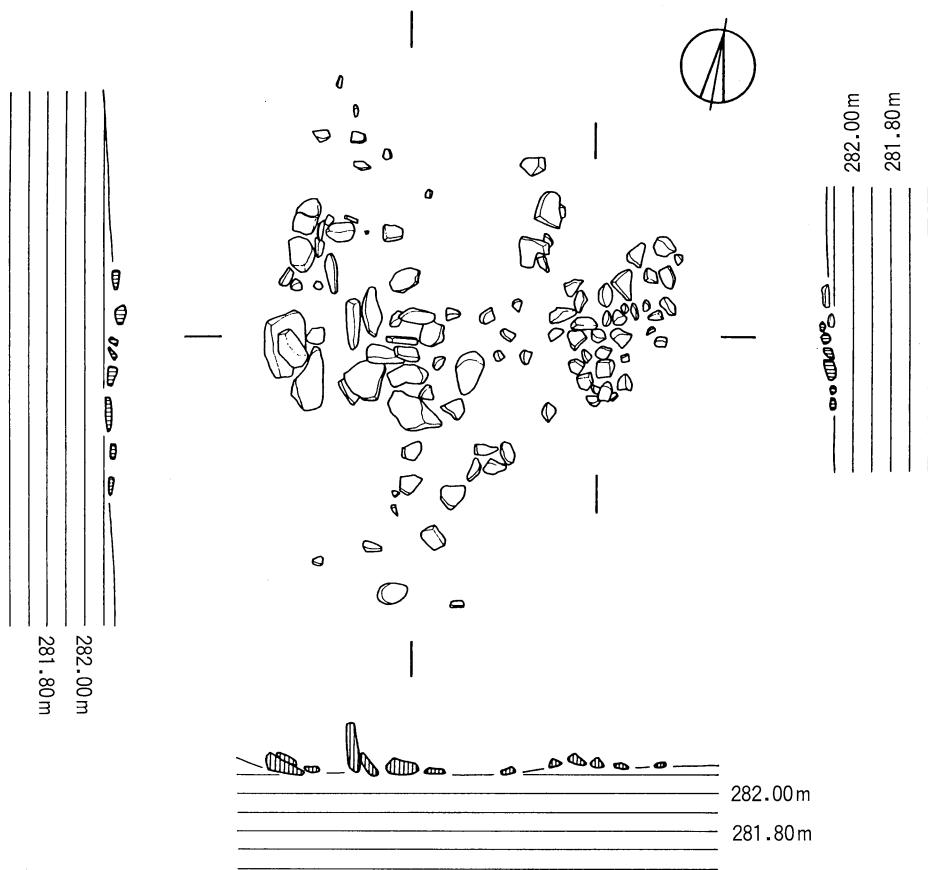


図26 S I 9 (1/40)

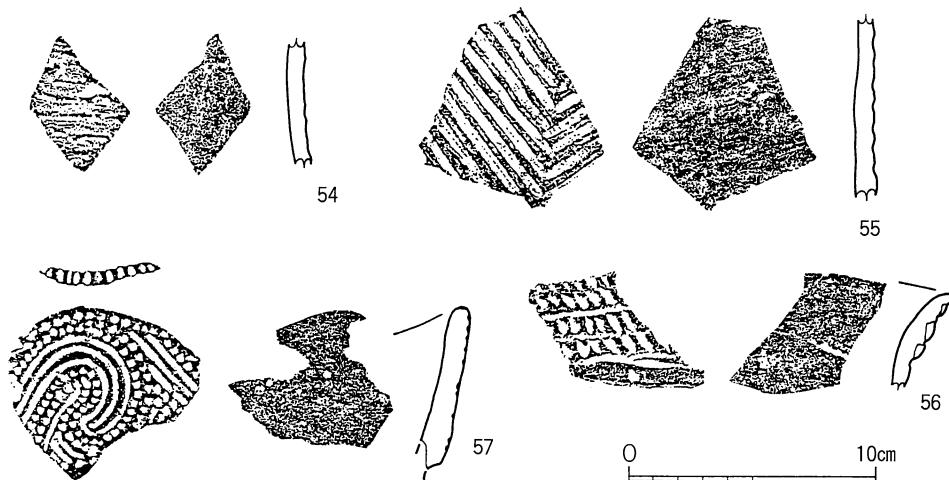


図27 S I 7 出土土器実測図 (1/3)

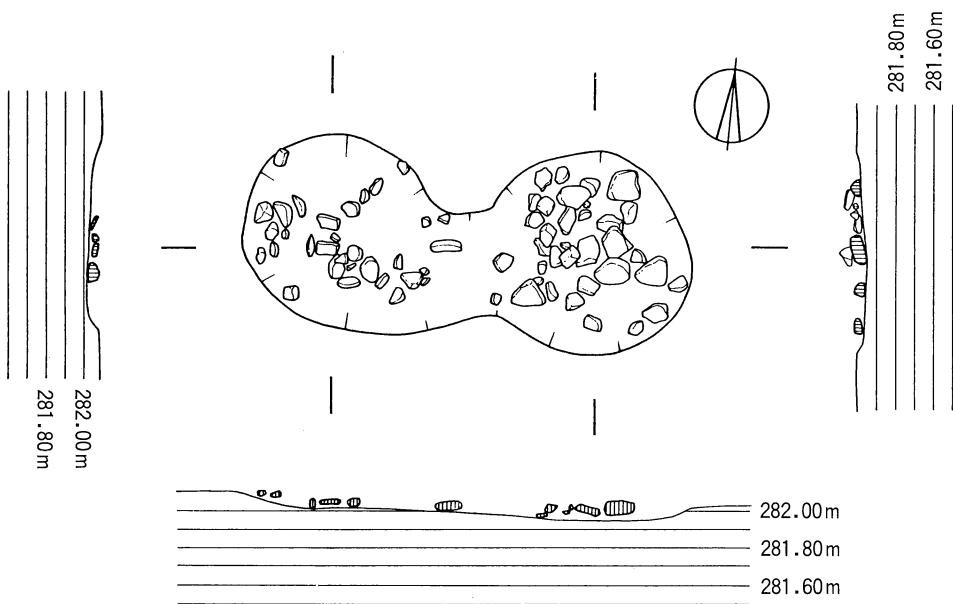


図28 S I 10 (1/40)

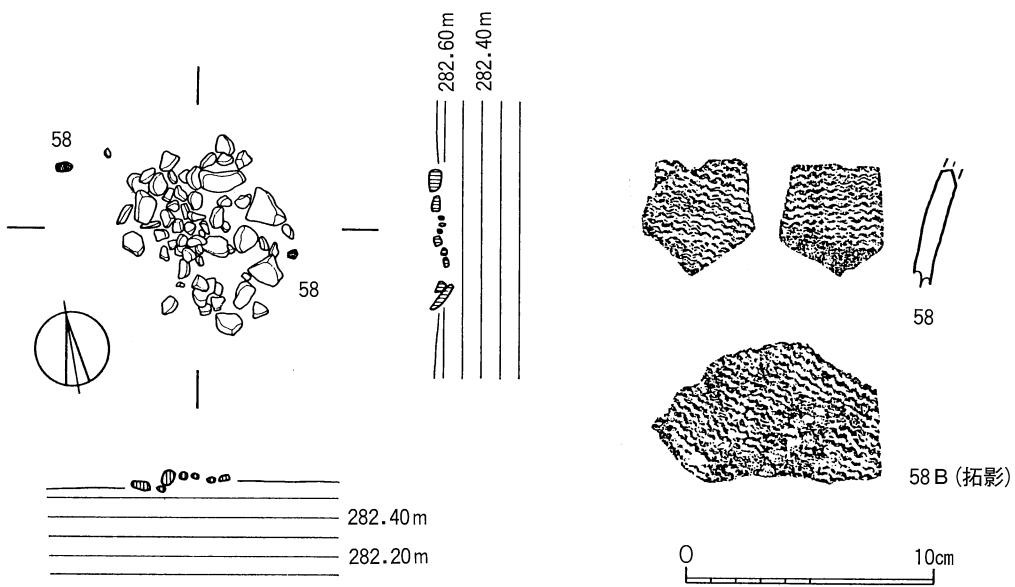


図29 S I 11 (1/40)

図30 出土土器実測図 (1/3)

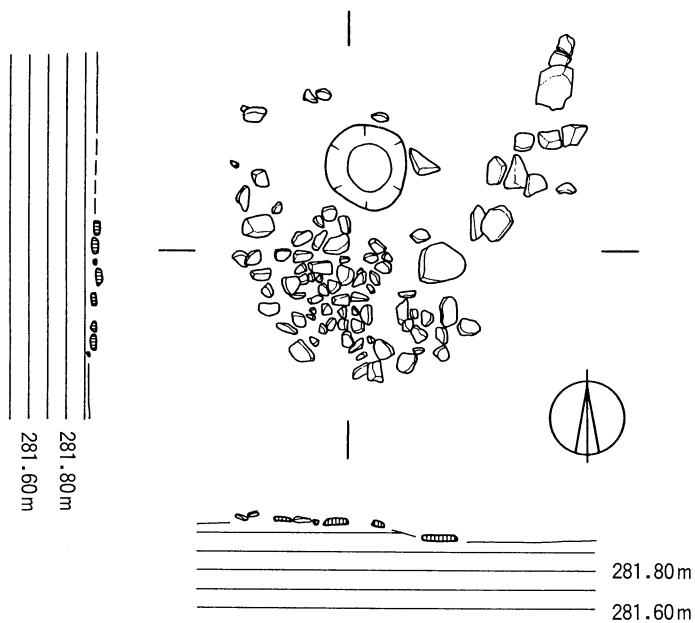


図31 S I 12 (1/40)

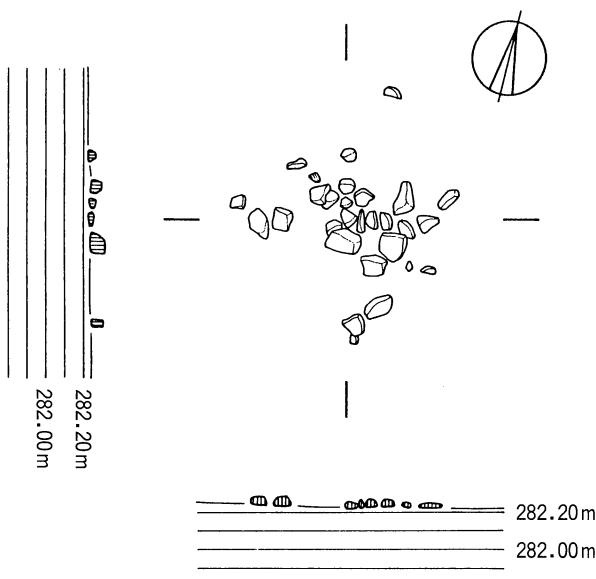


図32 S I 13 (1/40)

の底部で、外面最下端部に縦位の短沈線を刻む。

84は口縁部が短く外反し、そこに2列の短沈線文を施している。

それらの土器は、一部を除いてV層から出土しており、加えて破片も小さいものが多いことは前述の通りである。現在までの該期の編年的成果と合致する結果となってい

85～94は広義の石坂式であろう。97も口縁部はそれに近いが、胴部は工具によるナデである。この型式の口唇部は、基本的に丸味を持つ。口唇部の刻目は、有るもの無いものの両者があり、該期の土器を整理した前迫亮一によれば、時間的経過と共に刻目が無くなる傾向が見られるという。³

口縁部には横位・斜位の貝殻腹縁圧痕文を付す。86は胴部文様の特徴である綾杉状の貝殻条痕が施される。いずれも内面は丁寧にナデられる。93・94は突起の部分で、94は中空となる。95は次段階に位置づけられる下剥峯式との移行段階の個体か。貝殻腹縁圧痕文は連点状になり、全貌は不明であるが、胴部の貝殻条痕が縦方向に施される。

96は外面に粗い条痕文を施す土器で、内面の丁寧なナデ調整、および器形から石坂式と時間的に近い位置にあると推定した。

以上の土器群の出土層を見ると、IV層がやや多くなる傾向が認められる。85・86はV層出土である。

98～100は下剥峯式や桑ノ丸式と関連のある資料で、口縁部が内弯し外面に横位の貝殻腹縁圧痕文や短沈線文が付される。短沈線文は縦方向の山形押型文を想起させる。このことはすでに指摘されているように、桑ノ丸式と縦方向の山形押型文を施文する下菅生B式の時間的な近縁性を物語る事例と言えよう。⁴

126は外面に粗い条痕が見られるだけの破片である。わずかに内弯し、平坦になる口縁部の形状から、この一群に含まれると推測される。

126はV層出土、他はIV層以上層よりの出土。

(4) 条痕文円筒土器 (102～125)

IV・V層より出土している。104・108・110はIV層出土、102・103はV層出土である。

口縁部は直線的に外開きになるか若干外反する。器壁は厚く、口縁部は多くがかまぼこ状となるが、先細りになる形状のものもある。焼成の関係からか、器壁の剥落している個体が多い。

押引状貝殻条痕文 (102～105・109)、貝殻条痕文 (106～108・110・111)、貝殻条痕文+同一原体によると見られる刺突文 (112～115)、貝殻腹縁圧痕文 (116～124)、沈線文 (125)などの文様を口縁部に集約させる。多量に角閃石の混入する102に代表されるように、多くの場合、胎土中に黒色鉱物を含む。

(5) 押型文系土器 (127～143)

手向山式は独立させて次頁で触れている。135など下菅生B式該当のものと、136・143など円筒形土器の器形に似るもの両者がある。いずれもV層からの出土が目立つ。128～134はIV層出土である。胎土中に角閃石を含む個体があるものの、混入量は多くはない。131・132は横方向の楕円押型文を施す同一個体である。133・134も同一個体で円筒形を呈すると

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色 調	備 考
13	D—8		Ⓐ(貝殻)条痕文 Ⓛナデ	B	Ⓑにぶい黄橙 Ⓛ明黄褐	
14			Ⓑナデ・短沈線文 Ⓛ丁寧なナデ	D	Ⓑにぶい黄橙 Ⓛ浅黄	
15			Ⓑ撚糸文 Ⓛナデ・撚糸文 Ⓛ撚糸文	C	ⒷⒷ明黄褐	
16			Ⓑ(貼付突帯)貝殻腹縁圧痕文 山形押型文? Ⓛナデ		Ⓑにぶい黄橙 Ⓛ浅黄	
17			Ⓑ(貼付突帯)貝殻腹縁圧痕文 山形押型文 Ⓛナデ		Ⓑ橙 Ⓛ橙・褐	
18			Ⓑ微隆起線文? ⓁⒶナデ	C	ⒷⒶにぶい橙	
19			Ⓑ(貼付突帯)貝殻腹縁圧痕文・凹線文 Ⓛナデ Ⓛ貝殻腹縁圧痕文		Ⓑにぶい黄橙 Ⓛ橙	
20			Ⓑ(貼付突帯)刻目・平行沈線文 Ⓛナデ	A	ⒷⒶにぶい黄橙	
21			Ⓑ(貼付突帯)貝殻腹縁圧痕文・凹線文 Ⓛナデ	C	Ⓑにぶい褐・にぶい黄橙 Ⓛ橙・にぶい黄橙	
22			Ⓑ(貼付突帯)竹管文・凹線文 Ⓛナデ		Ⓑにぶい黄橙 Ⓛ橙	
23			Ⓑ(貼付突帯)竹管文・凹線文 押型文 Ⓛナデ		Ⓑにぶい橙 Ⓛにぶい赤褐	22と同一個体?
24			Ⓑ凹線文 Ⓛナデ		ⒷⒶにぶい赤褐	
25			Ⓑナデ・沈線文 Ⓛナデ	A	ⒷⒷにぶい黄橙	
26			Ⓑ(貼付突帯)刻目・繩文(2段L R) Ⓛ丁寧なナデ		ⒷⒷ浅黄橙・にぶい黄橙	突起・補修孔
27			Ⓑ網目撚糸文 Ⓛナデ		Ⓑにぶい橙 Ⓛ灰褐	
28			Ⓑ沈線文・細い平行沈線文 Ⓛ工具ナデ Ⓛ刻目	A	Ⓑ明赤褐・橙 Ⓛ橙・灰褐	
29	C—9		Ⓑ山形押型文 Ⓛ原体条痕・山形押型文	A	Ⓑ淡黄・にぶい黄橙 Ⓛ黒褐・にぶい黄橙	
30			Ⓑ山形押型文 Ⓛナデ	B	Ⓑにぶい橙 Ⓛにぶい黄橙	
31			Ⓑ刻目突帯・繩文(2段L R) Ⓛ丁寧なナデ	B	Ⓑ橙・にぶい橙 Ⓛ橙	
32			Ⓑ撚糸文 Ⓛナデ		Ⓑ淡黄 Ⓛ黄褐・淡黄	
33			Ⓑ山形押型文 Ⓛナデ・山形押型文 Ⓛ山形押型文	C	Ⓑにぶい橙 Ⓛ橙	
34			Ⓑ撚糸文 Ⓛナデ		Ⓑ灰黄褐 Ⓛにぶい黄橙	
35			Ⓑ撚糸文 Ⓛ丁寧なナデ	B	Ⓑ橙 Ⓛ灰褐	
36			Ⓑ粗い条痕・刺突文・沈線文 Ⓛナデ		Ⓑにぶい黄橙・にぶい黄褐 Ⓛにぶい黄橙	
37			ⒷⒷⒶナデ	B	Ⓑにぶい橙 Ⓛにぶい黄橙	

表2 土器観察表(1)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
38	C-9		㊂㊁工具ナデ ㊁ナデ		㊂橙 ㊂橙・にぶい黄橙	
39			㊂同心円押型文 ㊁ナデ		㊂明褐灰 ㊁褐灰	
40	D-9		㊂ナデ・貝殻腹縁圧痕文 ㊁ミガキに近いナデ ㊁刻目	A	㊂㊁橙	
41			㊂(貝殻)条痕文 ㊁丁寧なナデ	B	㊂にぶい黄橙・黄橙 ㊁にぶい黄橙	
42			〃	B	㊂灰オリーブ ㊁浅黄	
43			㊂(貝殻)押引状条痕文 ㊁ミガキに近いナデ	B	㊂㊁明黄褐・にぶい黄褐	
44			㊂(貝殻)条痕文 ㊁丁寧なナデ	B	㊂灰黄褐 ㊁にぶい黄橙	
45			㊂ナデ・貝殻腹縁圧痕文 ㊁工具ナデ ㊁刺突文		㊂明黄褐 ㊁にぶい褐	
46			㊂山形押型文 ㊁ナデ		㊂㊁にぶい黄橙	
47			〃	A	㊂にぶい黄橙 ㊁浅黄橙	
48			㊂㊁ナデ・微隆起線文 ㊁微隆起線文?		㊂㊁橙	
49			㊂貝殻腹縁圧痕文・撫糸文 ㊁丁寧なナデ		㊂にぶい黄橙 ㊁にぶい橙	
50			㊂貝殻腹縁圧痕文・浅い平行沈線文 ㊁ナデ	B	㊂明黄褐 ㊁にぶい黄褐	
51			㊂ナデ・工具ナデ ㊁工具ナデ		㊂橙 ㊁橙・暗黄灰	28と同一個体?
52			㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊁ナデ ㊁刻目	A	㊂㊁にぶい橙	
53	G-2		㊁刻目・条痕文 ㊁条痕文	A	㊂㊁にぶい黄橙	
54	S I 7付近	IV 最下	㊁微隆起線文 ㊁ナデ		㊂㊁にぶい黄褐	
55		IV 最下	㊁凹線文 ㊁ナデ	A	㊂にぶい橙・橙 ㊁橙	
56		IV 最下	㊁(貼付突帯)刺突文 ㊁ナデ*	A	㊂浅黄橙 ㊁にぶい黄橙	
57		IV 最下	㊁凹線文・刺突文 ㊁ナデ ㊁刻目	A・C	㊂㊁橙	
58	S I 11付近	IV	㊁山形押型文 ㊁ナデ・山形押型文	A	㊂灰黄・灰黄褐 ㊁暗灰黄	補修孔

表3 土器観察表(2)

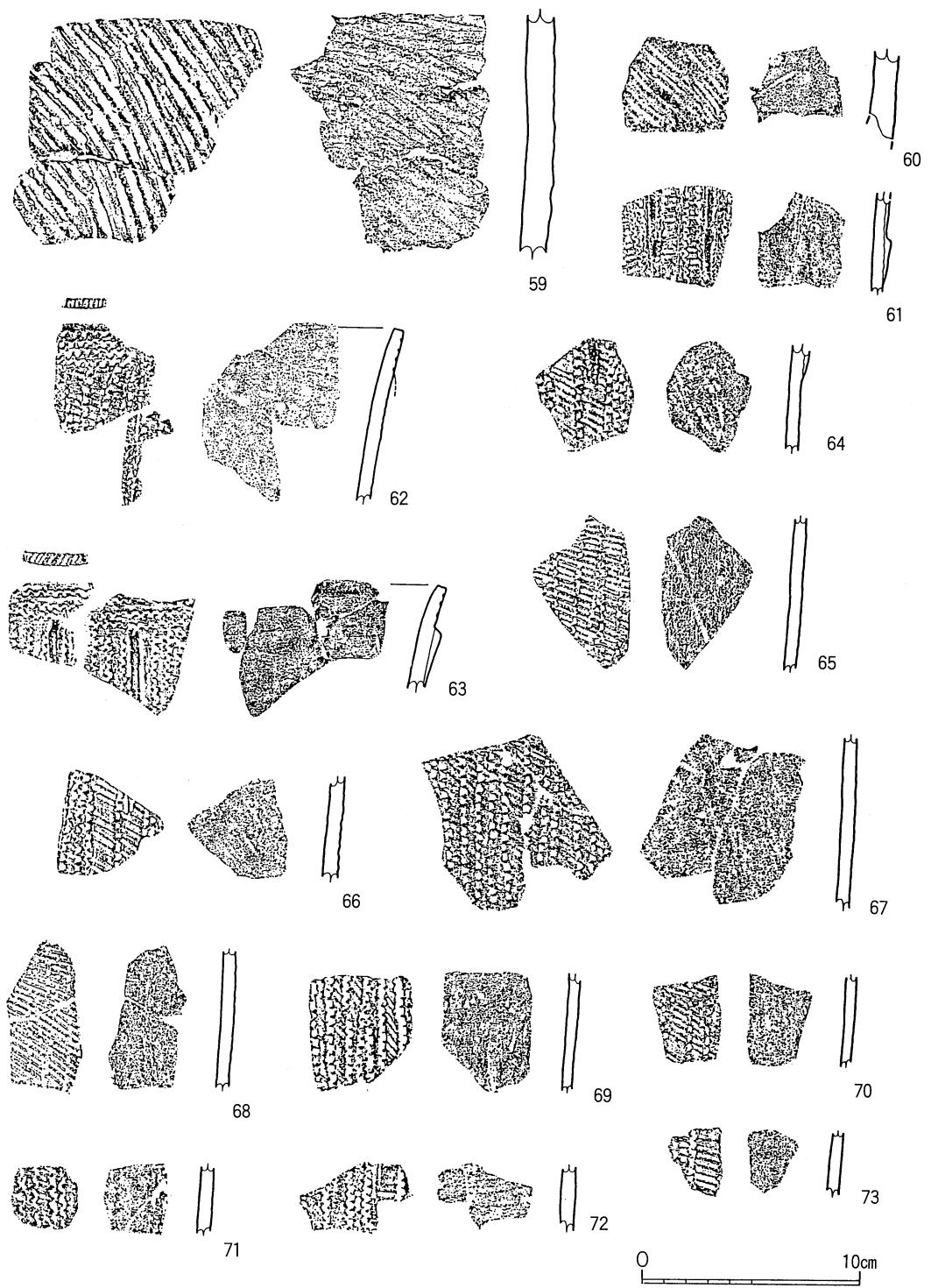


図33 土器実測図(1) (1/3)

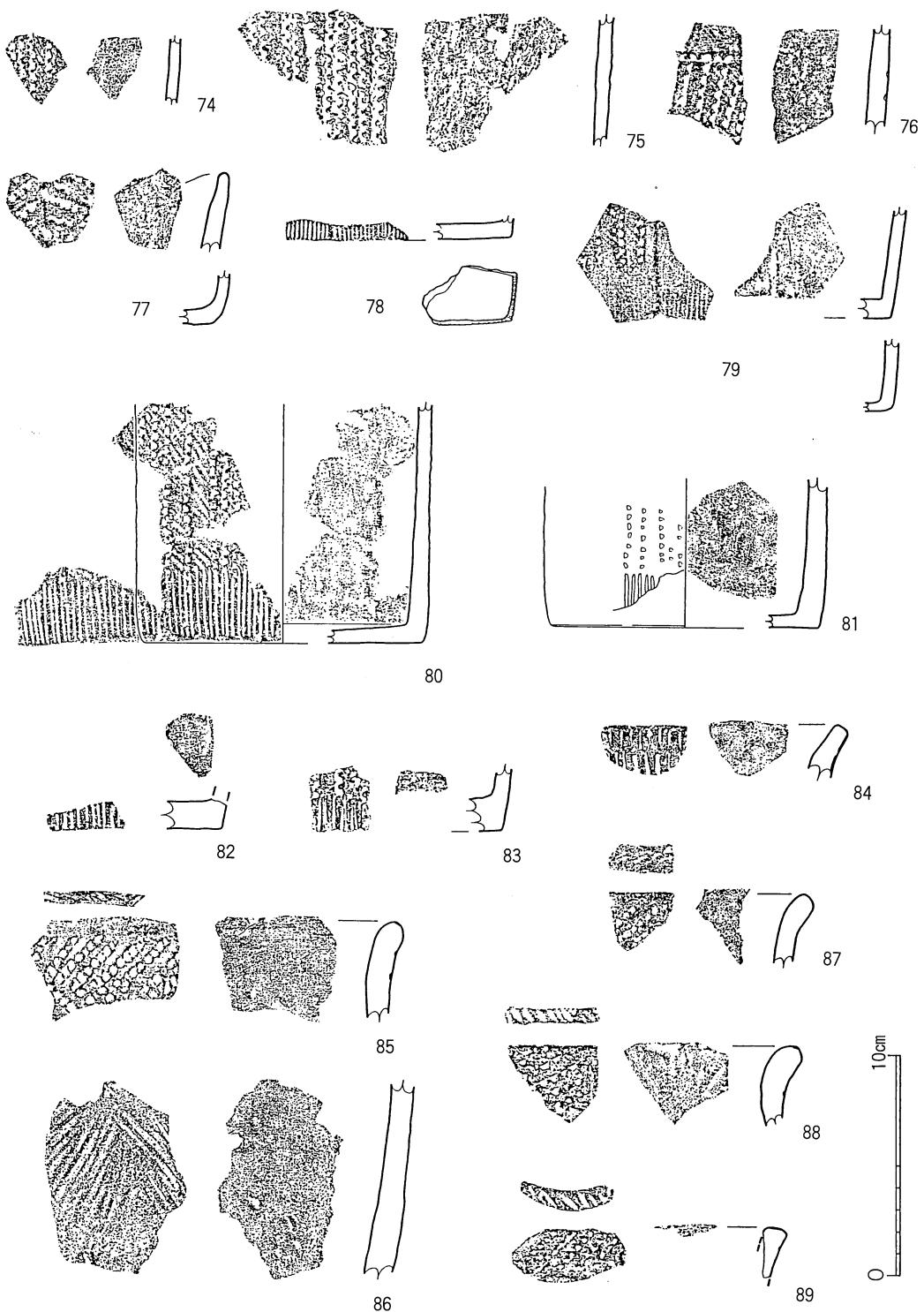


図34 土器実測図(2) (1/3)

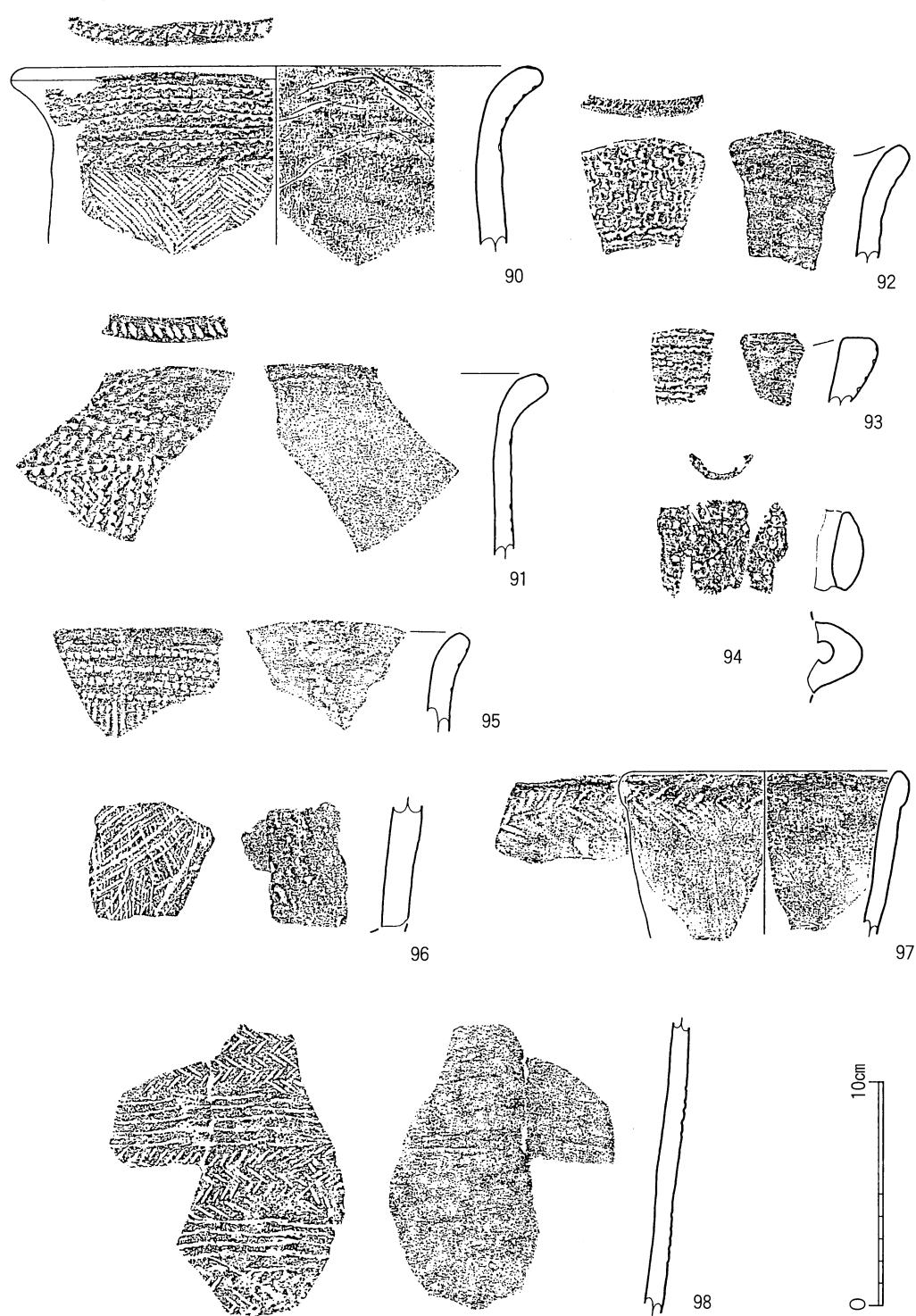


図35 土器実測図(3) (1/3)

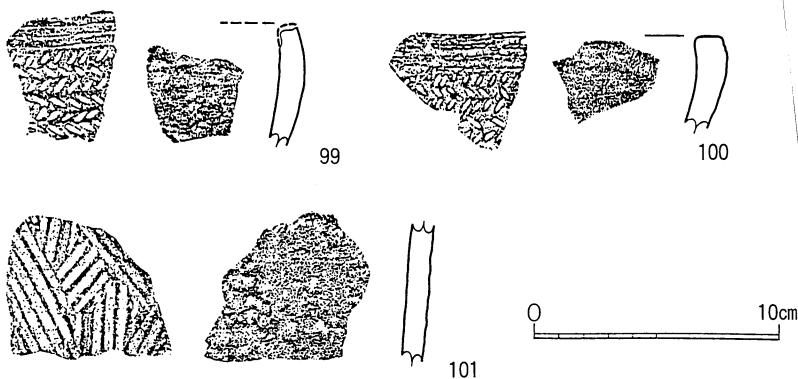


図36 土器実測図(4) (1/3)

見られる。135は外面に縦方向の山形押型文と横方向の楕円押型文を、内面の上部に原体条痕を施す。138～140は横・斜方向、136・141～143は縦・斜方向の山形押型文を施す。後者は厚手で、円筒形になるものであろう。

尚、原体の長さ、太さを知ることのできる資料がある。135（上部）は長さが約5.0cm、太さが約0.6cm、136は長さが約2.2cm、太さが約0.6cmと推定できる。

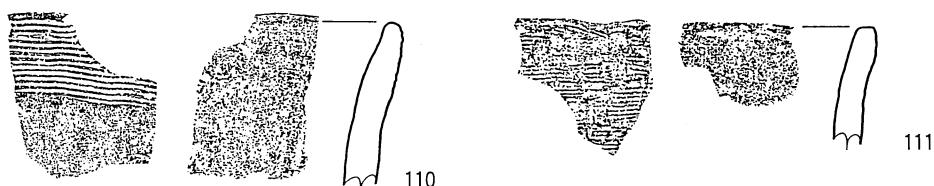
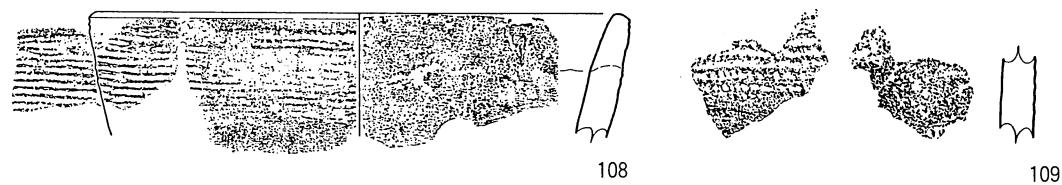
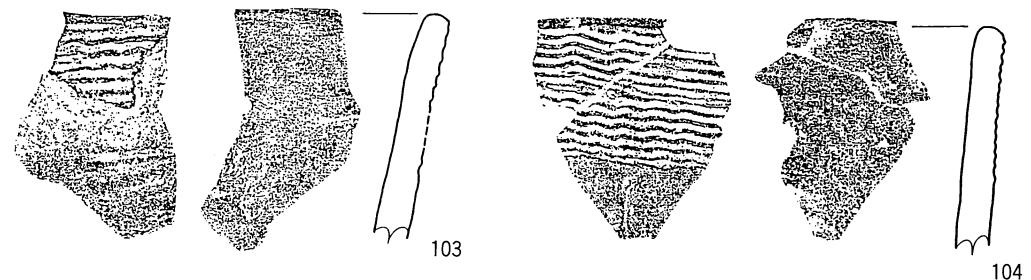
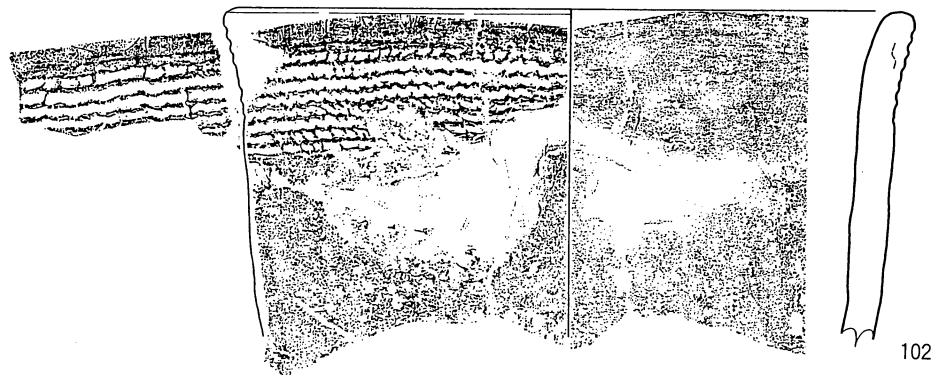
(6) 手向山式 (144～217・221)

1型式としての出土数（破片数しか知り得ないが）は最も多い。従って、山形押型文を施す胴部片を中心に、今回掲載できなかった資料も多い。

出土状況を見ると、7区以南の各区にまんべんなく分布している。出土層はIV層とV層がほぼ同数となっている。前述の通り、IV層とV層の層界付近のレベルが出土のピークであり、「IV層出土」としたものと「V層出土」のものが接合している例もある。

手向山式は押型文土器の最終段階とされ、撚糸文、貝殻文、微隆起線文、沈線・凹線文、刺突文、貼付突帯といった多種の文様が（単独あるいは複合して）認められる。これらの文様要素の中には次期に位置づけられる平桙式に続くものもあり、所属の判別の困難な個体も多い。口縁部が外反し、胴部中央部が屈曲する形態が基本形と考えられるが、先に見た22・23や162のように胴部の屈曲がほとんど痕跡程度になっている例もある。貼付突帯は屈曲部近くに付く。

押型文は概して浅めで、155や164のように不明瞭になるものもある。166・167も外面文様は、極めて浅くくずれた押型文であろう。胎土中に雲母が混入している。同心円押型文（149・150・152・153）や菱目押形文（151・154・157）も見られる。154は山形押型文の変形で、数列おきに谷部の間隙に菱形を形成する。また186・190のような他の文様を持つ個体の内面や、202・203のように沈線文を施す個体の地文、あるいは198・216のように、貼付突帯・凹



0 10cm

図37 土器実測図(5) (1/3)

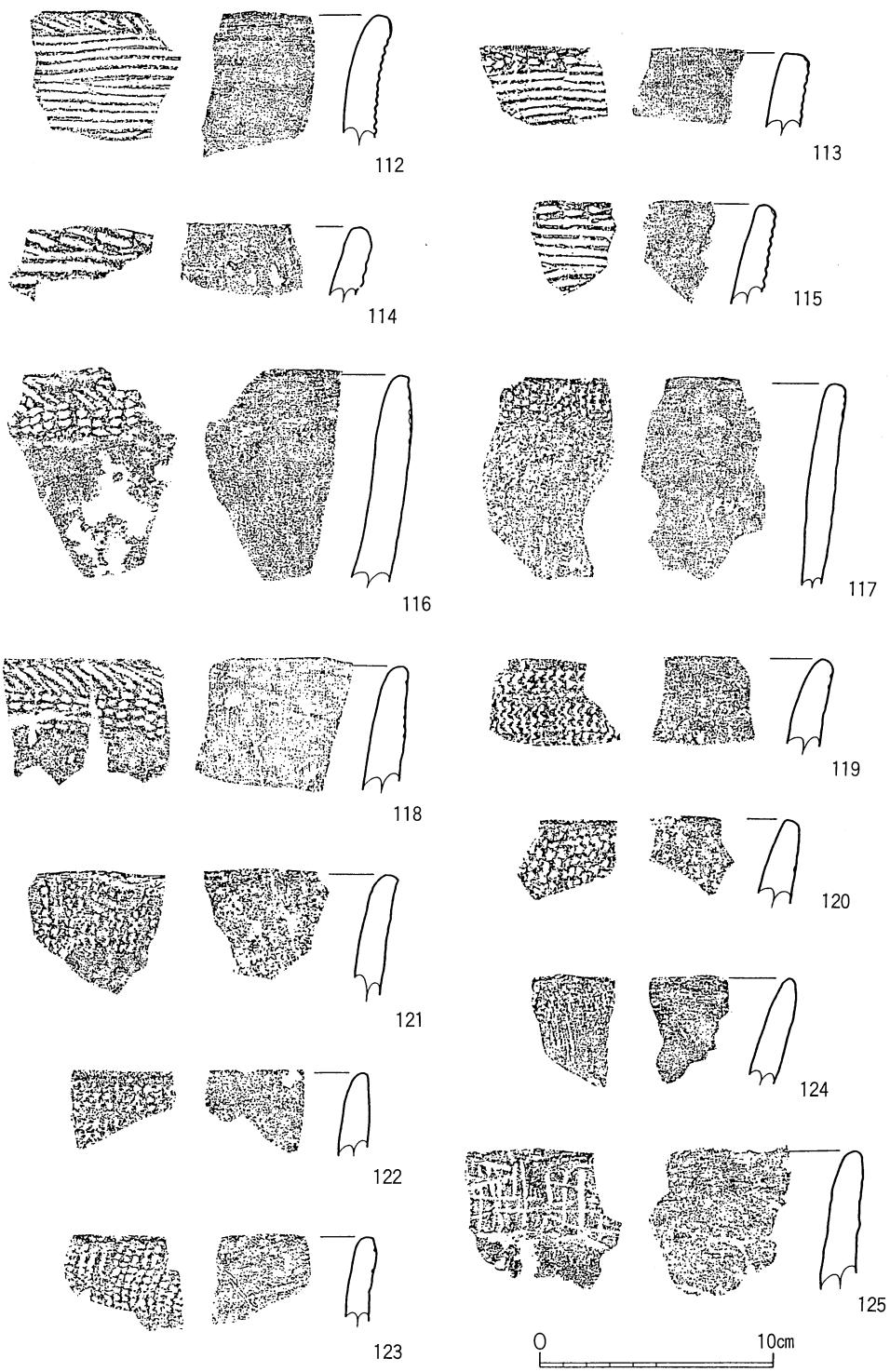
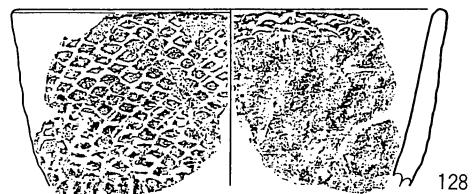


図38 土器実測図(6) (1/3)



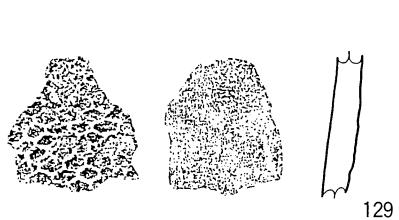
126



128



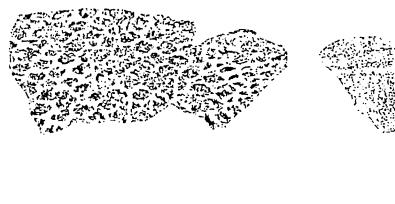
127



129



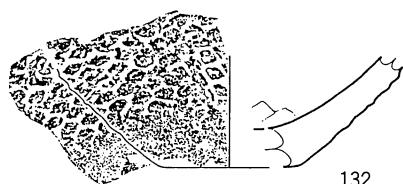
130



131



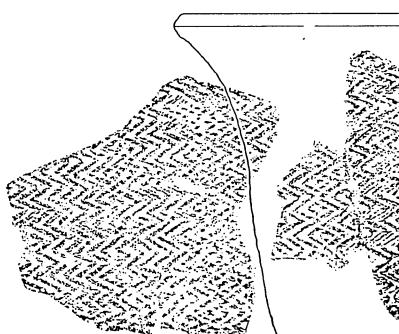
133



132



134



135

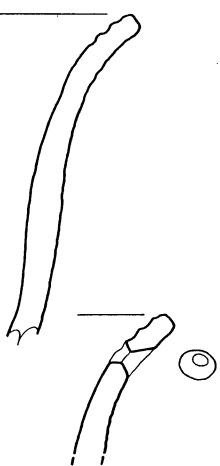


図39 土器実測図(7) (1/3)

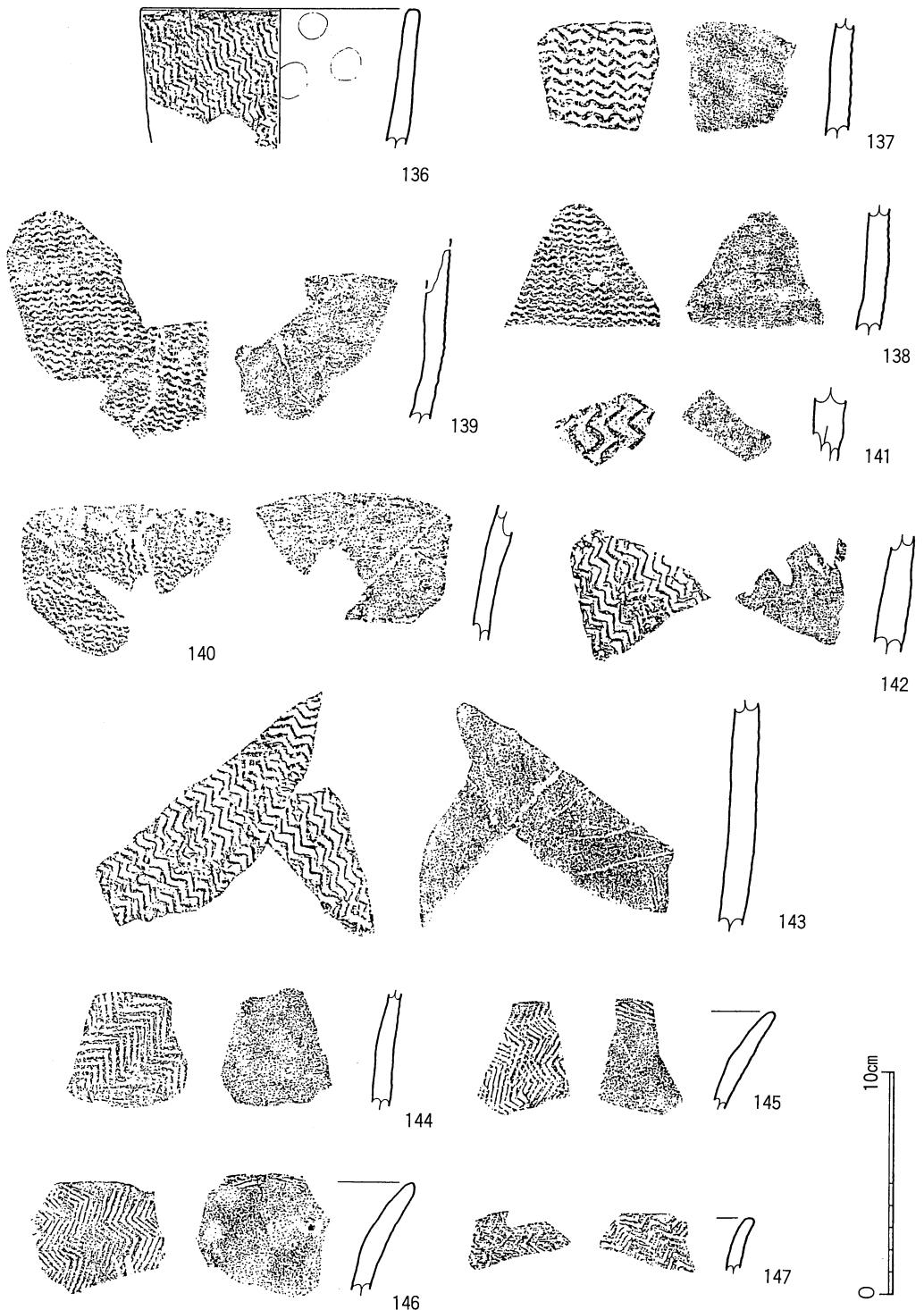


図40 土器実測図(8) (1/3)

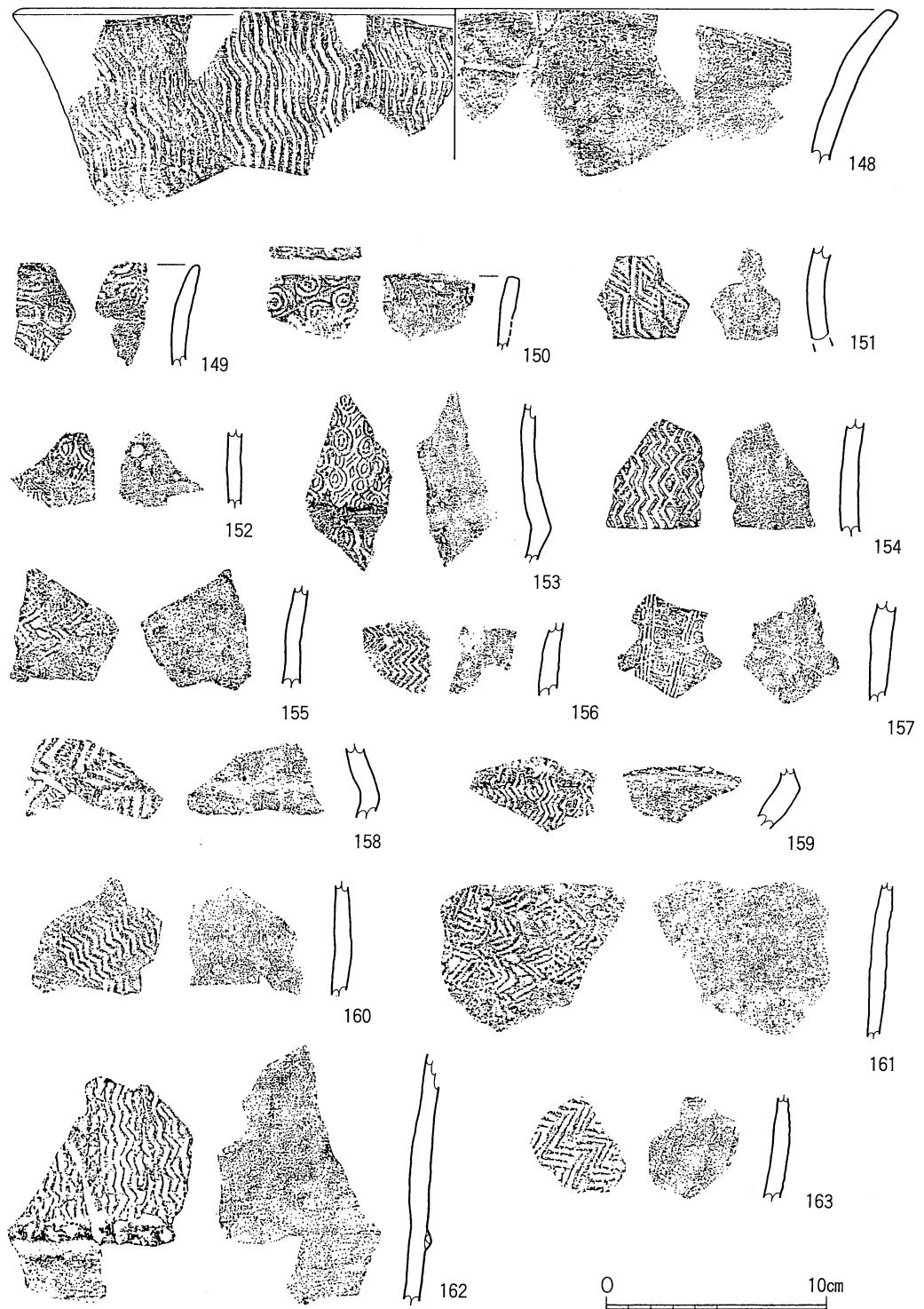


図41 土器実測図(9) (1/3)

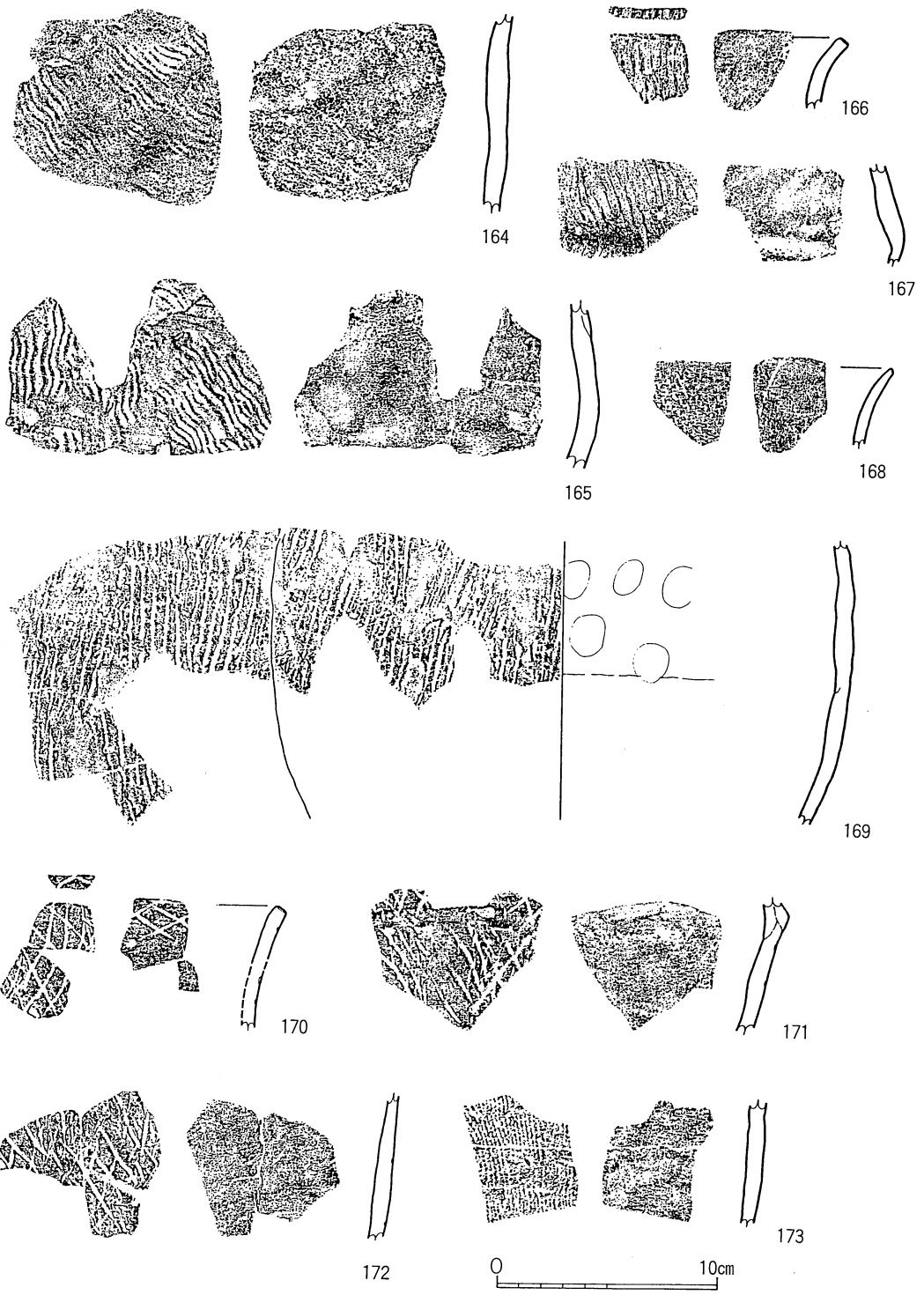


図42 土器実測図(10) (1/3)

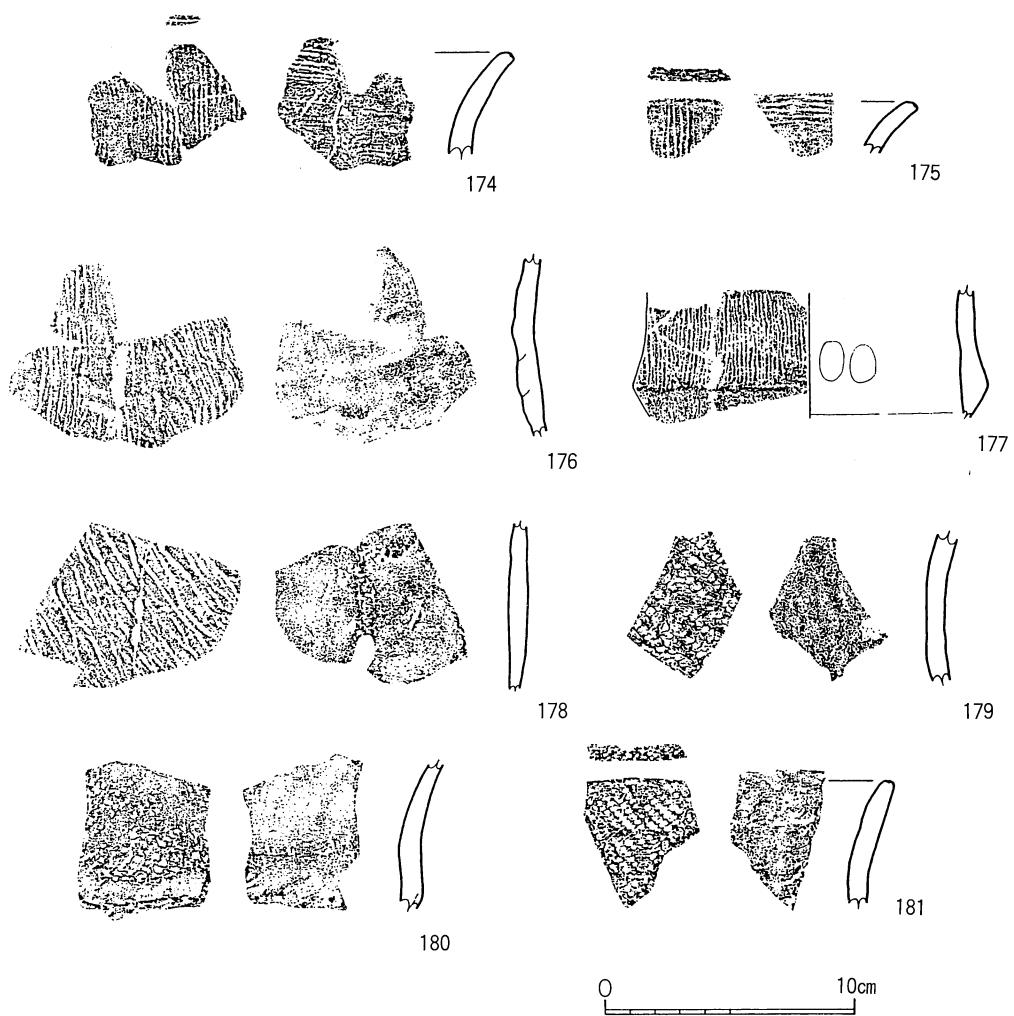
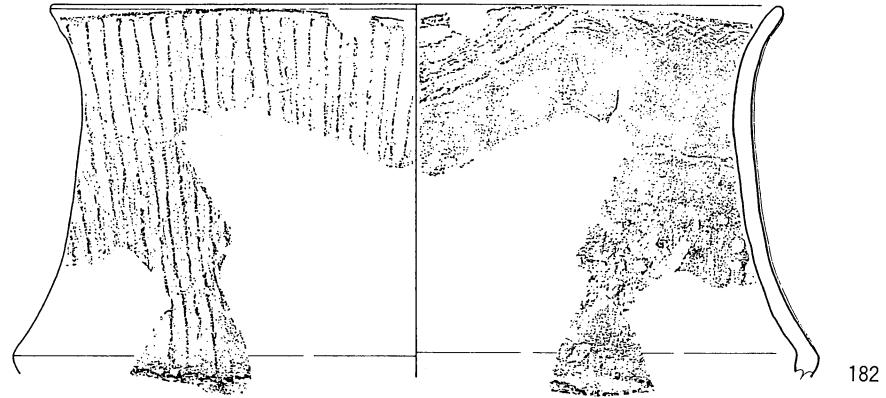


図43 土器実測図(11) (1/3)

線文を施す個体の地文として押型文が施文される場合もある。このように山形押型文や撚糸文を地文とする例は多数あると推測されるが、不明瞭になっている場合が多い。

撚糸文には0段と1段の原体が認められる。判別可能なものについては観察表に記している。170～172は網目撚糸文である。180は不規則方向に縄目の圧痕が見られる。1段Rの撚紐を押圧施文したものか。

168は貝殻腹縁圧痕文、182～188は外面に貼付の微隆起線文を施す。182は頸部がしまる壺に近い器形である。外面にわずかながらススが付着している。内面上部には微隆起線文と山



0 10cm

図44 土器実測図(12) (1/3)

形押型文が施文される。

189～191は口縁部に、202・203は胴部に沈線文が付される。尚、本報告では幅が狭く、断面形が「V」字に近い場合を沈線文、幅広で断面形が「U」字のものを凹線文と称する。

凹線文を施す一群は数量的に目立つ存在である。多くの場合、刺突文を付す貼付突帯と組み合わせとなる。全体形のわかる資料は少ないが、波状口縁が多くなり、198に見られるように、胴部の屈曲はわずかに痕跡を残す程度となる。文様モティーフから、正方形基調(211)、三角形基調(196～199・204～210)、円形基調(213・214)の3種に類型化できる。

215は3本単位の浅い平行凹線文を施す。胴部の屈曲からここに位置づけたが、塞ノ神式の文様に似ていることもあり、位置付けには尚、検討の余地がある。

216・217は細い、刺突文を付した貼付突帯を密に巡らす。221は微細な貼付突帯を持つ。

(7) 縄文系土器 (181)

外面に2段L Rの縄文を施す。小破片のため反転復元は行なわなかったが、口径約13cm程度の小形の鉢か壺と推測される。口縁部がゆるく外反し、胴部の張る器形であろう。編年の位置は要検討。

(8) 平柄式・平柄式の前段階の土器 (212～214・218～220・222～247)

本遺跡では典型的な平柄式はあまり多く出土していない。凹線文・刺突文・縄文から成る文様構成は平柄式のそれであるが、口縁部がなだらかに外反するものが多い。平柄式の特徴である口縁部の肥厚が見られるのは前出の57のみ(232は肥厚しているように見えるが、これは瘤状の突起部分)である。頸部で屈曲して内弯気味に立ち上がる口縁部も皆無である。

胴部では、結節縄文を施すものが数点認められる(242・244)。結節部のみの回転施文と考えられるが、242は2段R Lの原体で結節部は1段L(やや不明瞭)、244は2段L Rの原体で、結節部は1段Rの撫りであることから、1段の縄を撫り合わせた際の末端部の処置の結果である可能性もある。この結節縄文も平柄式の特徴であるが、全形がわからぬいため厳密な意味での時期の特定はできない。

平柄式の前段階としたものは、繰り返しになるが、文様パターンについては平柄式と変わることろはない。口縁部は波状のものが多くなり、貼付突帯も波うったり、弧を描いたりしている。

212～214は胴部に凹線文・刺突文を、219・220は貼付突帯の間に波状の凹線文を施す。縄文の原体は2段L Rが卓越する。239～241は無節の縄文(1段Rか)が施文される。この個体には貼付突帯の間に丹塗りがなされている。

229・230など、胎土中に雲母を含む個体もある。

(9) 塞ノ神式 (251～284)

貝殻腹縁圧痕文(251～260・265)、貝殻腹縁圧痕文+押引文(261)、貝殻腹縁圧痕文+条

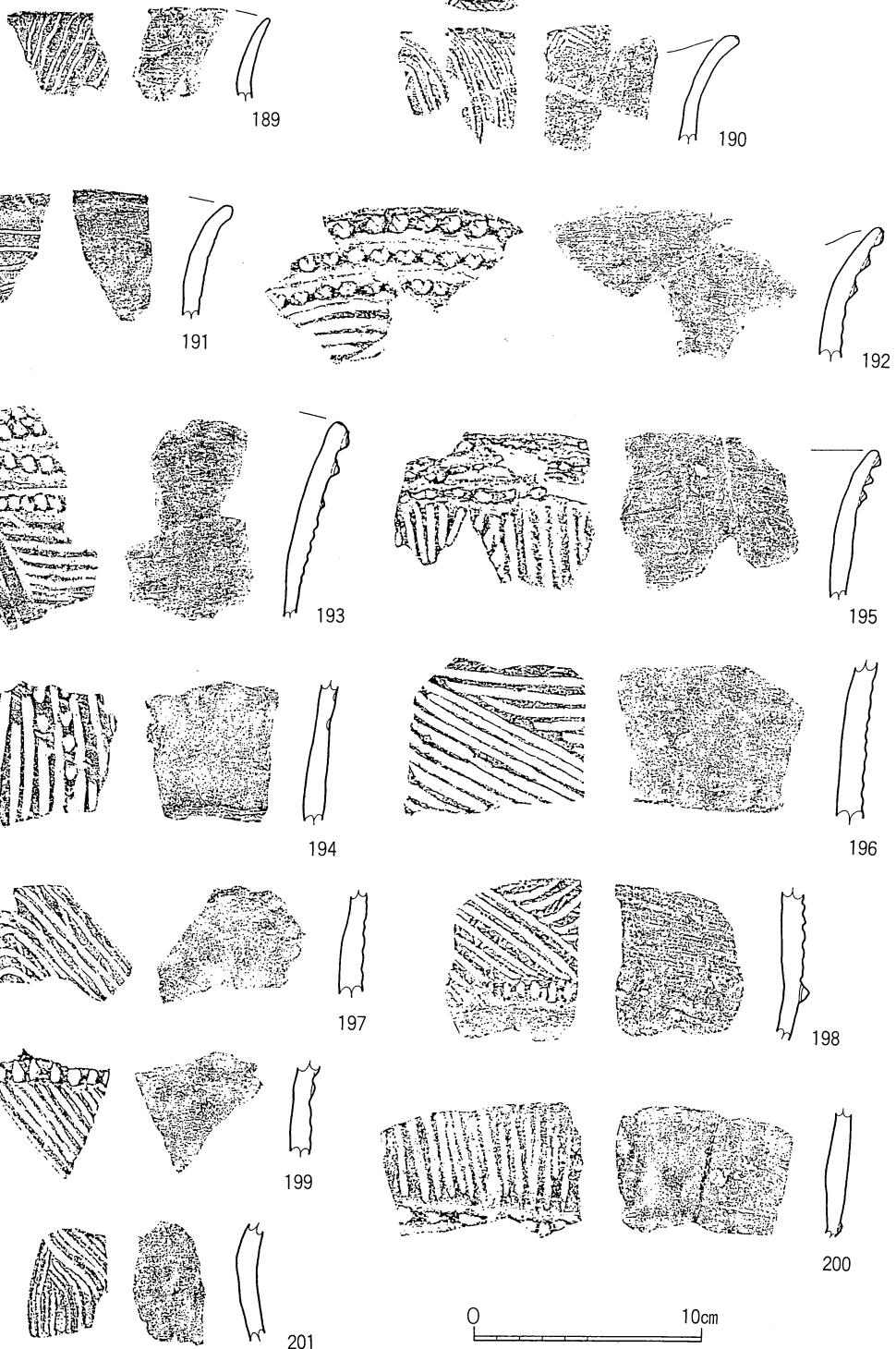


図45 土器実測図(13) (1/3)

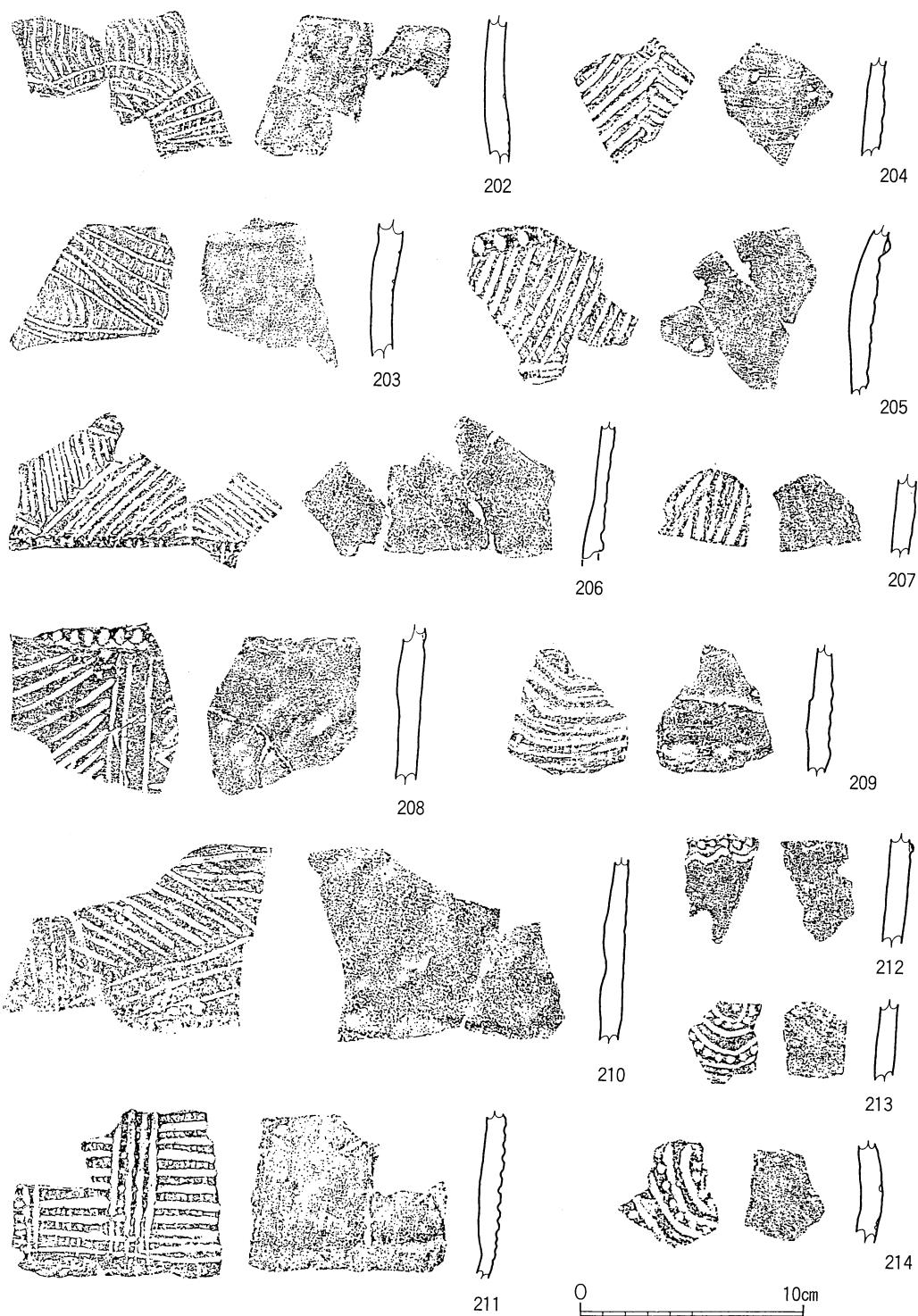


図46 土器実測図(14) (1/3)

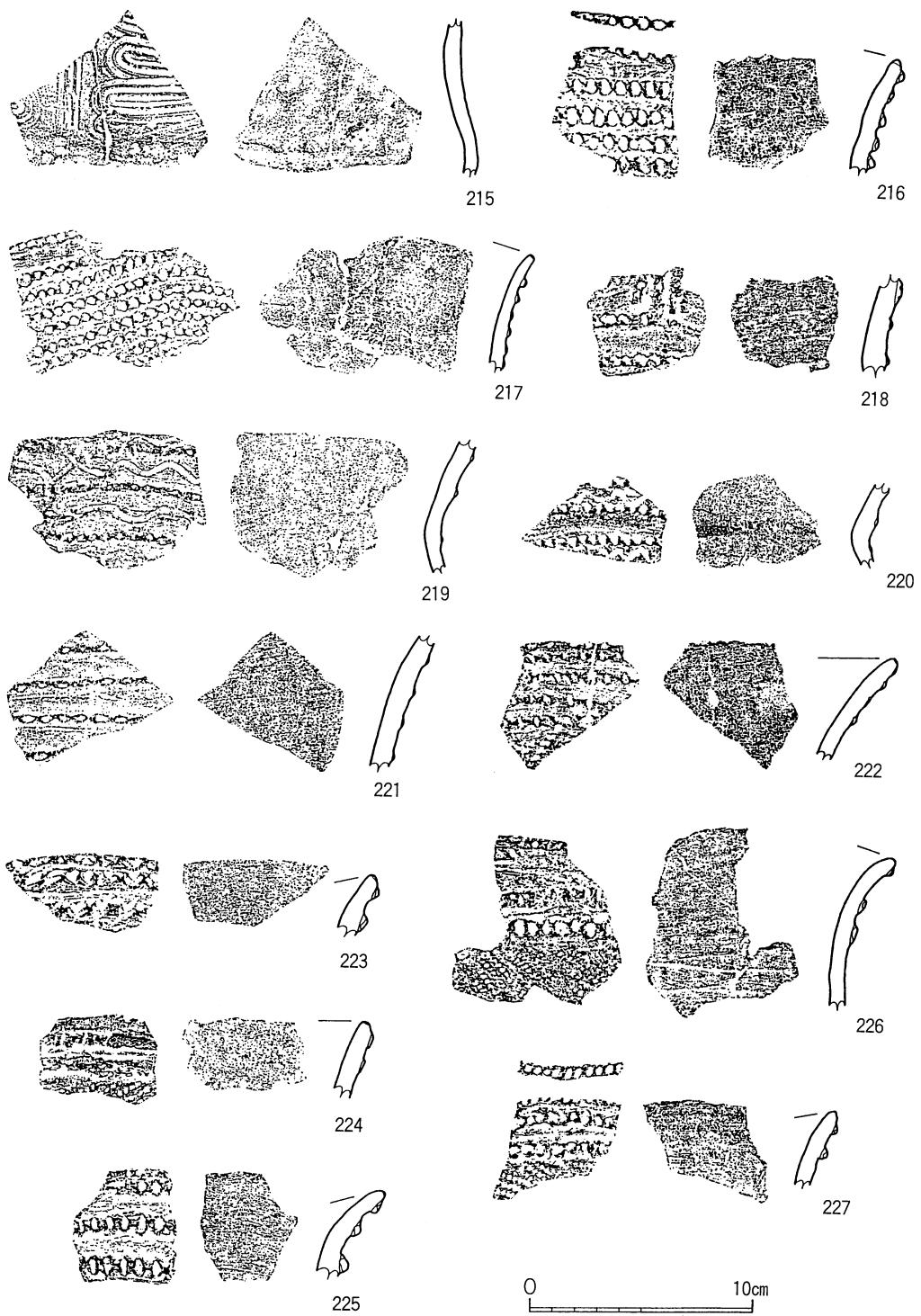
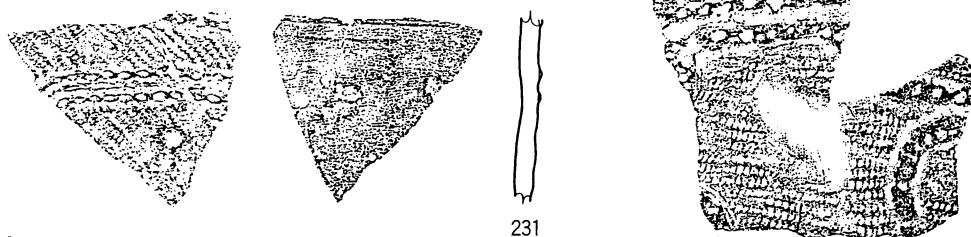
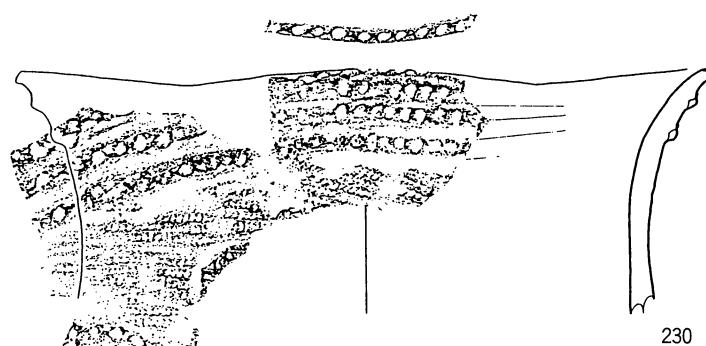
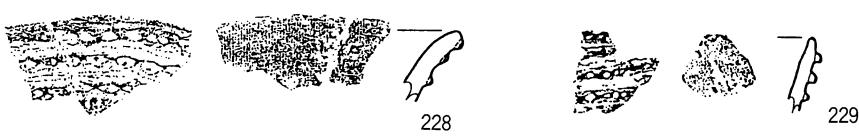


図47 土器実測図(15) (1/3)



230B (拓影)

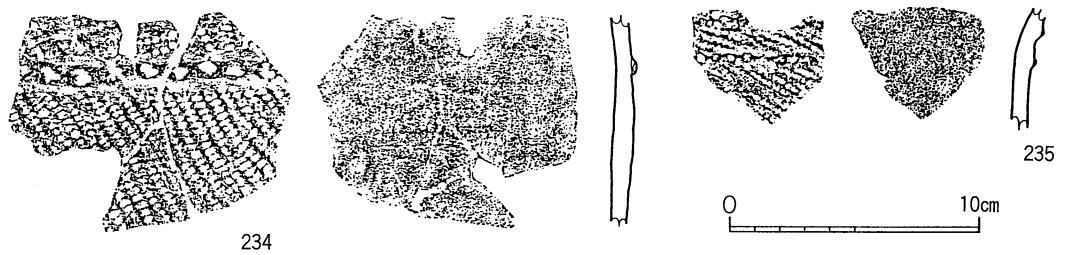
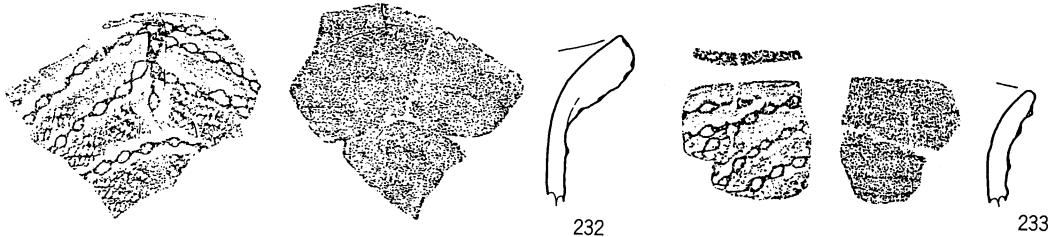


図48 土器実測図(16) (1/3)

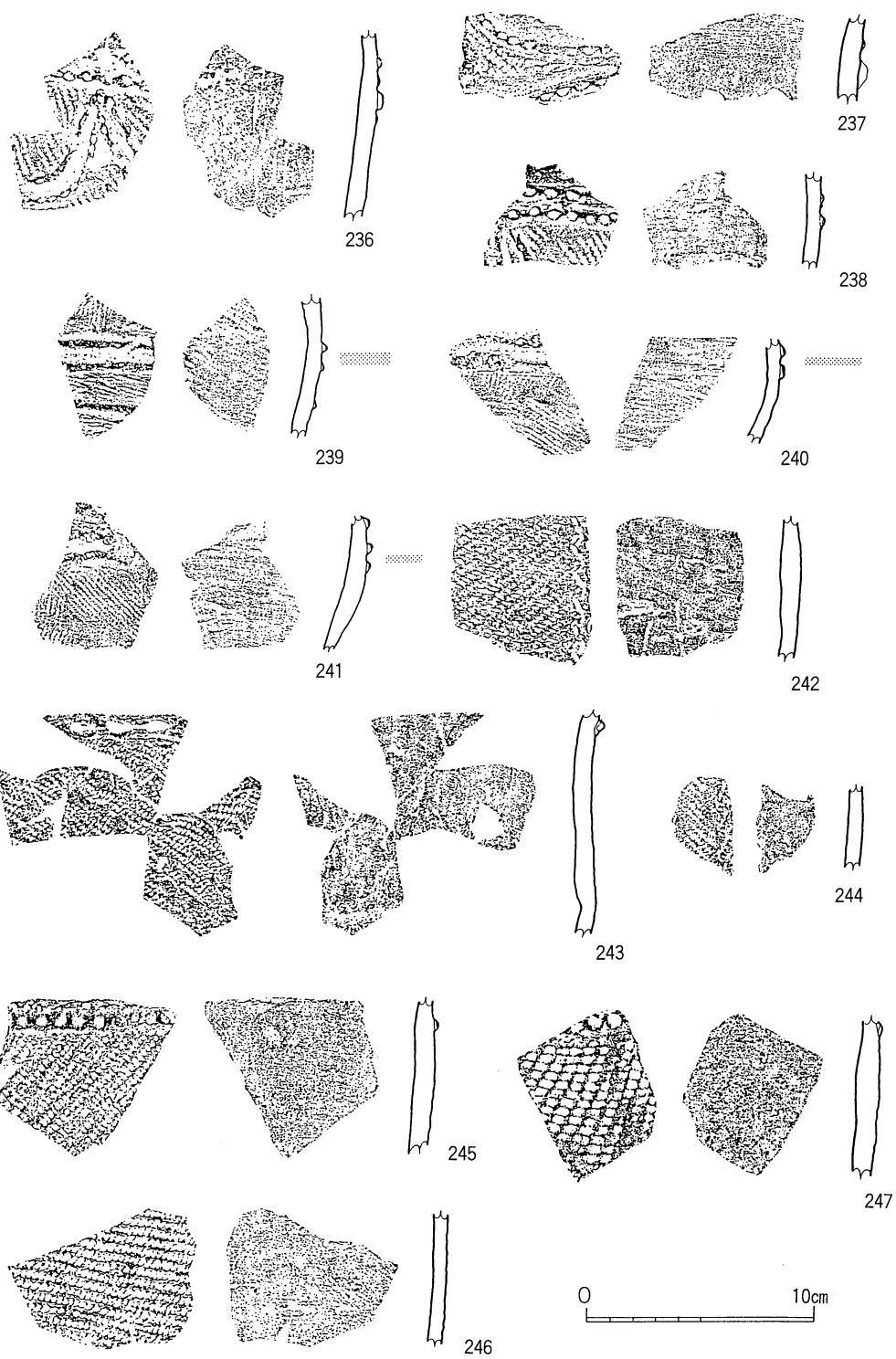


図49 土器実測図(17) (1/3)

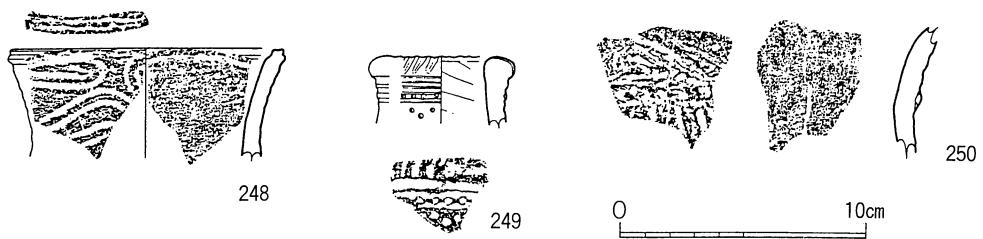


図50 土器実測図 (18) (1/3)

痕文 (262~264)、貝殻腹縁圧痕文+沈線文 (267・276~279)、刺突文・短沈線文 (266・268~270)、押引文 (271)、条痕状沈線文 (272~274)、沈線文+縦方向撚糸文 (280・281)、区画沈線文内撚糸文 (282)、無文 (283・284) などの文様パターンがある。これらは単純化するならば、A. 貝殻 (圧痕・条痕・押引) 文と条痕状沈線文を施す一群 と、B. 沈線文・撚糸文の一群 とに大別できる。後者は出土量は少ない。さらに、器形 (特に口縁部の形態) に関して、I. 頸部で明瞭な稜線を形成して屈曲する口縁部 と、II. どちらかというと直口気味の形状になる口縁部 という二群の存在が認められる。文様と器形との相関関係ははっきりしない。内面調整は粗く、ケズリに近いものが多い。

276~279は同一個体で、頸部付近に貝殻腹縁圧痕文を、胴部に細い沈線文を施す。胴部が張り、球形に近くなると見られる。

(10) 条痕文系土器 (101・286)

出土量は少ない。うち 2 点 (53・286) は G-2・3 区より出土している。

286は口唇部に刻目を、外内面に条痕文を施す。条痕文の原体は、貝殻であろうが、特定はできない。特に外面のそれは浅く、凹部・凸部の幅も一定ではない。

101は 4 本単位の平行凹線文を施すもので、内面はナデ調整である。ここに含めたが、位置付け等はさらなる検討を要する。

以上、型式ごとにそれぞれの特徴を述べてきた。特に、出土量の多かった手向山式や平桙式などについて、既存のカテゴリーの認識と帰属が問題となる。今回は、縄文の有無や、凹線文・刺突文の組み合わせの出現を指標に平桙式を認識している。しかしながら、そのほとんどを平桙式前段階と仮称したように、手向山式との近縁性も色濃く認められる。このことについては、若干ながらまとめて触れてみたい。

また、今回の報告で掲載した資料の型式ごとの割合は、(知るべくもないが) 本来の在り

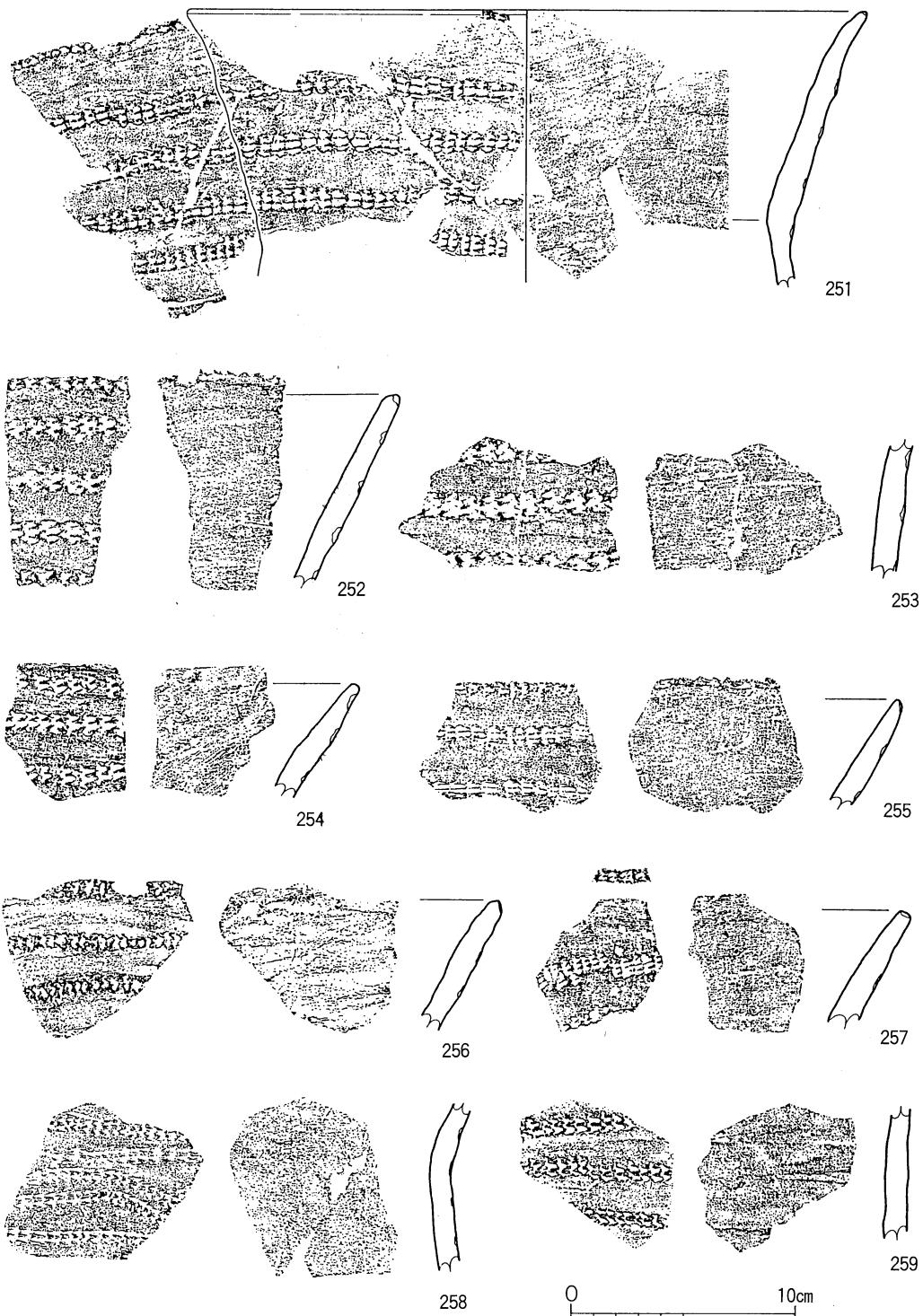


図51 土器実測図(19) (1/3)



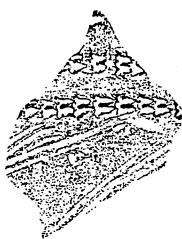
260



261



262



263



264



10cm

265



266



267

図52 土器実測図(20) (1/3)

方と大きく異なるおそれがある。それを補正するため、表4に、認識できた早期土器の破片（底部除く）の型式別の総数と比率を示している。

これより以下は、数型式にまたがる分類単位となる。

(11) 壺形土器 (248~250)

近年、その存在が認識されるようになった。本遺跡で確認できたのはこの3個体のみである。いずれも小さな破片で全体形は知り得ない。

248は2本の平行沈線で曲線を描く。215と似た文様パターンを有する。249は口縁部が肥厚し、口唇部と外面に凹線文・刺突文が施文される。250は貼付突帯の上に刺突文、その上下に凹線文が施される。これらは平桙式あるいは平桙式前段階に比定できよう。

(12) 底部 (286~291)

おそらく、手向山式から平桙式にかけてと推測されるものの、所属型式の確定しない底部を集めて掲載している。

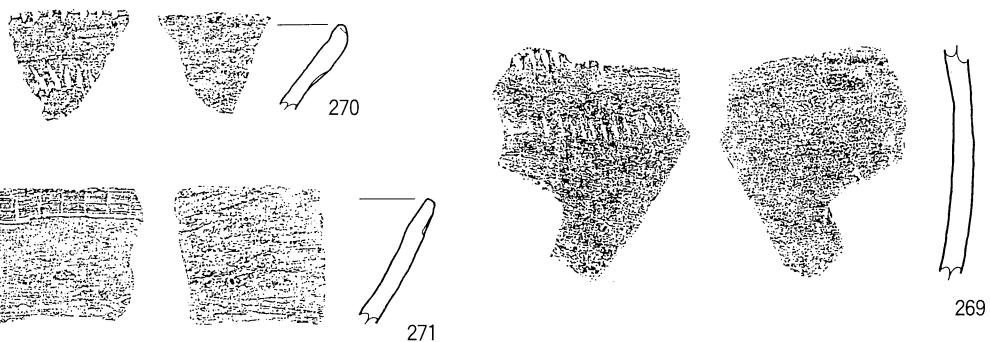
286・289は著しい上げ底となるもので、手向山式のそれと見られる。287は底面外周に粘土紐を貼り付けている。289・291にも、あまり明瞭ではないが同様の製作技法が見られる。いずれもⅡ層・Ⅳ層出土。



挿入図版1. Ⅳ層遺物出土状況



268



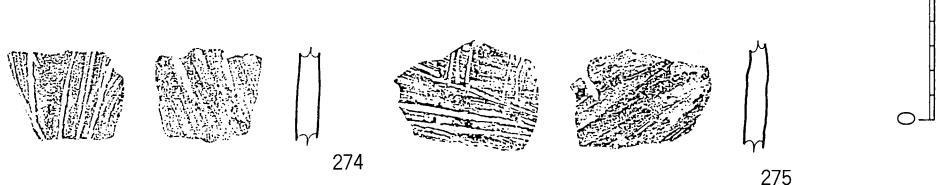
270

271

272



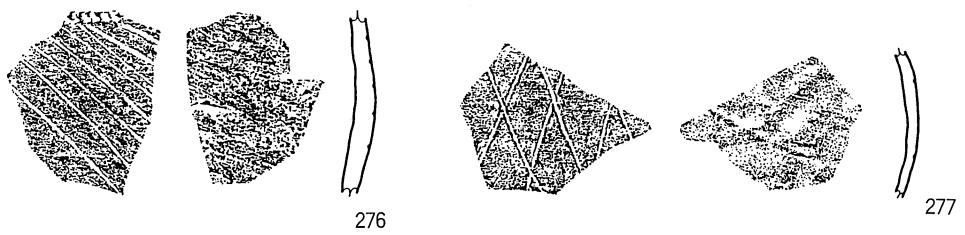
273



274

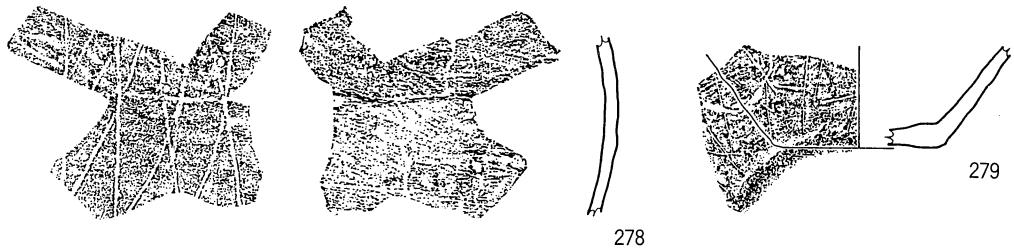
275

図53 土器実測図(21) (1/3)



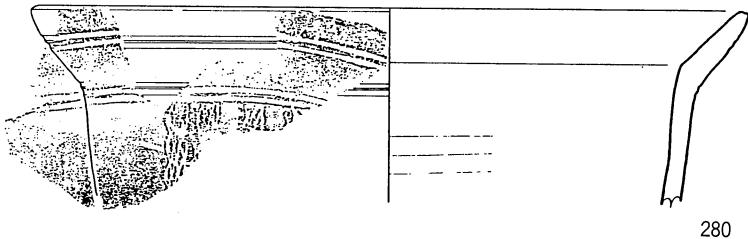
276

277



278

279



280



281

10cm
0

282

図54 土器実測図(22) (1/3)

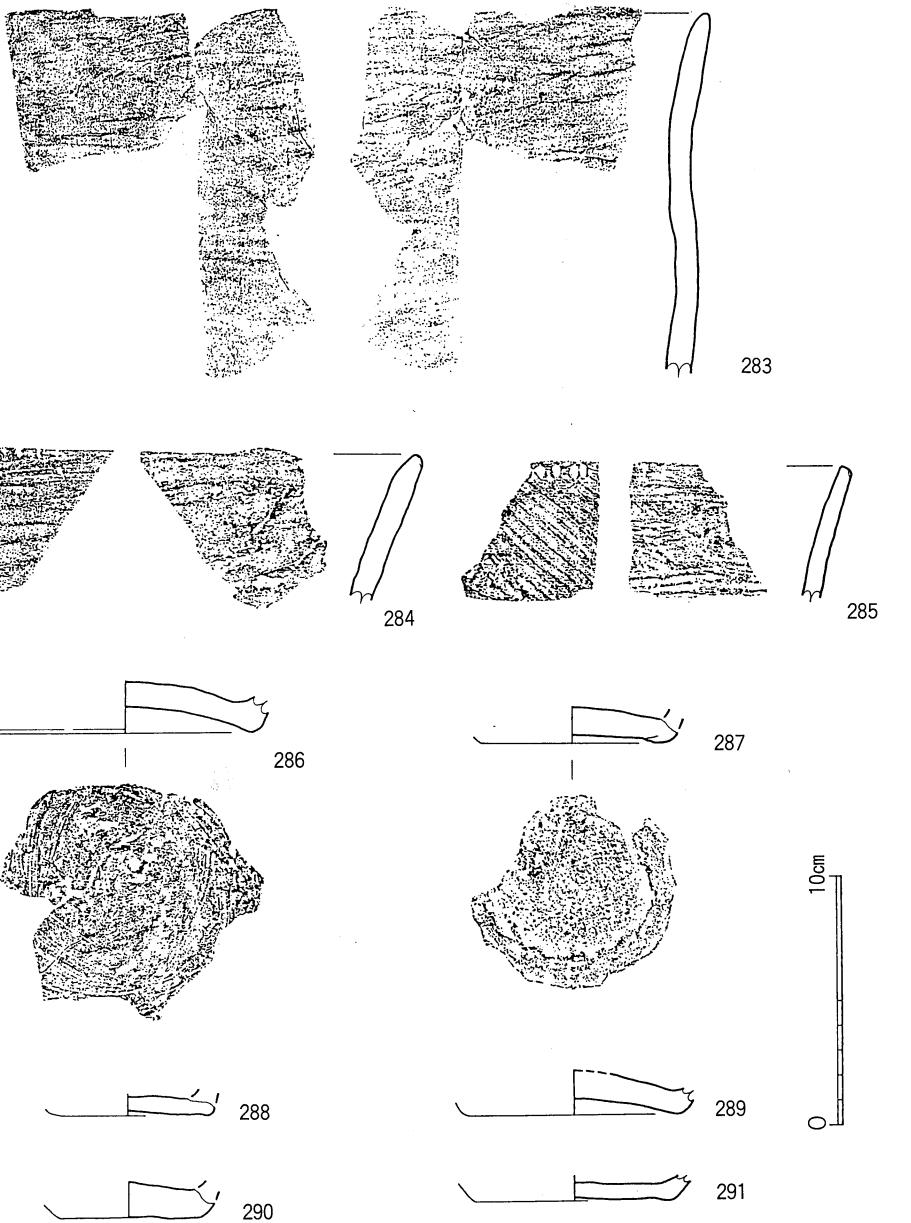


図55 土器実測図(23) (1/3)

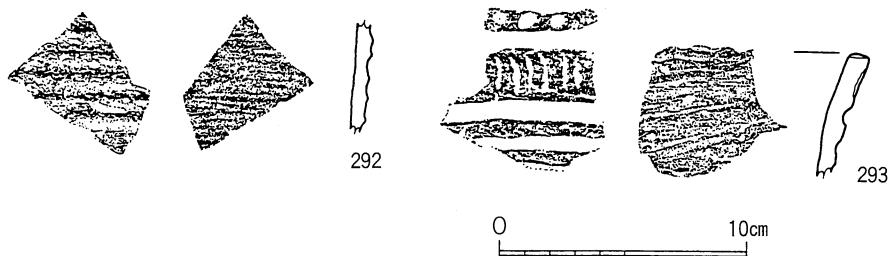


図56 土器実測図 (24) (1/3)

貝殻文円筒土器	条痕文円筒土器	押型文系土器	手向山式
260	84	110	1256
9.32(%)	3.01(%)	3.94(%)	45.0(%)
平 植 式	塞ノ神式	条痕文系土器	総 計
489	587	4	2790
17.5(%)	21.0(%)	0.14(%)	100(%)

注 底部で所属型式の判明するものは計上している。

無文土器も同様に所属型式の判明するものは計上し、それ以外は総数から除外している。

平植式前段階としたものは、平植式の中に含めた。

表4 各型式土器の出土破片数と百分率

(13) 前期～後期土器 (292・293)

Ⅲa層を中心に、ごく少量の前期、後期土器が出土している。

292は貼付の微隆起突帯を施す轟式である。内面は貝殻条痕による調整がなされる。

293は外面に貝殻腹縁圧痕文と凹線文を施文する。内面は粗い工具ナデ調整。後期の岩崎上層式であろう。

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
59	E-10	V	貝殻条痕　内工具ナデ		④にぶい黄橙 ④灰黄褐・黒褐	
60	B-13	V	貝殻条痕　内ナデ	C	④明赤褐　④灰褐	
61	D-12	IV	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ナデ	B・C	④灰褐　④にぶい褐	楔形貼付突帯
62	C-13	V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内丁寧なナデ	A	④④にぶい橙	楔形貼付突帯
63	C-11 D-8	V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ナデ ④刻目	B	〃	楔形貼付突帯
64	B-13	V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ナデ	A	〃	楔形貼付突帯
65	D-12	V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ナデ?	C	④褐・黒褐　④にぶい褐	
66	B-13	V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ケズリに近いナデ	A	④灰褐　④にぶい赤褐	楔形貼付突帯
67	B-13	V	〃	A	④にぶい褐　④明褐	
68	C-13	V	貝殻条痕　内ナデ	A	④暗褐　④橙	角柱
69	D-12	IV	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ケズリに近いナデ	A	④にぶい黄橙　④橙	
70	C-12	V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ナデ		④にぶい褐　④明褐	
71	D-12	IV	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ナデ	B	④にぶい橙　④灰黄褐	
72	D-10-11	IV	〃	A	④にぶい褐　④にぶい赤褐	
73	D-9	V	〃		④にぶい褐　④明赤褐	
74	B-12	IV	〃	A	④にぶい黄橙　④にぶい橙	
75	C-13	V	貝殻条痕のちナデ? 貝殻腹縁圧痕文 内ケズリに近いナデ		④灰褐・にぶい橙 内にぶい黄橙・黒褐	
76	D-12	II	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 内ナデ	A	④④橙	
77	B-13	IV	貝殻腹縁圧痕文　内ナデ	A	④灰褐 内にぶい橙	角柱
78	B-14	V	沈線文 内ナデ ④丁寧なナデ	A	④内④にぶい橙	角柱
79	B-14	IV	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文・沈線文 内ナデ ④丁寧なナデ	A・B	〃	角柱
80	B-13-14 C-12	IV V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文・浅い沈線文 内ナデ ④丁寧なナデ	A・B	〃	
81	C-12	IV V	貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文・沈線文 内ナデ ④丁寧なナデ		〃	
82	B-14	IIIa	沈線文 内ナデ ④丁寧なナデ	A	〃	
83	B-13	V	貝殻腹縁圧痕文・沈線文 内ナデ		④明褐　④黒褐	

表5 土器観察表(3)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混人物)	色調	備考
84	C-12	II	㊂短沈線文 ㊂ナデ	B	㊂㊂明褐灰	
85	C-11	V	㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊂丁寧なナデ ㊂刻目	A	㊂にぶい褐・灰褐 ㊂灰褐・にぶい褐	
86	D-12	V	㊂貝殻条痕 ㊂丁寧なナデ	礫	㊂淡黄・黒褐 ㊂にぶい黄橙・にぶい黄褐	
87	E-12	I	㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊂ナデ ㊂刻目	B	㊂褐 ㊂明黄褐	
88	C-13	IV	㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊂ナデ ㊂刻目	B	㊂橙・にぶい赤褐 ㊂橙	
89	B-13	V	㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊂—— ㊂刻目	A	㊂にぶい褐 ㊂——	
90	D-11	IV	㊂貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 ㊂丁寧なナデ ㊂刻目	A・B	㊂橙 ㊂明赤褐	
91	D-11	IV	㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊂ナデ ㊂刻目	A・B	㊂㊂橙	
92	C-12	IV	㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊂ナデ ㊂刻目	A・B	㊂にぶい橙 ㊂橙	
93	C-13	IV	㊂貝殻腹縁圧痕文 ㊂ナデ	A	㊂明褐灰 ㊂にぶい橙	
94	B-13	IV	㊂竹管文		㊂㊂にぶい橙	
95	D-12	IV	㊂貝殻条痕・貝殻腹縁圧痕文 ㊂ナデ	B	㊂にぶい橙 ㊂明赤褐	
96	D-11	IV	㊂粗い条痕 ㊂丁寧なナデ	A・B	㊂橙 ㊂橙・にぶい赤褐	
97	C-8 D-9	IV II	㊂ナデ・貝殻腹縁圧痕文 ㊂ナデ	A・B	㊂明褐 ㊂橙・暗赤褐	
98	C-11	IV	㊂短沈線文・貝殻腹縁圧痕文 ㊂丁寧なナデ	A	㊂浅黄 ㊂灰黄	
99	SA7		㊂短沈線文 ㊂丁寧なナデ	A	㊂にぶい黄・浅黄 ㊂にぶい黄橙	
100	F-9	IV	㊂貝殻腹縁圧痕文・短沈線文 ㊂丁寧なナデ	A・D	㊂浅黄 ㊂にぶい黄橙	
101	E-9	IIIa	㊂平行凹線文 ㊂ナデ	B	㊂㊂にぶい橙	
102	C-12	II V	㊂ナデ・(貝殻?)押引状条痕文 ㊂ナデ	A・B 礫	㊂にぶい黄橙・灰黄褐 ㊂にぶい黄橙	
103	D-10	V	㊂ナデ・(貝殻)押引状条痕文 ㊂丁寧なナデ	B	㊂褐灰 ㊂にぶい黄橙	
104	E-10	IV	㊂ナデ・(貝殻)押引状条痕文 ㊂丁寧なナデ	B	㊂にぶい黄橙・褐灰 ㊂にぶい黄橙	
105	F-9	IV	㊂(貝殻)条痕文 ㊂丁寧なナデ	B	㊂㊂にぶい黄橙	
106	B-13	V	㊂(貝殻)条痕文 ㊂ナデ	B	㊂にぶい黄橙 ㊂にぶい橙	
107	B-14	IV	㊂(貝殻?)条痕文 ㊂ナデ		㊂にぶい橙 ㊂にぶい橙・褐灰	
108	B-13 D-11	IV II	㊂ナデ・(貝殻)条痕文 ㊂ナデ		㊂灰黄褐 ㊂褐灰・にぶい黄橙	

表6 土器観察表(4)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
109	F-10	V	② 2本单位の(貝殻?)押引状条痕文 内ナデ	B・C	④ 暗灰黄 ④ 浅黄	
110	D-11	IV	② ナデ・(貝殻)条痕文 内ナデ	B	④ にぶい黄橙・灰黄褐 ④ にぶい黄橙	
111	C-12	IV	② (貝殻)条痕文 内ナデ	B	④ にぶい黄橙・灰黄褐 ④ にぶい黄橙	
112	D-12	IV	② (貝殻)条痕文・同じ原体?による短沈線文 内丁寧なナデ	B	④ 黄灰・灰白 ④ 淡黄・黒	
113	D-11	IV	〃	B	④ 灰褐 ④ にぶい橙	
114	B-13	V	〃	B	④ にぶい黄褐 ④ にぶい黄橙	
115	C-12	V	〃	B	④ にぶい黄橙 ④ 淡黄	
116	C-12	II	② 短沈線文・貝殻腹縁圧痕文 内丁寧なナデ	B	④ 褐灰・にぶい黄橙 ④ 明褐灰	
117	D-13	IV	② ナデ・貝殻腹縁圧痕文 内丁寧なナデ		④ にぶい橙	
118	D-8	V	② 短沈線文・貝殻腹縁圧痕文 内丁寧なナデ	A	④ 灰白 ④ 淡黄	
119	B-14	IV	② 貝殻腹縁圧痕文 内ナデ	A・B	④ にぶい黄橙	
120	D-12	IV	② 貝殻腹縁圧痕文 内——	C	④ 褐 ④ 明黄褐	脆弱
121	D-11	IV	〃	B	④ 灰褐 ④ 褐灰	
122	B-14	IV	② 貝殻腹縁圧痕文 内ナデ?	B	④ にぶい黄橙	
123	B-12	V	② 貝殻腹縁圧痕文 内ナデ	B	④ にぶい褐	
124	D-12	IV	〃		④ にぶい黄橙 ④ 黒	
125	E-9	V	② 沈線文 ② ケズリに近いナデ	B	④ にぶい橙 ④ 灰褐・にぶい橙	
126	B-13	V	② 工具ナデ・粗い条痕 内ナデ	B	④ 橙・にぶい褐 ④ にぶい褐	
127	E-7	IV	② 横方向樋円押型文 内ナデ・横方向樋円押型文		④ 赤褐 ④ 灰褐	
128	F-7	IV	〃		④ 暗赤褐 ④ 明赤褐・にぶい赤褐	
129	F-10	V	② 横方向樋円押型文 内丁寧なナデ		④ にぶい橙 ④ にぶい黄橙	
130	B-12	V	② 横方向樋円押型文 内ナデ		④ 橙 ④ にぶい黄橙	
131	E-7・8	V	〃		④ 橙 ④ にぶい橙・にぶい褐	
132	E-7	V	② ナデ・横方向樋円押型文 内ナデ		④ にぶい橙 ④ にぶい褐・灰褐	131と同一 個体?
133	E-10	IV	② 横・斜方向山形押型文 内ナデ	B	④ にぶい黄橙 ④ 明黄褐	

表7 土器観察表(5)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色 調	備 考
134	C-13	IV	㊂ 横・斜方向山形押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ にぶい黄橙 ㊂ 明黄褐	133と同一個体?
135	E-8	V	㊂ 横方向山形押型文 ㊂ ナデ・原体条痕		㊂ にぶい橙 ㊂ にぶい橙・浅黄	
136	D-8	V	㊂ 斜方向山形押型文 ㊂ ナデ		㊂ 灰褐 ㊂ にぶい黄褐	
137	E-9	V	㊂ 横方向山形押型文 ㊂ 丁寧なナデ	B	㊂ にぶい黄橙 ㊂ 灰黄	
138	F-7	V	㊂ 横方向山形押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ にぶい黄橙 ㊂ 灰褐	
139	F-7	IV	〃	B	㊂ 明褐灰 ㊂ 褐灰・にぶい黄橙	138と同一個体
140	F-7	IV	㊂ 横・斜方向山形押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ にぶい黄橙 ㊂ 浅黄	138と同一個体?
141	C-12	IV	㊂ 縦方向山形押型文 ㊂ 丁寧なナデ	B	㊂ にぶい橙・褐 ㊂ 明赤褐	
142	C-12	V	㊂ 斜方向山形押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ にぶい黄褐	
143	B-13 C-12	V IV	㊂ 斜方向山形押型文 ㊂ 丁寧なナデ	B	㊂ にぶい黄橙	142と同一個体
144	B-14	IV	㊂ 斜方向山形押型文 ㊂ ナデ		〃	
145	E-10	V	㊂ 縦方向山形押型文 ㊂ ナデ・横方向山形押型文		㊂ にぶい黄橙 ㊂ 灰黄	
146	E-10	V	㊂ 縦方向山形押型文 ㊂ ナデ・山形押型文(狭小)	B	㊂ にぶい黄橙 ㊂ 浅黄橙・灰黄	
147	D-11	IV	㊂ 縦方向山形押型文 ㊂ 横方向山形押型文	B	㊂ にぶい橙 ㊂ にぶい黄橙・灰黄褐	
148	E-11	IV	㊂ 縦方向山形押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ にぶい黄 ㊂ 灰白	
149	F-8	IV	㊂ 同心円押型文 ㊂ ナデ・同心円押型文		㊂ 灰褐 ㊂ にぶい橙	
150	C-12 D-11	IV V	㊂ ④ 同心円押型文 ㊂ ナデ・同心円押型文		㊂ にぶい黄橙	
151	E-7	V	㊂ 縦方向菱目押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ 褐灰 ㊂ にぶい橙・褐灰	
152	SA2		㊂ 縦方向同心円押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ にぶい橙 ㊂ 浅黄橙	
153	C-12	IV	〃	B	㊂ にぶい橙	
154	C-13	IV	㊂ 縦方向菱目押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ 浅黄橙 ㊂ にぶい黄橙・褐灰	
155	D-10	V	㊂ 菱目押型文 ㊂ ナデ		㊂ にぶい黄褐 ㊂ 黑褐	
156	C-13	II	㊂ 縦方向山形押型文 ㊂ ナデ	B	㊂ にぶい黄橙	
157	C-13	IV	㊂ 格子状押型文 ㊂ ナデ		〃	
158	E-9	V	㊂ 斜方向山形押型文 ㊂ ナデ		㊂ 淡黄 ㊂ にぶい黄橙	

表8 土器観察表(6)

No	遺構・区	層	調整および文様	胎土 (混入物)	色調	備考
159	E-7	IV	④縦方向山形押型文 ⑤ナデ		④灰褐 ⑤にぶい黄橙	スス付着著しい
160	C-8	IV	④斜方向山形押型文 ⑤ナデ		④にぶい橙 ⑤にぶい黄橙・灰黄褐	
161	D-10	V	④縦方向山形押型文 ⑤ナデ		④にぶい黄橙 ⑤暗褐	
162	C-12	V	④(貼付突帯)刺突文・縦方向山形押型文 ⑤ナデ	B	④淡黄 ⑤にぶい黄橙	
163	E-9	V	④縦方向山形押型文 ⑤丁寧なナデ		④にぶい褐 ⑤にぶい橙・にぶい黄褐	
164	B-14	IV	④斜方向山形押型文 ⑤ナデ		④⑤にぶい黄橙	
165	B-13	IV V	④縦・斜方向山形押型文 ⑤ナデ		〃	
166	D-12	I	④⑤押型文? ⑤ナデ	D	④橙 ⑤にぶい黄橙・褐灰	
167	D-11	IV	④押型文? ⑤ナデ	D	④にぶい黄橙・にぶい橙 ⑤にぶい橙・灰黄褐	166と同一個体
168	C-12	IV	④貝殻腹縁圧痕文 ⑤ナデ		④⑤にぶい黄橙	
169	C-12	II IV	④撚糸文 ⑤ナデ		④橙・明黄褐 ⑤橙	
170	E-7	III a	④⑤網目撚糸文 ⑤ナデ・網目撚糸文		④⑤にぶい黄橙	27と同一個体
171	D-7	V	④網目撚糸文 ⑤ナデ		④褐灰・にぶい黄橙 ⑤褐灰	27と同一個体
172	E-7	III a V	〃		④にぶい黄橙 ⑤灰	27と同一個体
173	D-12	I	④撚糸文 ⑤ナデ		④浅黄橙 ⑤にぶい褐	
174	C-8	IV	④撚糸文 ⑤ナデ・撚糸文	B	④にぶい黄褐 ⑤明黄褐・にぶい黄褐	
175	C-8	V	④⑤撚糸文 ⑤撚糸文?		④暗褐 ⑤褐	
176	E-10	IV	④撚糸文 ⑤ナデ	B	④⑤橙	
177	D-8	V	④丁寧なナデ・撚糸文 ⑤ナデ		④⑤浅黄・浅黄橙	
178	C-13	IV	④撚糸文(0段r) ⑤ナデ		④にぶい黄橙・灰黄褐 ⑤淡黄	
179	D-12	IV	④撚糸文(1段L) ⑤ナデ	A・B	④⑤にぶい橙	
180	D-8	V	④(押圧?)繩文(1段R) ⑤ナデ		④橙 ⑤橙・にぶい黄橙	
181	B-14	II	④繩文(2段L R) ⑤ナデ ⑤繩文		④浅黄・暗灰黄 ⑤浅黄	
182	E-10	IV	④微隆起線文 ⑤微隆起線文・横向山形押型文 ⑤山形押型文	B	④⑤橙・明黄褐	
183	D-10	IV V	④微隆起線文 ⑤ナデ		④明褐灰・灰褐 ⑤にぶい黄橙・灰黄褐	

表9 土器観察表(7)